

大野城市の戦争遺産 1

大野城市文化財調査報告書 第219集



2024

大野城市

序

大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦 665 年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。

本書では西南戦争から板付基地春日原住宅地区返還までの間に造られた防空壕跡や慰霊碑、米軍ハウスや米軍機の墜落地点を含む 81 件の戦争遺跡や証言等、平成 31 年から実施した地域の文化財調査の成果を報告いたします。

太平洋戦争終結から 80 年、そして板付基地春日原住宅地区返還から 50 年が経過する中、本書が学術研究はもとより、地域の歴史や文化財の理解と認識を深める一助となり広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、調査や報告書作成にあたり多大なるご指導とご協力を賜りました関係機関の皆様、市内外の多くの方々に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和 6 年 3 月 31 日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

例 言

1. 本書は平成 31 年度～令和 5 年度（2019 年 4 月～2024 年 3 月）に大野城市が実施した戦争遺産（戦争遺跡、建造物、石碑、文献、写真、証言、収蔵資料等を含む）の調査に関する報告書である。
2. 調査は山村智子、深町美佳、尾川絢香、鮫島由佳（現 愛知県陶磁美術館）、照屋真澄（現 奄美市教育委員会）、浅井毬菜、林潤也、石木秀啓が担当した。
3. 本書では明治 10（1877）年の西南戦争～昭和 47（1972）年の板付基地春日原住宅地区返還までの戦争遺産を報告している。
4. 米軍ハウス（通称）の定義は、「1940 年代後半～1970 年頃に米軍が駐留した基地の外に建てられた米兵及び軍属向けの住宅」のこととする。なお本書では板付基地春日原住宅地区の外、かつ大野城市（当時は大野町）内に建てられたものについて報告する。
5. 遺跡の写真は既存報告書掲載写真以外は、調査担当者が撮影した。所蔵資料については牛嶋茂が撮影した。
6. 用語で旧字体を新字体に、漢数字をアラビア数字に改めたものがある。
7. 名称については既存報告書に記載されている名称で記している。例えば、壕は「洞窟壕」や「防空壕」等、各報告書で異なる名称で報告されているが、用途や規模、文献上の名称、呼称等を精査して名称を決める必要があると認識している。
8. 戦争遺産分布図は太平洋戦争終結前（第 1 図）と後（第 2 図）とで分け、大野城市の戦争遺跡一覧表では名称、所在地、年代、種別、文献、現状、内容を記載し、個人墓地などを除く各遺跡を一覧表の番号順に列記している。
9. 第 1 表戦争遺跡一覧表に掲載した種別は、『福岡県の戦争遺跡』（福岡県教育委員会 2020）を参考にしつつ、8 つの種別（1 政治・行政関係、2 軍事・防衛関係、3 生産関係、4 居住関係、5 埋葬関係、6 交通・インフラ関係、7 記念・慰霊関係、8 その他）を設けた。
10. 第 1 図・第 2 図に記載した番号は戦争遺跡一覧表の番号と同一である。
11. 本書では「支那事変」、「日支事変」が日中戦争に対する当時の日本側の呼称で、市内の記念碑等に記されている文字をそのまま記載している。また太平洋戦争については、「大東亜戦争」、「アジア太平洋戦争」、「第 2 次世界大戦」と記載が異なり、統一はしていないが、同義である。
12. 戦争遺跡分布図および各戦争遺跡で使用した地図は国土地理院発行の 1/25,000 地形図『福岡南部』『太宰府』を使用した。
13. 本書の執筆は I・II・IV・VI 章を山村智子が担当し、III 章を山村・深町美佳・尾川絢香で分担しておこなった。V 章の特論は池田拓（宗像市教育委員会）と松野尾仁美（九州産業大学建築都市工学部住宅・インテリア学科）に依頼した。編集は山村が担当した。
14. 悉皆調査や証言記録、報告書作成に関しては下記の方々から、ご協力とご教示を得た。記して謝辞を申し上げる。（五十音順・敬称略）

（個人）

赤司清子、麻生政昭、池田満壽美、井手勲、伊藤啓二、伊藤慎二、伊藤英雄、井波徹夫、井

上準之助、井上菜也、井上善久、岩瀬利春、上野謹爾、大久保聡、岡田正弘、小田良美、貝田学、カスガシアター、川崎克敏、木下哲夫、木村敏美、空閑正子、小谷文昭、小林京子、嶋野孝男、関口健、高山豊、田中稔、田中泰彦、堤慎一郎、東司みどり、長未愛里、長未優里、永津裕之、中野秀孝、中村秀茂、洋見博、林真吾、藤武肇、古川学、牧三重子、増田千鶴子、松島一寅、松野尾仁美、水野邦夫、宮坂勝利、村田寛、森山啓子、森山陽介、山上高昭、山村信榮、山本修一、山本久子、吉田英俊、吉次康雄、吉松龍市

(団体)

アルルカン、牛頸公民館、牛頸平野神社氏子会、恵味うどん、大野小学校、大野城市民劇団迷子座、大野中学校、大和小学校、大和中学校、春日市、春日ベース・ハウスの会、粕屋町立歴史資料館、株式会社磯野商会ジョンソントウン管理事務所、株式会社宮田サイクル、上大和老松神社氏子会、上大和公民館、瓦田公民館、瓦田地祿神社氏子会、九州産業大学建築都市工学部住居・インテリア学科、公益財団法人永光霊園福岡中央霊園管理事務所、西戸崎公民館、雑餉隈公民館、雑餉隈恵比須神社氏子会、志賀商工会、下大和老松神社氏子会、下大和公民館、白木原公民館、白木原地祿神社氏子会、炭と葡萄、太宰府市文化ふれあい館、ちいさこべ幼稚園、筑紫野市歴史博物館、筑紫文化財研究所、筑前町立大刀洗平和記念館、仲島公民館、仲島地祿神社氏子会、万世特攻平和祈念館、福岡日米協会、福生アメリカンハウス、福生市郷土資料館、瑞穂町、瑞穂町郷土資料館けやき館、瑞穂町図書館、山田宝満宮氏子会、有限会社太平閣、渡辺鉄工株式会社

本文目次

I. はじめに	
1. 調査の経緯	1
2. 調査の過程	1
3. 調査の体制	2
II. 戦争遺産の位置と環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
III. 大野城市の戦争遺跡	
1. 各戦争遺跡の詳細	13
3 牛頸戦没者忠魂社 (大野城市牛頸)	13
6 絵馬「西南戦争図」 (大野城市牛頸)	13
8～18 壮烈ビルマ戦場の碑ほか10基 (大野城市牛頸)	14
19 慰霊碑比島派遣第三百三十八兵站病院 (大野城市牛頸)	14
20 皇紀二千六百年記念国旗掲揚台 (大野城市上大利)	15
21 石幟 (大野城市下大利)	15
22 潮井台 (大野城市下大利)	15
23 手洗鉢 (大野城市下大利)	16
24 御大典記念木 (大野城市仲畑)	16
25 日露戦役記念砲弾塔 (大野城市仲畑)	16
27 征露記念之碑 (大野城市山田)	17
29 花立 (大野城市雑餉隈町)	17
30 石幟 (大野城市白木原)	18
31 狛犬 (大野城市白木原)	18
32 石灯籠 (大野城市瓦田)	19
33 瓦田区忠魂碑 (大野城市白木原)	19
34 日露戦役記念碑 (大野城市瓦田)	19
35 忠魂碑 (大野城市瓦田)	20
36 忠魂奉讃碑 (大野城市瓦田)	20
37 忠魂奉祀資金献納者芳名碑 (大野城市瓦田)	20
38 忠魂奉祀資金献納者芳名碑忠魂家族 (大野城市瓦田)	20
39 戦没者墓碑銘 (大野城市瓦田)	21
40 石幟 (大野城市瓦田)	21
41 戦没者哀頌碑 (大野城市瓦田)	22
42 日露戦役従軍記念門柱 (大野城市瓦田)	23
43 軍人勅諭御下賜五十周年記念国旗掲揚台 (大野城市瓦田)	23
44～51 歩兵第117連隊第2大隊本部ほか (大野城市上大利、牛頸ほか)	25
52～54 野砲兵第57連隊本部ほか (大野城市釜蓋、瓦田、上大利ほか)	25
55 梅頭遺跡第4次調査兵舎跡? (大野城市上大利)	26

56	野添遺跡第6次調査洞窟壕跡（大野城市上大利）	26
57	本堂遺跡第7次調査防空壕跡？（大野城市上大利）	26
58	独立照空第21大隊第2中隊（大野城市釜蓋）	27
59	戦車92部隊（大野城市釜蓋付近）	27
60	中央兵器株式会社（大野城市錦町）	29
61	株式会社福岡精工所（大野城市白木原）	29
62	株式会社福岡精工所洞窟工場（大野城市乙金）	30
63	九州飛行機株式会社雑餉隈工場唐山疎開工場（大野城市乙金）	30
64	王城山遺跡第2次調査防空壕跡（大野城市乙金）	31
65	古野遺跡第3次調査防空壕跡（大野城市乙金）	31
66	古野遺跡第4次調査1号防空壕跡（大野城市乙金）	32
67	古野遺跡第4次調査2号防空壕跡（大野城市乙金）	32
68	原口遺跡第4次調査A区防空壕跡（大野城市乙金）	33
69	原口遺跡第4次調査C区防空壕跡（大野城市乙金）	33
70	後原遺跡第22次調査防空壕跡（大野城市白木原）	33
71	板付基地春日原住宅地区（大野城市上大利及び春日市）	35
72	御供田遺跡第8次調査板付基地春日原住宅地区関連遺構（大野城市上大利）	37
73・74	木製鳥居型電柱（大野城市上大利）	38
75	フェンス（大野城市上大利）	39
76・77	US 石標（大野城市白木原）	39
78	ダンスホール跡（大野城市下大利）	40
79	白木原ベース通り（通称）（大野城市上大利）	41
80	米軍ハウス（通称）（大野城市内）	44
81	米軍機の墜落・不時着・部品落下地点（大野城市田屋、中ほか）	48
IV. 手記や日記、証言記録について		
1.	ビルマ戦争の手記	49
2.	山上高太郎日記	49
3.	板付基地関連の証言記録	50
V. 特論		
1.	戦争遺跡からみた大野城市域の特徴	59
2.	板付基地周辺の米軍ハウスの構造と特徴	66
VI. 総括		
		76

挿 図 目 次

第 1 図	西南戦争～太平洋戦争までの戦争遺跡分布図 (1/55,000).....	7
第 2 図	板付基地関連の戦争遺跡分布図 (1/25,000).....	8
第 3 図	牛頸戦没者忠魂社ほか配置略図.....	13
第 4 図	壮烈ビルマ戦場の碑ほか配置略図.....	14
第 5 図	下大利老松神社境内略図.....	15
第 6 図	日露戦役記念碑、忠魂碑など配置略図.....	19
第 7 図	歩兵第 117 連隊・野砲兵第 57 連隊・独立照空第 21 大隊・戦車 92 部隊及び関連遺跡 位置図 (1/30,000).....	24
第 8 図	大野村での歩兵第 117 連隊配備図.....	25
第 9 図	歩兵第 117 連隊通信中隊三角兵舎イラスト.....	25
第 10 図	野添遺跡第 6 次洞窟壕跡実測図 (1/300).....	26
第 11 図	独立照空第 21 大隊第 2 中隊雉ヶ尾陣地配置略図.....	27
第 12 図	中央兵器株式会社・株式会社福岡精工所及び周辺遺跡位置図 (1/20,000).....	28
第 13 図	九州飛行機株式会社唐山疎開工場見取り略図.....	30
第 14 図	後原遺跡第 22 次調査 S K 14 防空壕跡平面図 (1/40).....	33
第 15 図	大野城市乙金地区で確認された防空壕跡 (1/300).....	34
第 16 図	板付基地春日原住宅地区内の施設配置図 (1/15,000).....	36
第 17 図	御供田遺跡第 8 次調査区と板付基地春日原住宅地区施設配置図 (1/1,400).....	37
第 18 図	木製鳥居型電柱 74 の 3 D 図 (1/250).....	38
第 19 図	U S 石標位置図 (1/10,000).....	39
第 20 図	ダンスホール跡実測図 (1/600).....	40
第 21 図	白木原ベース通りと周辺の住宅地区 (昭和 37 (1962) 年).....	42
第 22 図	白木原ベース通り店舗配置略図 (昭和 25 (1950) 年頃).....	43
第 23 図	白木原ベース通り店舗配置略図 (昭和 37 (1962) 年住宅地図より作図).....	43
第 24 図	米軍ハウス分布図 (1/17,500).....	45
第 25 図	米軍ハウス部分名称図.....	46
第 26 図	ライト美容室と 8 軒の米軍ハウス地図 (昭和 37 (1962) 年住宅地図より一部掲載).....	55

表 目 次

第 1 表	大野城市の戦争遺跡一覧表.....	9 ~ 12
第 2 表	大野城市内の米軍ハウス一覧表.....	46・47
第 3 表	大野城市内の米軍ハウス数の変遷.....	47
第 4 表	参考文献一覧表.....	78
第 5 表	大野城市収蔵資料一覧表.....	79 ~ 81

写真目次

写真 1	牛頸戦没者忠魂社	13
写真 2	絵馬堂内絵馬	13
写真 3	右側絵馬「薩摩軍本陣」	14
写真 4	左側絵馬「薩摩軍と政府軍の戦い」	14
写真 5	壮烈ビルマ戦場の碑ほか全景	14
写真 6	皇紀二千六百年記念国旗掲揚台（表）	15
写真 7	石幟（表）	15
写真 8	潮井台（裏）	16
写真 9	手洗鉢（裏）	16
写真 10	日露戦役記念砲弾塔（表）	16
写真 11	征露紀念之碑	17
写真 12	花立	17
写真 13	石幟	18
写真 14	狛犬	18
写真 15	狛犬（右）	18
写真 16	石灯籠（裏）	19
写真 17	瓦田区忠魂碑	19
写真 18	日露戦役記念碑（表）	20
写真 19	忠魂碑前での村葬（昭和 17（1942）年、大野城市所蔵）	20
写真 20	忠魂碑全景	20
写真 21	忠魂奉讃碑（表）	21
写真 22	忠魂奉祀資金献納者芳名碑（右） 忠魂奉祀資金献納者芳名碑忠魂家族（左）	21
写真 23	戦没者墓碑銘（正面左）	22
写真 24	戦没者哀頌碑（正面）	22
写真 25	日露戦役従軍記念門柱	23
写真 26	日露戦役従軍記念門柱右側文字部分	23
写真 27	軍人勅諭御下賜五十周年記念国旗掲揚台	23
写真 28	野添遺跡第 6 次調査洞窟壕跡全景	26
写真 29	本堂遺跡第 7 次調査全景	26
写真 30	株式会社宮田製作所（『宮田自転車 70 年誌』昭和 35（1960）年より）	28
写真 31	株式会社福岡精工所 2 階建て建物（『大野中学校卒業アルバム』昭和 29（1954）年より）	28
写真 32	軍用自転車折畳状況（『宮田自転車 70 年誌』昭和 35（1960）年より）	30
写真 33	米軍に接収された極地戦闘機・震電（昭和 20（1945）年、渡辺鉄工株式会社提供）	30
写真 34	王城山遺跡第 2 次調査防空壕跡全景	31
写真 35	王城山遺跡第 2 次調査防空壕跡出土遺物	31
写真 36	王城山遺跡第 2 次調査防空壕跡出土遺物	31
写真 37	古野遺跡第 3 次調査防空壕跡全景	32

写真 38	古野遺跡第 4 次調査 1 号防空壕跡全景	32
写真 39	古野遺跡第 4 次調査 2 号防空壕跡全景	32
写真 40	古野遺跡第 4 次調査 2 号 B 区防空壕跡出土遺物	32
写真 41	原口遺跡第 4 次調査 A 区防空壕跡全景	33
写真 42	原口遺跡第 4 次調査 C 区防空壕跡全景	33
写真 43	板付基地春日原住宅地区内の DH 住宅 (春日市所蔵)	36
写真 44	板付基地司令本部 (春日市所蔵)	36
写真 45	貯油タンク	38
写真 46	木製鳥居型電柱 (手前 73、奥 74)	38
写真 47	板付スーパーマーケット (春日市所蔵)	38
写真 48	春日公園造成中の基地跡地を取り囲むフェンス (昭和 58 (1983) 年、筑紫文化財研究所所蔵)	39
写真 49	U S 石標 (76)	39
写真 50	ダンスホール跡基礎部分	40
写真 51	ダンスホール跡全景	40
写真 52	白木原ベース通り航空写真 (昭和 31 (1956) 年、国土地理院)	41
写真 53	白木原ベース通り	42
写真 54	ウエスリー商会 (昭和 58 (1983) 年、筑紫文化財研究所所蔵)	42
写真 55	通称：ソテツハウス IAB844 外観	44
写真 56	IAB844	44
写真 57	『戦時物語』より一場面 (井手勲さん所蔵)	49
写真 58	山上高太郎日記 (山上高昭さん所蔵)	49
写真 59	大黒屋スーパーマーケット (昭和 47 (1972) 年以降、大野城市所蔵)	50
写真 60	アーコンテイラーの揃いのマフラー (藤武肇さん所蔵)	51
写真 61	フジタケ輪業 (藤武肇さん所蔵)	51
写真 62	アーコンテイラーの店内 (右が呉さん) ((有) 太平閣所蔵)	52
写真 63	アーコンテイラーの外観 (左から 2 番目が増田さん) ((有) 太平閣所蔵)	53
写真 64	アンカーホッキング社のティーセット (池田満壽美さん所蔵)	54
写真 65	大野城市乙金の米軍ハウス IAB2600	54
写真 66	聖母園でのランチ風景	56
写真 67	ちいさこべ幼稚園	57
写真 68	麻生自転車店	57
写真 69	板付飛行場のコントロールタワー	58

図 版 目 次

図版 1	収蔵資料 (1)	82
図版 2	収蔵資料 (2)	83

I. はじめに

1. 調査の経緯

平成 31（2019）年 3 月、大野城市と大野城市教育委員会は大野城市ふるさと文化財保存整備活用基本計画「大野城市歴史文化基本構想」を策定した。その目的は市内の国特別史跡「水城跡」「大野城跡」、国史跡「牛頸須恵器窯跡」をはじめ、県・市指定の文化財および未指定文化財を地域の資源・宝として、市民に知ってもらい、これらの文化財を活かしたまちづくり、人づくり、にぎわいづくり、そしてふるさと意識の醸成につなげる保存整備活用の推進を図ることである。具体的な事業の 1 つとして、未指定文化財の悉皆調査とデータベース化を進めることとし、平成 31 年 4 月より大野城市ふるさと文化財課（現 大野城市心のふるさと館文化財担当）で調査を開始した。

調査対象の未指定文化財には、戦争関連の構造物や戦後、市内に建築された建造物「米軍ハウス」等が挙げられる。既存情報を整理して戦争遺跡リストを作成し、平成 31/令和元年～令和 5 年度の 5 ヶ年をかけて、悉皆調査を行った。調査は春日ベース・ハウスの会や九州産業大学建築都市工学部住居・インテリア学科松野尾研究室の協力を得ながら、大野城市ふるさと文化財課が主体となり実施した。

また、令和 2（2020）年が太平洋戦争終結から 75 年、令和 4（2022）年が板付基地春日原住宅地区返還から 50 年の節目にあたることから、大野城心のふるさと館で企画展「大野城市の戦争とくらし」（令和 2 年 10 月 6 日～11 月 29 日）、「戦争の記憶展」（令和 3 年 7 月 13 日～10 月 24 日）、「板付基地展」（令和 4 年 9 月 13 日～11 月 6 日）を開催し、関連イベントで講演会「大野村周辺における軍需生産と本土決戦準備」、座談会「板付基地の思い出を語る」やまち歩き「板付基地の思い出をめぐる（米軍ハウス）」を実施した。展示会場や関連イベントで証言者を募り、悉皆調査と並行して証言の収集・記録調査を行った。令和 5 年度は追加の悉皆調査と大野城市や個人所蔵の戦争及び基地関連資料の調査を実施し、これまでの調査の成果をまとめた報告書を作成した。

2. 調査の過程

（調査目的）

悉皆調査や聞き取り調査等により作成した戦争遺跡リストおよび証言記録を収集するとともに、今後、地域計画の策定や未指定文化財の指定等に利用し、文化財の保護や展示等の啓発事業に活用していくことを目的とする。

（調査対象）

明治元（1868）年から板付基地春日原住宅地区返還の昭和 47（1972）年までの間に土地に形成された戦争や板付基地関連の構造物や発掘調査に伴う遺構・遺物の戦争遺跡、手記や写真等の記録資料及び証言、大野城市及び個人所蔵の関係資料も対象とする。

また戦争遺跡一覧表に掲載した種別は、『福岡県の戦争遺跡』を参考にしつつ、8 つの種別を設けた。

- | | |
|-----------|-----------------|
| 1 政治・行政関係 | 連隊本部、部隊関係施設など |
| 2 軍事・防衛関係 | 基地、高射砲陣地、洞窟陣地など |
| 3 生産関係 | 軍需工場、地下疎開工場など |

- | | |
|-------------|---------------------------------|
| 4 居住関係 | 防空壕、米軍ハウスなど |
| 5 埋葬関係 | 個人墓地 |
| 6 交通・インフラ関係 | 道路、上下水道、電気、燃料、補給路など |
| 7 記念・慰霊関係 | 絵馬、記念碑、忠魂碑、壮烈ビルマ戦場の碑など |
| 8 その他 | 白木原ベース通り、ダンスホール跡、米軍機の墜落・不時着地点など |

(調査経過)

- | | |
|-----------------|--|
| 平成 31 年 / 令和元年度 | ふるさと文化財課と春日ベース・ハウスの会、九州産業大学建築都市工学部住居・インテリア学科松野尾研究室と合同で市内米軍ハウスの悉皆調査
既存情報の把握、整理 |
| 令和 2 年度 | 米軍ハウス「ソテツハウス (通称)」解体に伴う記録調査
米軍ハウス調査票作成 |
| 令和 3 年度 | 米軍ハウス悉皆調査 (曙町、中央、瓦田、栄町、雑餉隈町、白木原、瑞穂町、乙金) |
| 令和 4 年度 | 米軍ハウス悉皆調査 (筒井、山田)
登記簿調査 |
| 令和 5 年度 | 登記簿調査
戦争遺産 (遺跡) 現地確認調査、戦争遺産報告書作成 |

3. 調査の体制

平成 31 (令和元) 年度から令和 5 年度における各調査および報告体制は以下の通りである。

平成 31 年 / 令和元年度 (調査)

- | | | |
|-----------|------------|-------|
| 教育長 | 吉富 修 | |
| 教育部長 | 平田 哲也 | |
| ふるさと文化財課長 | 石木 秀啓 | |
| 係長 | 林 潤也 | 佐藤 智郁 |
| 主査 | 上田 龍児 | |
| | 徳本 洋一 | |
| 主任主事 | 秋穂 敏明 | |
| 技師 | 山元 瞭平 | |
| 主事 (任期付) | 鮫島 由佳 (調査) | |
| | 柴田 剛 | |
| 嘱託 (啓発) | 山村 智子 (調査) | 浅井 毬菜 |
| 嘱託 (調査) | 澤田 康夫 | |
| | 木原 堯 | |
| 嘱託 (庶務) | 西村 友美 | |
| | 永松 綾子 | |

令和2年度（調査）

教育長	吉富 修
教育部長	日野 和弘
ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	林 潤也 上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
技師	山元 瞭平 齋藤 明日香
主事	鮫島 由佳（調査）
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子（調査） 深町 美佳（調査）
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫 木原 堯
会計年度任用職員（庶務）	西村 友美 三好 りさ

令和3年度（調査）

教育長	吉富 修（～6月） 伊藤 啓二（7月～）
教育部長	日野 和弘
ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	林 潤也 上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
主任技師	山元 瞭平
技師	齋藤 明日香
主事	鮫島 由佳（調査）
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子（調査） 深町 美佳（調査）
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫 石川 健（12月～）
会計年度任用職員（庶務）	三好 りさ 光原 乃里子（～9月） 荒巻 美佐子（10月） 野上 知則（11月～） 山上 敬子 井之口 彩子

令和4年度（調査）

市長	井本 宗司
地域創造部長	増山 竜彦
大野城市心のふるさと館館長	赤司 善彦
文化財担当課長	石木 秀啓
文化財担当係長	林 潤也 上田 龍児
文化財担当主査	徳本 洋一
文化財担当主任主事	秋穂 敏明
文化財担当主任技師	山元 瞭平
文化財担当技師	齋藤 明日香
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子（調査） 深町 美佳（調査）

	照屋 真澄 (8月～) (調査)
会計年度任用職員 (調査)	澤田 康夫 石川 健
会計年度任用職員 (庶務)	清水 康彰 大塚 健三 (7月～)
	山上 敬子 井之口 彩子

令和5年度 (調査・報告)

市長	井本 宗司
地域創造部長	増山 竜彦
大野城市心のふるさと館館長	赤司 善彦
文化財担当課長	石木 秀啓
文化財担当係長	林 潤也 上田 龍児
文化財担当主任主事	濱田 祐之 (~7月) 下川 みお (7月～)
文化財担当主任技師	山元 瞭平 龍 友紀
会計年度任用職員 (啓発)	山村 智子 (調査・報告) 深町 美佳 (調査・報告)
	尾川 絢香 (調査・報告)
会計年度任用職員 (調査)	澤田 康夫 石川 健
会計年度任用職員 (庶務)	清水 康彰 藤田 香
	井之口 彩子 西村 恭子

Ⅱ．戦争遺産の位置と環境

1. 地理的環境

大野城市は博多湾を北に有する福岡平野東南の最奥部に位置し、市域の南に脊振山地、東を三郡山地に挟まれ、南北に細長いひょうたん型を呈する。福岡平野中央部に那珂川・御笠川が貫流し、広大な沖積平野を形成する。平野がもっとも狭くなる地峡部は博多湾と福岡平野から筑紫平野及び有明海までを結ぶ交通の要衝である。古代には官道が整備され、江戸時代には日田街道や新川運河が通り、現在でも九州縦貫自動車道やJR鹿兒島本線、西鉄天神大牟田線、国道3号線など九州の南北を結ぶ幹線が市域中央部を縦断している。

古くから朝鮮半島や中国大陆に面する博多湾にも近く、海外との交流が盛んであったが、一方で国際的緊張関係の影響を強く受けた地域でもあった。市名の由来となっている「大野城」や、「水城」の築造は西暦663年の白村江の戦いの敗戦に伴って整備された国土防衛線であり、西暦1274・1281年の元寇に関わる記録の中にも大野城市域が登場する。太平洋戦争末期の本土決戦準備では、博多湾から連合軍が上陸してくることを想定した陣地構築が行われ、国難の際には大きな役割を果たしてきた地域ともいえる。また戦後も板付基地春日原住宅地区の設置や朝鮮戦争の勃発により、地域経済や人々の暮らしへの多大な影響は続いていった。

2. 歴史的環境

明治新政府は明治5（1872）年11月に徴兵令を告諭した。それまで戦闘要員は武家階級に限定されていた方針を大きく転換し、国民に徴兵義務を課した。

西郷隆盛と反発する土族たちが起こした西南戦争は明治10（1877）年2月15日～9月24日まで行われた国内最大の内戦になった。大野城市牛頸の平野神社には明治10年9月に西南戦争の様子を描いた一對の絵馬が掲げられ、大野城市瓦田の瓦田区忠魂碑や戦没者哀頌碑には大野村からも軍夫として西南戦争に従軍、あるいは戦死した方々の氏名が刻まれている。

明治38（1905）年、日露戦争に大野村から出征した兵士は140人で、戦病死者は6人だったことが、大野城市瓦田の日露戦役記念碑に記されている。この日露戦争での日本の勝利が軍国主義の道を歩むきっかけとなり、昭和6（1931）年の上海事変や昭和14（1939）年日中戦争に出征した記念に産土神の神社に村民が寄進した石碑や潮井台などが確認できる。皇紀二千六百年にあたる昭和15（1940）年2月11日、大野城市瓦田に忠魂碑を建立し、昭和16（1941）年太平洋戦争開戦以降、大野村から出征し亡くなった戦没者の村葬は忠魂碑の前で行われるようになった。大野村では昭和16年に大野城市白木原の宮田自転車製作所福岡工場が飛行機部品や魚雷の製造を行う株式会社福岡精工所になり、昭和18（1943）年には大野城市錦町の日本自動車株式会社が航空機用の魚雷を製造する中央兵器株式会社になった。

昭和19（1944）年になると都市部や軍需工場などを狙ったB-29による空襲が頻発するようになり、株式会社福岡精工所や九州飛行機株式会社雑餉隈工場（福岡市）は乙金の丘陵地に洞窟壕（防空壕）を掘り、工場の一部を地下に疎開させた。これらの地下疎開工場と思われる遺構が王城山遺跡で検出されている。出土遺物や証言記録等から九州飛行機株式会社の零式水上偵察機や局地戦闘機震電の部品製造を行っていた可能性がある。

昭和20（1945）年1月21日、日本は本土決戦準備の実施を決定し、歩兵第117連隊や野砲兵第57連隊、独立照空第21大隊、戦車92部隊を大野村に配備した。歩兵第117連隊に関連する

と思われる洞窟壕（防空壕）や兵舎跡等が野添遺跡や本堂遺跡、梅頭遺跡で確認されている。

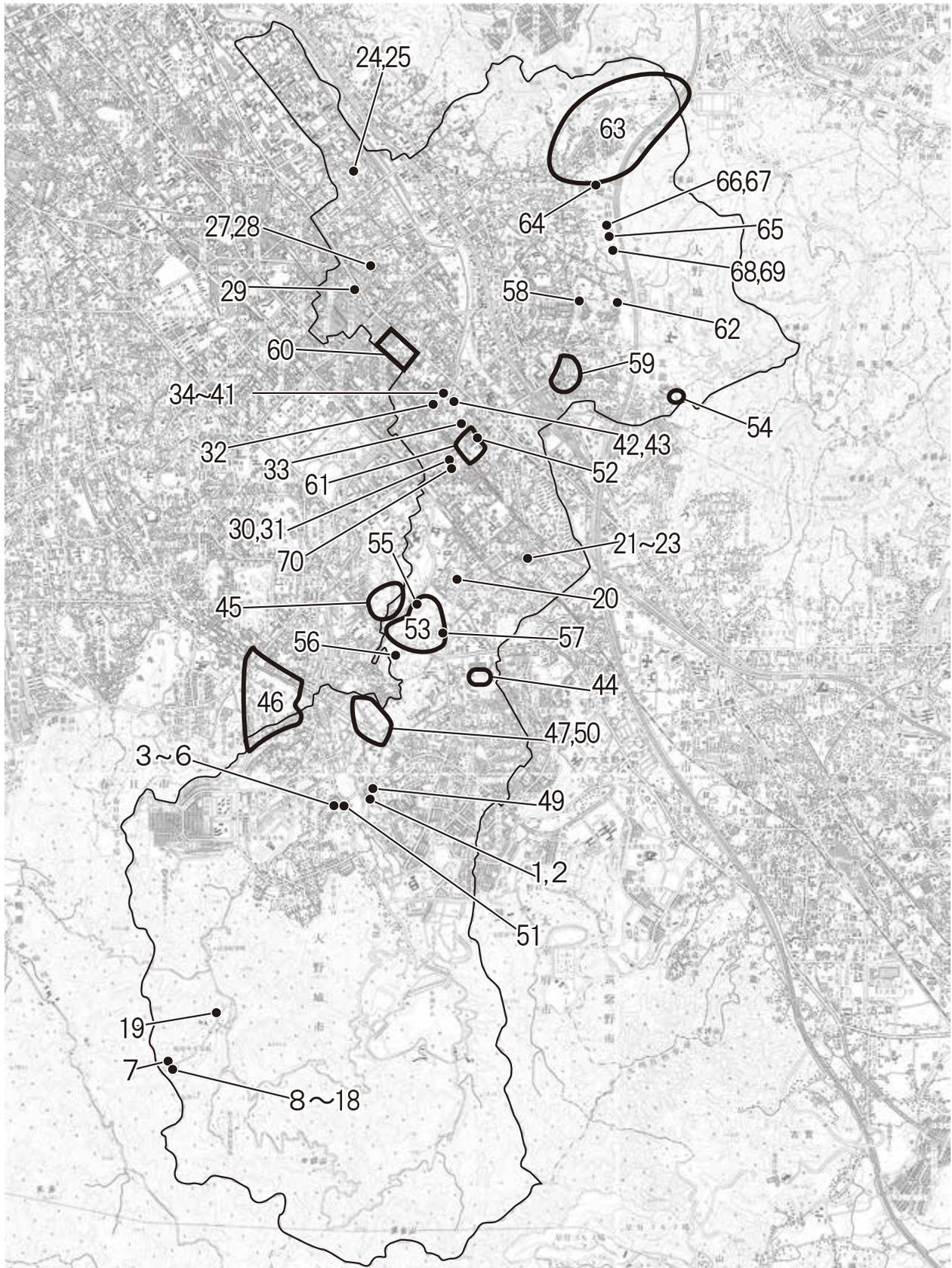
太平洋戦争の敗戦後、昭和24（1949）年牛頸小学校校庭に建てられていた奉安殿を平野神社境内に移設して牛頸戦没者忠魂社が建立された。忠魂社の中には日清・日露戦争から太平洋戦争までに亡くなった38名の氏名が刻まれた楠板が安置されている。昭和27（1952）年に大野町と大野町遺族会とで西南戦争から太平洋戦争終結までに大野村から出征して戦病死した241名の氏名を刻んだ戦没者哀頌碑が大野城市瓦田に建立された。また昭和33（1958）年に瓦田区の日露戦争と太平洋戦争の戦没者31名の氏名が刻まれた瓦田区忠魂碑が建立された。

昭和21（1946）年9月22日、アメリカ海兵隊第5師団第28連隊先遣隊が旧日本軍の席田飛行場に到着した。進駐軍は大野村や周辺地域の軍需工場を接收し、春日村の軍需工場・小倉陸軍造兵廠春日製造所と、地続きだった大野村大字上大利の田畑や墓地等を宿舍用地として買収し、板付基地春日原住宅地区を造成した。フェンスと高いコンクリートの壁で囲われた板付基地の中には、宿舍以外にクラブやボウリング場、野球場等のスポーツ施設、映画館や劇場、ビリヤード場等の娯楽施設、銀行や教会、学校、FEN（極東放送）のスタジオ等があった。

昭和25（1950）年6月に朝鮮戦争が勃発し、板付基地に駐留する米兵やその家族、軍属の数は急増し、板付基地内の住宅が不足する事態に陥った。そこで基地の外で土地を持つ大野町の住民が建てたアメリカ仕様の住宅・米軍ハウスを、米軍がオフベースハウスとして使用することになった。日本人向けの借家より2～3倍の家賃収入が得られる米軍ハウスは大野町に500戸以上建築された。板付基地春日原住宅地区の東門から西鉄白木原駅までの約600mの通りは、顧客のアメリカ人向けのバーやレストラン、クリーニング屋、テイラー等が英語看板を掲げ、夜になるとネオンが輝く白木原ベース通りと呼ばれるようになった。

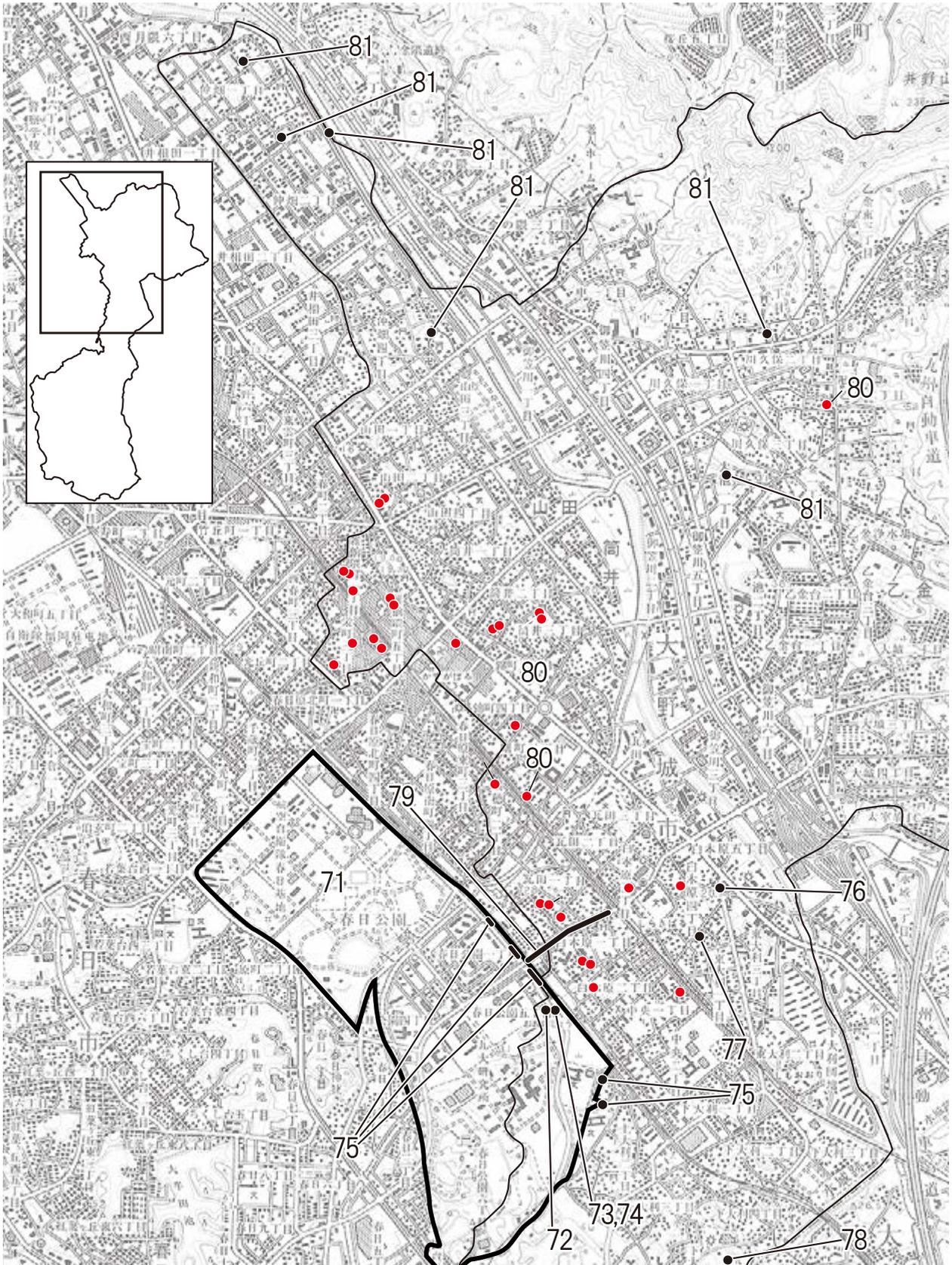
昭和27（1952）年4月28日、サンフランシスコ講和条約により連合軍の日本占領が終了し、日本は主権回復したが、板付基地と板付基地春日原住宅地区は米第5空軍の「無期限使用」となった。大野町は福岡県下の市町村で基地に雇用されている人口が3番目に多く、戦後復興の礎となる新たな職種や雇用を生み出した。一方で飲酒運転による町民の死亡事故や重大事件の他、米軍機の墜落事件や騒音被害が多発するようになった。また昭和32（1957）年から3年間で在日米軍の撤退や配置転換等による日本人労務者の大量解雇がおき、その数は半数以下に減少したが、昭和35（1960）年末、板付基地全体で約7千人の日本人労務者が雇用されていた。昭和38（1963）年の板付基地の中継化が発表され、さらに40～50%の日本人労務者が解雇され、福岡県駐留軍離職者対策センターを設立して再雇用対策に追われた。基地との関わりを経て、共働タクシーや株式会社きょくとうクリーニング、マルキョウ、ロイヤルホストホールディングス株式会社などの会社が起業した。板付基地春日原住宅地区は太平洋戦争敗戦後、大野村から大野町、大野城市へと戦後復興を遂げてきた地域の現代史を語る上で欠かせない存在であった。昭和47（1972）年4月1日、大野城市市制施行が始まり、同年6月30日、板付基地春日原住宅地区返還式が行われた。約165万㎡におよぶ広大な土地が日本に返還され、翌年の昭和48（1973）年4月1日、返還された基地跡に大利小学校が開校した。現在、基地跡には大利中学校、九州大学筑紫キャンパス、JR大野城駅西口などとなっている。基地跡にはフェンスや木製鳥居型電柱、住宅地区の盛土造成が一部残存しており、令和3（2021）年、御供田遺跡第8次調査では道路や貯油タンク等が確認された。

Ⅲ. 大野城市の戦争遺跡



第1図 西南戦争～太平洋戦争までの戦争遺跡分布図 (1/55,000)

※図中の番号は第1表大野城市の戦争遺跡一覧表と同一である。



第2図 板付基地関連の戦争遺跡分布図 (1/25,000)

※図中の番号は第1表大野城市の戦争遺跡一覧表と同一である。
 赤丸表示は第1表の番号80の米軍ハウス(通称)を表示している。

第1表 大野城市の戦争遺跡一覧表

1	名称	看護婦長白水アグリ墓	所在	大野城市南ヶ丘5丁目11-2付近	年代	不明	種別	5	文献	19	現状	現存
	内容	墓は白水保之墓と並んで建っている。表には「故看護婦長勲七等 白水アグリ之墓」と記されている。裏には「昭和二年三月日本赤十字社看護婦養成所卒業シ小倉陸軍病院勤務ヲ命セラル 昭和十八年十二月一日死亡 同日附大東亞戦争ノ功ニ依リ勲七等瑞宝章ヲ授与セラル」と記されている。墓高160cm。										
2	名称	故陸軍中尉正七位勲六等功五級 白水保之墓	所在	大野城市南ヶ丘5丁目11-2付近	年代	不明	種別	5	文献	19	現状	現存
	内容	墓は白水アグリ墓と並んで建っている。表には「故陸軍中尉正七位勲六等功五級 白水保之墓」と記されている。裏には「君大正五年四月十五日生…(いしづみに全文記載)」と記されている。墓高190cm。										
3	名称	牛頭戦没者忠魂社	所在	大野城市牛頭3丁目14	年代	昭和24年1月14日	種別	7	文献	10・19	現状	現存
	内容	牛頭国民学校の校庭に建てられていた奉安殿を再利用して、昭和24(1949)年に忠魂碑として建立された。詳細は本文に記載。										
4	名称	石段奉納記念碑	所在	大野城市牛頭3丁目14	年代	昭和13年5月	種別	7	文献	10・19	現状	現存
	内容	碑は平野神社境内にある。表には「奉納 石階段三ヶ所」と記されている。右側面に「昭和十三年五月吉日」左側面には「海軍大佐 従四位勲三等 竹田六吉」裏には「社掌 吉嗣敬太郎 石工 山下甚八 久間生一二」。高さ68cm、幅28cm、奥行18.5cm。										
5	名称	石轍	所在	大野城市牛頭3丁目14	年代	大正8年9月	種別	7	文献	10・19	現状	現存
	内容	平野神社境内にある。正面右から、表には「神明日俣月」裏には「大正八年九月吉日」正面左、表には「靈徳洽萬民」裏には「陸軍醫 戸渡庸二郎建之」と記されている。石轍はどちらも高さ279cm、幅32cm、奥行30cm。										
6	名称	絵馬「西南戦争図」	所在	大野城市牛頭3丁目14	年代	明治10年9月	種別	7	文献	10	現状	現存
	内容	平野神社本殿左側の絵馬堂に掲げられている一対の絵馬。明治10(1877)年9月に奉納されている。詳細は本文に記載。										
7	名称	故陸軍砲兵森山森墓	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	明治40年5月	種別	5	文献	19	現状	現存
	内容	墓は大野城市白水原赤岸の墓地に建てられていたが、昭和47年に福岡中央霊園の森山家累代墓地内に移されている。表には「故陸軍砲兵森山森墓」左側面に「明治四十年五月建之 正六位理学士白壁傑次郎撰 関三郎書 木村虎吉書 森山清太建」裏と右側面には「男子不苟生又不徒死…(いしづみに全文記載)」と記されている。墓高は150cm。										
8	名称	壮烈ビルマ戦場の碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	昭和56年	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の最奥にある。表には「壮烈ビルマ戦場の碑」裏には「ビルマ戦場で散華した19万の戦友にこの碑を捧ぐ 終戦36周年1981年晩秋ビルマ派遣軍龍第6744部隊吉松軍蔵建之」と記されている。この碑を中心に周囲には、ビルマ戦場の地図、ビルマ戦場の日本軍の部隊毎の人員・戦死者数一覧碑、ビルマ戦記年表などがある。高さ縦75cm(台座含め176cm)、幅290cm。										
9	名称	ビルマ戦歌碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	昭和53年2月	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の壮烈ビルマ戦場の碑の近くにある。碑には「ビルマ戦 遠くなりたる 今もなお 赤土に眠る 戦友(とも)を 忘れじ」「昭和五十三年二月 タイ国クンヤムにて 吉松軍蔵」と記されている。高さ330cm、直径70cmの円柱型。										
10	名称	バゴダの月の碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	不明	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の壮烈ビルマ戦場の碑の近くにある。碑にはバゴダの月の歌詞と楽譜が記されている。(歌詞と楽譜は写真あり)「1945年5月 ビルマ國 南シャン州 ロイコウ戦線にて 作詞作曲 竜兵団 吉松軍蔵」と記されている。高さ65cm(台座含め107cm)、幅216cm、奥行15cm。										
11	名称	ビルマ戦記の碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	不明	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の壮烈ビルマ戦場の碑の近くにある。碑には1942年のビルマ侵攻作戦から1945年終戦時までの年表が記されている。高さ127cm(台座含め170cm)、幅400cm、奥行26cm。										
12	名称	ビルマ戦場の日本軍の碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	不明	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の壮烈ビルマ戦場の碑の近くにある。碑には固有部隊名、通称号、編成地、兵団総人員、戦没者数が記されている。高さ111cm(台座含め147cm)、幅165cm、奥行33cm。										
13	名称	ビルマの地図の碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	不明	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の壮烈ビルマ戦場の碑の近くにある。碑は円形で日本からビルマまでの距離や方角が記されている地図となっている。										
14	名称	泰緬鉄道の建設の碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	昭和56年11月	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の壮烈ビルマ戦場の碑の近くにある。碑には泰緬鉄道建設や建設部隊、労務人員について記されている。高さ65cm、幅200cm、奥行20cm。										
15	名称	ビルマ戦場の地図の碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	昭和56年11月22日	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の壮烈ビルマ戦場の碑の近くにある。碑はビルマやその周辺国の地図が記されている。昭和56年吉松軍蔵建立、平成29年彩色修復吉松孝子。高さ220cm(台座含め278cm)、幅150cm(台座含め195cm)、奥行23cm(台座含め140cm)。										
16	名称	雲山萬里緬甸月の碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	昭和59年5月7日	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の壮烈ビルマ戦場の碑の近くにある。碑の表には「雲山萬里緬甸月 昭和五十九年九月七日 元竜兵団参謀 永井清(?)雄」と記されている。高さ140cm(台座含め170cm)、幅60cm、奥行17cm。										
17	名称	狼兵団歌碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	不明	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は福岡中央霊園の壮烈ビルマ戦場の碑の近くにある。碑は2つ並んで建っており、正面右の碑には「夜は更けて 戦車ひしめくメイクテラ 敗れ狼十字星悲し 一九四五年春ラングーンへ南進を急ぐ英第四軍団 第二五五戦車旅団を阻止すべく中部ビルマ平原の 熱砂を踏みて大戦車群と激斗せし狼兵団」正面左の碑には「国境越えりや 雲南戦線雲早し ビルマルートの 遙かなる道」と記されている。大きさは高さ110cm、幅70cm、奥行17cm。										
18	名称	ビルマの丘の碑	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	不明	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	碑は壮烈ビルマ戦場の碑から西側45mのところにある。高さ103cm(台座含め123cm)、幅130cm、奥行17cm。										
19	名称	慰霊碑比島派遣第三百三十八兵站病院	所在	大野城市牛頭2375-10	年代	昭和63年10月5日	種別	7	文献	なし	現状	現存
	内容	福岡中央霊園内にある。昭和63(1988)年10月5日に第三百三十八兵站病院戦友会が建立。戦没者310名の本籍地と氏名が刻まれている。詳細は本文に記載。										
20	名称	皇紀二千六百年記念国旗掲揚台	所在	大野城市上大利2丁目16-1	年代	昭和15年	種別	7	文献	10・19	現状	現存
	内容	上大利老松神社境内の東隅にある。石碑の表に「皇紀二千六百年記念」、左側面に「上大利軍人會建之」と刻まれている。詳細は本文に記載。										
21	名称	石轍	所在	大野城市下大利2丁目11-1	年代	大正8年3月	種別	7	文献	10	現状	現存
	内容	下大利老松神社本殿前にある一対の石轍である。正面左側裏面に「出征記念陸軍歩兵一等卒洪田藤三郎」と刻まれている。詳細は本文に記載。										

22	名称	潮井台	所在	大野城市下大利2丁目11-1	年代	昭和6年2月	種別	7	文献	10	現状	現存
	内容	下大利老松神社本殿の右側にある。裏面に「昭和六年二月上海事変出征記念 陸軍歩兵上等兵 施主高原広喜」と刻まれている。詳細は本文に記載。										
23	名称	手洗鉢	所在	大野城市下大利2丁目11-1	年代	昭和15年7月	種別	7	文献	10	現状	現存
	内容	下大利老松神社本殿の左側にある。裏面に「昭和十五年七月出征記念歩兵中尉 吉次清一郎」と刻まれている。詳細は本文に記載。										
24	名称	御大典記念木	所在	大野城市仲畑4丁目12-3	年代	昭和3年11月10日	種別	7	文献	10・19	現状	現存
	内容	碑は仲島地祇神社境内にある。表には「御大典記念木」裏に「昭和三年十一月十日 當區軍人会」と記されている。高さ73.5cm、幅20cm、奥行14cm。										
25	名称	日露戦役記念砲弾塔	所在	大野城市仲畑4丁目12-3	年代	不明	種別	7	文献	10・19	現状	現存
	内容	仲島地祇神社境内の左側にある。石碑の表に「奉献 日露戦役記念」と刻まれている。詳細は本文に記載。										
26	名称	日支事変記念国旗掲揚台	所在	大野城市田屋字田屋前	年代	昭和14年1月元旦	種別	7	文献	10・19	現状	不明
	内容	大野城市田屋字田屋前の集落入口の道端に建てられていたが、昭和50年に小樋製作所工場建設の際に行方不明となっている。「日支事変」の文字を刻むものは市内唯一の記念碑であった。										
27	名称	征露記念之碑	所在	大野城市山田4丁目7	年代	明治39年3月	種別	7	文献	10・19	現状	現存
	内容	山田宝満宮境内の入口左側にある。高さ265cmを測る大きな記念碑で明治39(1906)年3月に建立されている。詳細は本文に記載。										
28	名称	石幟	所在	大野城市山田4丁目7	年代	昭和3年	種別	7	文献	10	現状	現存
	内容	石幟は山田宝満宮境内にある。正面右から、表には「其進也循序」裏には「陸軍中将 白水淡書 石工香堅(?)一男」正面左、表には「其新也執中」裏には「昭和三年三月吉辰建之 山田區氏子中」大きさはどちらも高さ305cm(台座含め308cm)、幅32cm(台座含め52cm)、奥行26.5cm(台座含め47cm)。										
29	名称	花立	所在	大野城市雑餉隈町3丁目3-1	年代	明治39年5月	種別	7	文献	10	現状	現存
	内容	雑餉隈恵比須神社の石造りの本殿右側にある。表に「願成就 出征軍人中」、裏に「明治廿九年五月吉日」が刻まれている。詳細は本文に記載。										
30	名称	石幟	所在	大野城市白木原1丁目9-17	年代	大正15年11月	種別	7	文献	10	現状	現存
	内容	白木原地祇神社境内にあり、左側裏面に「当村 従六位勲四等憲兵大尉 森山清 朝倉部朝倉村 古林ヤス」と刻まれている。詳細は本文に記載。										
31	名称	狛犬	所在	大野城市白木原1丁目9-17	年代	大正15年11月	種別	7	文献	10	現状	現存
	内容	白木原地祇神社拝殿前的一对の狛犬である。正面右側の台座裏面に「陸軍中将 従三位勲一等功二級 白水淡閣下謹書サル…」詳細は本文に記載。										
32	名称	石灯籠	所在	大野城市瓦田2丁目2-28	年代	昭和14年1月	種別	7	文献	10	現状	現存
	内容	瓦田地祇神社拝殿の横にある。竿の裏側に「出征御願成就 昭和拾四年一月 瀬利昇一」と刻まれている。詳細は本文に記載。										
33	名称	瓦田区忠魂碑	所在	大野城市白木原3丁目4	年代	昭和33年3月	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	瓦田区納骨堂前にある。表に「忠魂」、裏に日露戦役戦死者1名と大東亜戦役戦死者21名の氏名が刻まれている。詳細は本文に記載。										
34	名称	日露戦役記念碑	所在	大野城市瓦田3丁目3	年代	明治39年4月	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	瓦田なかよし公園に隣接し、日露戦争に大野村から出征した140名の氏名と、6名の戦病死者名が刻まれている。詳細は本文に記載。										
35	名称	忠魂碑	所在	大野城市瓦田3丁目3	年代	昭和15年2月11日	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	瓦田なかよし公園に隣接し、34の日露戦役記念碑東側にある。昭和15(1940)年に建立され、題字は陸軍大将林仙之である。詳細は本文に記載。										
36	名称	忠魂奉讃碑	所在	大野城市瓦田3丁目3	年代	昭和15年2月11日	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	瓦田なかよし公園に隣接し、35の忠魂碑前の左側にある。題字は大野村長山上高太郎の筆である。詳細は本文に記載										
37	名称	忠魂奉祀資金献納者芳名碑	所在	大野城市瓦田3丁目3	年代	昭和15年2月11日	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	瓦田なかよし公園に隣接し、35の忠魂碑建立時に資金を提供した村内各種団体、産業組合、工場などの明細が記されている。詳細は本文に記載。										
38	名称	忠魂奉祀資金献納者芳名碑忠魂家族	所在	大野城市瓦田3丁目3	年代	昭和15年2月11日	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	瓦田なかよし公園に隣接し、35の忠魂碑建立時に資金を提供した個人や遺族の氏名が記されている。詳細は本文に記載。										
39	名称	戦没者墓碑銘	所在	大野城市瓦田3丁目3	年代	太平洋戦争中?	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	35の忠魂碑前面左右に一对で建てられ、西南戦争から太平洋戦争までの戦没者37名が記されている。詳細は本文に記載。										
40	名称	石幟	所在	大野城市瓦田3丁目3	年代	昭和17年?	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	35の忠魂碑前に建立された一对の石幟である。役場や養蚕組合、国民学校職員児童、青年学校職員一同によって奉獻されている。詳細は本文に記載。										
41	名称	戦没者哀頌碑	所在	大野城市瓦田3丁目3	年代	昭和27年5月20日	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	昭和27(1952)年に大野町と戦没者遺族会によって建立された。西南戦争以降のすべての戦争での戦没者241名の氏名が刻まれている。詳細は本文に記載。										
42	名称	日露戦役従軍記念門柱	所在	大野城市瓦田3丁目2-1	年代	明治39年12月	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	大野小学校南門の門柱として現在も使用されている。昭和39(1966)年12月に日露戦役従軍記念として軍人3名により建立された。詳細は本文に記載。										
43	名称	軍人勅諭御下賜五十周年記念国旗掲揚台	所在	大野城市瓦田3丁目2-1	年代	昭和7年1月4日	種別	7	文献	19	現状	現存
	内容	昭和21(1946)年まで大野小学校校庭東南隅にあった奉安殿前にあり、国旗掲揚台として使用されていた。詳細は本文に記載。										
44	名称	歩兵第117連隊第2大隊本部	所在	大野城市上大利字野添(日の浦池南東側)	年代	昭和20年4月20日	種別	2	文献	8・11・16	現状	消滅
	内容	歩兵第117連隊は昭和15(1940)年8月に秋田市で編成されて第57師団に編入。同16(1941)年満州に渡ってのち同20(1945)年3月31日の本土防衛のため移動を命じられ、博多湾に上陸後第2大隊本部を大野村上大利字野添に置いた。										
45	名称	歩兵第117連隊速射砲中隊本部	所在	大野城市上大利字梅頭および春日市池の頭池東側	年代	昭和20年	種別	2	文献	11・18	現状	消滅
	内容	「防人」の故事に習い、国道3号線を南下してくる敵戦車を水城堤防付近で迎撃するため、第2小隊を上大利の丘陵に配置した。										
46	名称	歩兵第117連隊本部戦闘壕	所在	大野城市上大利字梅頭および春日市春日字平田山	年代	昭和20年	種別	2	文献	11・18	現状	消滅
	内容	大野村牛頭字花無尾(夫)および春日村春日字平田に歩兵第117連隊本部戦闘壕が築造された。										

47	名称	歩兵第117連隊本部戦闘壕築造隊炊事所	所在	大野城市牛頸字花無尾の牛頸川川岸	年代	昭和20年	種別	2	文献	11・18	現状	消滅
	内容	戦闘壕築造隊は牛頸川の川岸の炊事場で食事をとった。牛頸女子青年団長・篠原よし子ほかの幹部が交代で炊事場の手伝いの奉仕をした。										
48	名称	歩兵第117連隊本部戦闘壕築造糧秣所	所在	大野城市上大利字宮の前	年代	昭和20年	種別	2	文献	11・18	現状	消滅
	内容	詳細不明										
49	名称	歩兵第117連隊第1大隊混成坑木伐採隊	所在	(旧牛頸国民学校)	年代	昭和20年5月7日	種別	2	文献	11・18	現状	消滅
	内容	昭和20(1945)年5月7日から宿营地として、大野村は牛頸国民学校の職員室、宿直室などを提供した。牛頸の中浦山の松を切り出した。										
50	名称	歩兵第117連隊通信中隊	所在	大野城市牛頸字花無尾	年代	昭和20年	種別	2	文献	11・18	現状	消滅
	内容	花無尾の丘に3本の壕を東に向かって築造した。										
51	名称	歩兵第117連隊野戦病院	所在	大野城市牛頸3丁目14	年代	昭和20年	種別	2	文献	11・18	現状	消滅
	内容	昭和20(1945)年7月25日に菅野中尉と外一人の軍医が山上高太郎大野村長を訪ね、野戦病院の設置場所と用材提供の相談があった。設置場所は牛頸平野神社の拝殿、社務所および境内を貸与し、用材は大野村が提供することにした。										
52	名称	野砲兵第57連隊本部	所在	大野城市瓦田3丁目2-1	年代	昭和20年	種別	2	文献	18	現状	消滅
	内容	昭和20(1945)年5月20日に戦局激化に伴い、連隊本部を糟屋郡久山町久原から大野村瓦田の大野国民学校に移駐した。大野国民学校の校長室、職員室、青年学校教室などを提供した。										
53	名称	野砲兵第57連隊第2大隊第5中隊	所在	大野城市上大利字梅頭(三兼池周辺)および谷蟹	年代	昭和20年	種別	2	文献	18	現状	消滅
	内容	大野村上大利字梅頭の三兼池周辺に兵舎を造り、南北両岸に洞窟壕を築造して布陣した。また、大字上大利船頭ヶ池東側や大字上大利梅頭、谷蟹の丘陵地帯に道路を造るときに戦車を往復させていた。										
54	名称	野砲兵第57連隊観測所	所在	大野城市釜蓋の四王寺山中腹付近	年代	昭和20年	種別	2	文献	18	現状	消滅
	内容	昭和20(1945)年5月20日に連隊本部を糟屋郡久山町久原から大野村瓦田の大野国民学校に移駐したことに伴い、大野村釜蓋区の四王寺山中腹の紅付岩に観測所を設けた。										
55	名称	梅頭遺跡第4次調査兵舎跡?	所在	大野城市大字上大利588-4の一部ほか	年代	不明	種別	2	文献	なし	現状	消滅
	内容	調査担当者によると上大利北土地区画整理に伴う梅頭遺跡第4次調査で、調査区東側丘陵上に三角形の兵舎跡とおぼしき土坑を確認した。未調査。										
56	名称	野添遺跡第6次調査洞窟壕跡	所在	大野城市上大利	年代	昭和20年	種別	2	文献	18・20	現状	消滅
	内容	調査区丘陵中腹を高さ約3m、幅1.5~1.7mに水平に掘り込んでおり、約16.5mまで掘り込んだが、完掘できず調査を断念した。										
57	名称	本堂遺跡第7次調査防空壕跡?	所在	大野城市大字上大利651-1ほか	年代	不明	種別	2	文献	18・22	現状	消滅
	内容	調査区北側丘陵付近斜面に位置したため、未調査である。細長い形状から野添遺跡第6次調査と同様な防空壕の可能性がある。										
58	名称	独立照空第21大隊第2中隊	所在	大野城市釜蓋字雫ヶ尾ほか	年代	昭和20年5月11日~	種別	2	文献	18・42	現状	消滅
	内容	独立照空第21大隊(通称号「慧」八〇七九部隊)は昭和20(1945)年5月11日に遠賀から大野村釜蓋字雫ヶ尾に移動してきた。詳細は本文に記載。										
59	名称	戦車92部隊	所在	大野城市上大利、釜蓋付近	年代	昭和20年7月30日~	種別	2	文献	18・42	現状	消滅
	内容	『山上高太郎日記』(文庫42)には平田、上大利に戦車が来ることや、釜蓋県道に戦車壕を造ることなどが記されている。詳細は本文に記載。										
60	名称	中央兵器株式会社	所在	大野城市錦町1・2丁目	年代	昭和18年9月~昭和20年9月か、10月	種別	3	文献	18	現状	消滅
	内容	昭和18(1943)年9月から終戦まで魚雷運搬車、魚雷部品、航空機部品の製造を行っていた。詳細は本文に記載。										
61	名称	株式会社福岡精工所	所在	大野城市白木原	年代	昭和16年10月~昭和21年10月10日	種別	3	文献	18	現状	消滅
	内容	昭和16(1941)年から海軍の水上偵察機のフロート部分や魚雷の製造を行っていた。詳細は本文に記載。										
62	名称	株式会社福岡精工所洞窟工場	所在	大野城市大字乙金字沖坂	年代	昭和20年1月~8月15日	種別	3	文献	18	現状	消滅
	内容	昭和20(1945)年4月、大野村乙金字通り谷の丘陵に洞窟工場を作っていた。雫ヶ尾で新たな洞窟工場の準備中に終戦となった。詳細は本文に記載。										
63	名称	九州飛行機株式会社雑餉隈工場唐山疎開工場	所在	大野城市大字乙金字唐山	年代	昭和20年2月~8月	種別	3	文献	18・42	現状	消滅
	内容	大野村から宇美方面に抜ける唐山一帯にトンネル工場が複数作られ、飛行機の胴体や翼のプレス加工をしていた。詳細は本文に記載。										
64	名称	王城山遺跡第2次調査防空壕跡	所在	大野城市乙金2丁目910-44、910-60、917-18の一部	年代	昭和20年?	種別	3	文献	28	現状	消滅
	内容	平面コの字形を呈す防空壕から機械治具等が出土した。九州飛行機株式会社か、株式会社福岡精工所の地下疎開工場の可能性がある。詳細は本文に記載。										
65	名称	古野遺跡第3次調査防空壕跡	所在	大野城市乙金3丁目699、910-64、905-1の一部	年代	昭和20年?	種別	4	文献	27	現状	消滅
	内容	平面コの字形を呈す防空壕が検出された。防空壕入口周辺に柱穴が多く、壁面が補強されていた。詳細は本文に記載。										
66	名称	古野遺跡第4次調査1号防空壕跡	所在	大野城市乙金2丁目849-2ほか	年代	昭和20年?	種別	4	文献	29	現状	消滅
	内容	調査区西丘陵北側の急斜面裾部に横穴を掘削して構築された防空壕。南北9m以上を確認したが、全体形状は不明。出土遺物なし。詳細は本文に記載。										
67	名称	古野遺跡第4次調査2号防空壕跡	所在	大野城市乙金2丁目849-2ほか	年代	昭和20年?	種別	4	文献	29	現状	消滅
	内容	平面形はおおむねL字形で2カ所、入口が設置されていた。クランク状の構造から爆風を防ぐ意図で構築されていると考えられる。詳細は本文に掲載。										
68	名称	原口遺跡第4次調査A区防空壕跡	所在	大野城市乙金3丁目670、680、681ほかの各一部	年代	昭和20年?	種別	4	文献	26	現状	消滅
	内容	東西方向に直線的にのび、長さ35m以上、幅3.5~3.6mを検出した。王城山遺跡第2次調査で検出した防空壕跡と同規模。詳細は本文に記載。										

69	名称	原口遺跡第4次調査C区防空壕跡	所在	大野城市乙金3丁目670、680、681他の各一部	年代	昭和20年?	種別	4	文献	26	現状	消滅
	内容	南北に直線的にのび、長さ22m、幅3.4mを検出した。防空壕内から針金や鉄板が出土している。詳細は本文に記載。										
70	名称	後原遺跡第22次調査防空壕跡	所在	大野城市白木原1丁目273・268-4、274-1、275-2・3、276-5、278-4・24	年代	太平洋戦争時	種別	4	文献	25	現状	消滅
	内容	太平洋戦争時の防空壕SK14と井戸SK09、ごみ穴SX23が検出された。防空壕は平面長方形を呈し、長辺2.13m、短辺1.55m、深さ0.55mを測る。底面は平坦で壁面は直立し、断面は箱形を呈す。北東・北西・南西角と東西壁際中央でピットが確認された。統制陶器「岐1088」が出土している。										
71	名称	板付基地春日原住宅地区	所在	大野城市上大利、春日市	年代	昭和20年9月～昭和47年6月30日	種別	2	文献	1・6・14・15・18・31・37・38・42	現状	消滅
	内容	昭和20（1945）年9月に接収した小倉陸軍造兵廠春日製造所と、買収した大野市の山林等約165万㎡に整備された板付基地附属施設。詳細は本文に記載。										
72	名称	御供田遺跡第8次調査 板付基地春日原住宅地区関連遺構	所在	大野城市白木原317-13	年代	昭和20年代中頃～昭和47年6月30日	種別	6	文献	39	現状	消滅
	内容	詳細は本文に記載。										
73	名称	木製鳥居型電柱	所在	大野城市大字白木原317-13	年代	昭和20年代中頃～昭和47年6月30日	種別	6	文献	39	現状	現存
	内容	JR大野城駅前に木製の電柱が2本残存していたうちの1本。詳細は本文に記載。										
74	名称	木製鳥居型電柱	所在	大野城市大字白木原317-13	年代	昭和20年代中頃～昭和47年6月30日	種別	6	文献	36	現状	消滅
	内容	詳細は本文に記載。										
75	名称	フェンス	所在	大野城市上大利	年代	昭和20年代中頃～昭和47年6月30日	種別	2	文献	なし	現状	現存
	内容	板付基地春日原住宅地区の外周には3条の鉄条網を配したフェンスが張り巡らされていた。61本が現存している。詳細は本文に記載。										
76	名称	US 石標	所在	大野城市東大利3丁目1-5ガードレール下	年代	昭和20年代中頃～昭和47年6月30日	種別	6	文献	なし	現状	現存
	内容	御笠川の白鳥橋付近のポンプ場から板付基地春日原住宅地区まで上水を運ぶ鑄鉄管の上に設置された石標の一部である。詳細は本文に記載。										
77	名称	US 石標	所在	大野城市白木原4丁目12月極駐車場角	年代	昭和20年代中頃～昭和47年6月30日	種別	6	文献	なし	現状	消滅
	内容	道路工事で消失。「US 1.00M」と刻まれていた。										
78	名称	ダンスホール跡	所在	大野城市下大利4丁目757-43	年代	昭和21年12月～昭和23年頃	種別	8	文献	33	現状	消滅
	内容	国特別史跡「水城跡」推定望楼跡（思水園跡）の北西側段上に、昭和21（1946）年12月開業の米軍関係者向けダンスホールがあった。詳細は本文に記載。										
79	名称	白木原ベース通り（通称）	所在	大野城市白木原1丁目ほか	年代	昭和20年代中頃～昭和47年6月30日	種別	8	文献	3・7・15・18・34・37・38	現状	現存
	内容	板付基地春日原住宅地区の東門から西鉄白木原駅までの約600mの通りは米人向けの店舗が立ち並ぶ通称・白木原ベース通りだった。詳細は本文に記載。										
80	名称	米軍ハウス（通称）	所在	大野城市内	年代	昭和25年～昭和40年代	種別	4	文献	3・7・31・34・36・37・38	現状	現存
	内容	板付基地春日原住宅地区の外に日本人が建築したアメリカ仕様のハウス＝通称・米軍ハウスは大野町だけで500戸以上あった。詳細は本文に記載。										
81	名称	米軍機の墜落・不時着・部品落下地点	所在	大野城市田屋・中ほか	年代	昭和24年6月～昭和36年10月	種別	8	文献	6・18・37	現状	消滅
	内容	板付基地板付飛行場（現福岡空港）周辺では米軍機の墜落などが114件もおきた。大野町でも飛行場に近い田屋や中などで墜落事故による死亡事故や物損被害が相次いだ。米軍機発着時の爆音による健康被害や学校教育への影響等は深刻だった。										

※第1表大野城市の戦争遺跡一覧表の番号は、第1・2図と、1. 各戦争遺跡の詳細での名称前と図中の番号と同一である。

1. 各戦争遺跡の詳細

3 牛頸戦没者忠魂社

所在地 大野城市牛頸3丁目14

(平野神社境内)

種別 7 慰霊関係

年代 大正15(1926)年10月(奉安殿)

昭和24(1949)年1月14日(忠魂社)

概要

平野神社本殿左側にある。石造りの社殿は御真影奉安殿として大正15年10月に牛頸国民学校の校庭に建てられていた。社殿側面に奉安殿建立時の寄附者名が刻まれている。戦後、奉安殿は取り壊すことになったが、牛頸の住民にとって親しみ深い存在だったため、忠魂社の社殿にした。昭和22(1947)年10月に牛頸区の復員した元軍人で分解し、村民有志で不足材料などの寄進によって昭和24年1月14日に建立し、29日に入魂式を行った。日露戦争から太平洋戦争まで牛頸区出身の戦没者38名の忠魂碑になっている。社殿の高さは236cmを測る。

参考文献 大野城市2004『大野城市のいしづみ』

6 絵馬「西南戦争図」

所在地 大野城市牛頸3丁目14

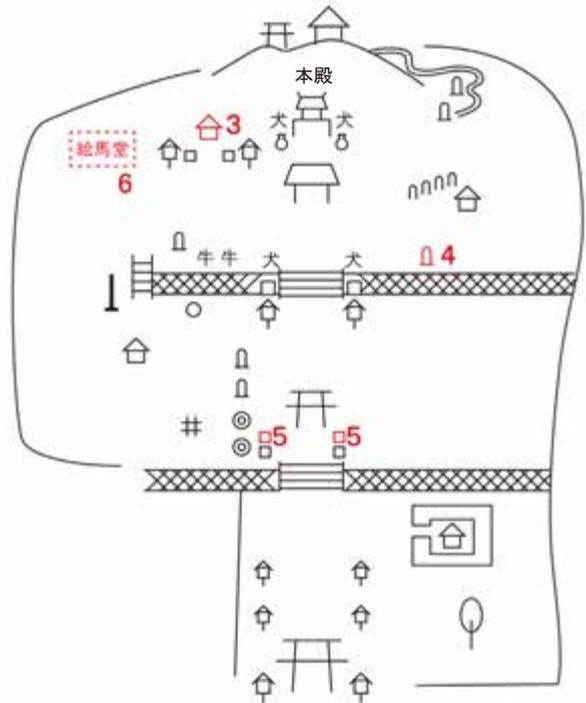
(平野神社境内)

種別 7 記念関係

年代 明治10(1877)年9月吉日

概要

平野神社本殿左側の絵馬堂内に掲げられている1対の絵馬である。絵馬には西南戦争の場面が描かれ、絵馬は明治10年9月に奉納されている。絵馬の作者は不明だが、左側の絵馬が西南戦争を報じた新聞などを元に描かれた錦絵と構図が似ていることから模倣して制作したものと考えられる。右の絵馬は薩摩軍の本陣の様子が描かれている。黒い額縁には金文字で右の絵馬の上部中央に「奉」、左の絵馬の上部中央に「献」、右側に「明治十年 高田久三郎」、中央に「高田與一」、左側に「九月吉日 高田儀三」と刻まれている。絵馬は縦83cm、横171cmを



第3図 牛頸戦没者忠魂社ほか配置略図

※赤文字部分は戦争遺跡一覧表と詳細報告の番号と同一である。



写真1 牛頸戦没者忠魂社



写真2 絵馬堂内絵馬

測る。

参考文献 大野城市史編纂委員会編 1990『大野城市史』
(民俗編)

8～18 壮烈ビルマ戦場の碑ほか 10基

所在地 大野城市牛頸 2375-10
(福岡中央霊園内)

種別 7 記念・慰霊関係

年代 昭和 53～59 (1978～84) 年

概要

福岡中央霊園最奥部の左側にある。壮烈ビルマ戦場の碑の裏には「ビルマ戦場で散華した19万の戦友にこの碑を捧ぐ 終戦36周年1981年晩秋ビルマ派遣軍龍第6744部隊吉松軍蔵建之」と記されている。この碑(8)を中心に、9ビルマ戦歌碑、10パゴダの月、11ビルマ戦記、12ビルマ戦場の日本軍、13ビルマの地図、14秦緬鉄道の建設、15ビルマ戦場の地図、16雲山萬里緬甸月の碑、17狼兵団歌碑が配置されている。また8～17が設置された地区から西に300mほど離れた場所に18ビルマの丘が配置されている。

19 慰霊碑 比島派遣 第三百三十八兵站病院

所在地 大野城市牛頸 2375-10
(福岡中央霊園内)

種別 7 慰霊関係

年代 昭和 63 (1988) 年 10月 5日

概要

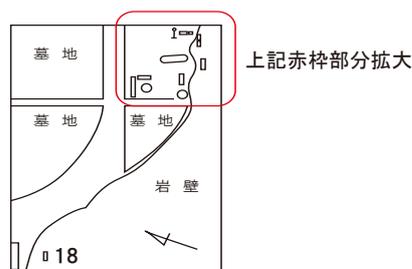
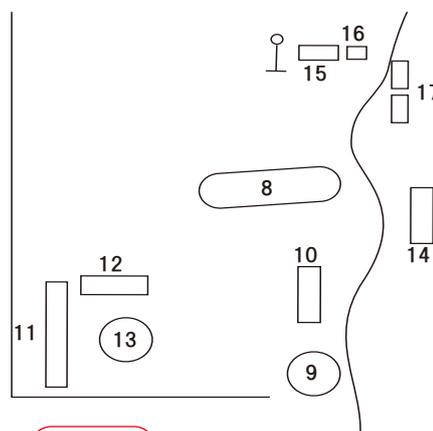
福岡中央霊園内手前側にある。慰霊碑表面に「慰霊碑 比島派遣 第三百三十八兵站病院」と刻まれている。裏面には、第三百三十八兵站病院(渡第九七六六部隊)は昭和18年11月26日小倉陸軍病院において編成され、ルソン島で兵站病院を設営後、レイテ島に渡ったこと等が記されている。碑の内部に比島観音像が納められている。昭和63年10月5日に第三百三十八兵站病院戦友会が建立した。慰霊碑前にはルソン島、レイテ島関係、その他の戦没者(部隊員303名、日本赤十字救護班関係7名)310名の本籍地と



写真3 右側絵馬「薩摩軍本陣」



写真4 左側絵馬「薩摩軍と政府軍の戦い」



第4図 壮烈ビルマ戦場の碑ほか配置略図



写真5 壮烈ビルマ戦場の碑ほか全景

20 皇紀二千六百年記念国旗掲揚台

所在地 大野城市上大利2丁目16-1
(上大利老松神社境内)

種別 7 記念関係

年代 昭和15(1940)年

概要

上大利老松神社境内の東隅にある。石碑の表に「皇紀二千六百年記念」、左側面に「上大利軍人會建之」と刻まれている。高さ115cm(台座含め131cm)、幅32cm、奥行25cmを測る。

参考文献 大野城市2004『大野城市のいしぶみ』、大野城市史編纂委員会編1990『大野城市史』(民俗編)



写真6 皇紀二千六百年記念国旗掲揚台(表)

21 石幟

所在地 大野城市下大利2丁目11-1
(下大利老松神社境内)

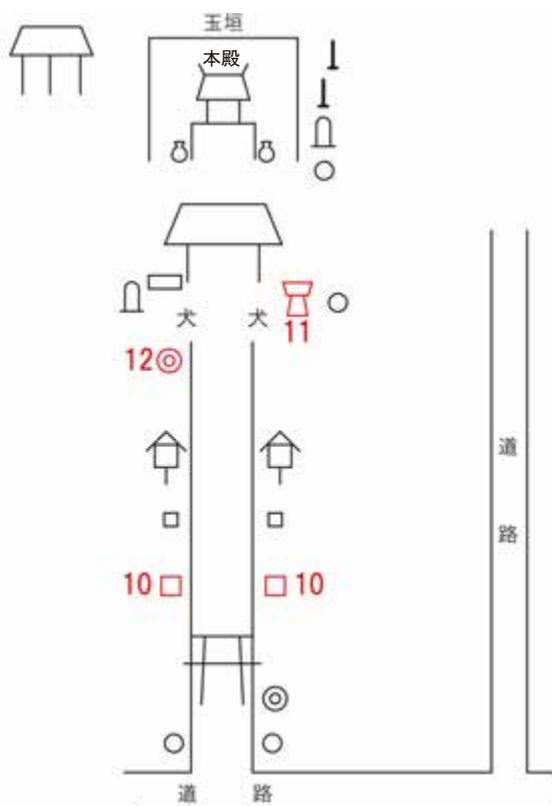
種別 7 記念関係

年代 大正8(1919)年3月

概要

下大利老松神社本殿前にある一対の石幟である。正面右側の石幟表面には「一片丹心三尺劔」、裏面には「大正八年三月吉辰 陸軍中将 従四位勲二等功三級 白水淡書」、右側面には「石工萩尾善太郎」と記されている。正面左側の石幟表面には「神風吹我入郷關」、裏面には「出征記念陸軍歩兵一等卒渋谷藤三郎」と記されている。高さ7cm、幅61cm、奥行58.2cmの台座上に高さ265cm、幅30cm、奥行27.5cmの石幟が載る。

参考文献 大野城市史編纂委員会編1990『大野城市史』(民俗編)



第5図 下大利老松神社境内略図

22 潮井台

所在地 大野城市下大利2丁目11-1
(下大利老松神社境内)

種別 7 記念関係

年代 昭和6(1931)年2月

概要

下大利老松神社本殿の右側にある。潮井台の表に「奉獻」、裏に「昭和六年二月上海事変出



写真7 石幟(表)

征記念 陸軍歩兵上等兵 施主高原広喜」と記されている。高さ16cm、幅101.5cm、奥行60.5cmの台座上に、高さ75cm、幅89.5cm、奥行45.5cmの潮井台が載る。

参考文献 大野城市史編纂委員会編 1990『大野城市史』(民俗編)

23 手洗鉢

所在地 大野城市下大利2丁目11-1
(下大利老松神社境内)

種別 7 記念関係

年代 昭和15(1940)年7月

下大利老松神社本殿の左側にある。手洗鉢の表に「奉献」、裏に「昭和十五年七月出征記念歩兵中尉 吉次清一郎」と刻まれている。高さ20cm、幅94cm、奥行61cmの台座上に、高さ57cm、幅92cm、奥行58cmの手洗鉢が載る。

参考文献 大野城市史編纂委員会編 1990『大野城市史』(民俗編)



写真8 潮井台(裏)



写真9 手洗鉢(裏)

24 御大典記念木

所在地 大野城市仲畑4丁目12-3
(仲島地祇神社境内)

種別 7 記念関係

年代 昭和3(1928)年11月10日

概要

仲島地祇神社境内の記念木の横にある。表には「御大典記念木」、裏に「昭和三年十一月十日 當區軍人會」と刻まれている。高さ73.5cm、幅20cm、奥行14cmを測る。

参考文献 大野城市 2004『大野城市のいしぶみ』、大野城市史編纂委員会編 1990『大野城市史』(民俗編)



写真10 日露戦役記念砲弾塔(表)

25 日露戦役記念砲弾塔

所在地 大野城市仲畑4丁目12-3
(仲島地祇神社境内)

種別 7 記念関係

年代 明治時代?

概要

仲島地祇神社境内の左側にある。高さ138

cm、幅 90cm、奥行 87cmの石碑の上に高さ 37cm、直径 12cmの砲弾が設置されている。石碑の表には「奉献 日露戦役記念」、裏に「村上興八 水上市次郎 村上善六」と刻まれている。

参考文献 大野城市 2004『大野城市のいしぶみ』、大野城市史編纂委員会編 1990『大野城市史』(民俗編)

27 征露紀念之碑

所在地 大野城市山田4丁目7
(山田宝満宮境内)

種別 7 記念・顕彰関係

年代 明治39(1906)年3月

概要

山田宝満宮境内の入口左側にある。石碑の表には「征露紀念之碑 明治三十七年我帝國興師而庸懲露國 干海干陸戰而無不勝 遂得曠古之大捷克復平和宣揚國光 是即 天皇之稜威而將士忠烈之賜也 此役也我筑紫郡大野村山田久保哲龍 鎌田甚三郎 香野榮太郎三氏從軍今也凱旋 郷人相議茲建豊碑爲日露戦役紀念 永垂千後昆 銘曰 縣軍萬里 旗鼓堂堂 百戰破虜 宣揚國光 忠肝義膽 烈若秋霜 以何歌頌 山青水蒼 明治三十九年三月 水野疎梅撰并書」、裏に「福岡市鍛冶町 石工 中村正兵衛」と刻まれている。緑色片岩製。高さ 265cm を測る。
参考文献 大野城市 2004『大野城市のいしぶみ』、大野城市史編纂委員会編 1990『大野城市史』(民俗編)

29 花立

所在地 大野城市雑餉隈町3丁目3-1
(雑餉隈恵比須神社境内)

種別 7 記念・顕彰関係

年代 明治39(1906)年5月

概要

雑餉隈恵比須神社の石造りの本殿右側にある。花立の表には「願成就 出征軍人中」、裏に「明治廿九年五月吉祥日」、右側面に軍人7名の氏名が刻まれている。高さ 104cm、幅 67cm、奥行 67cmを測る。

参考文献 大野城市 2004『大野城市のいしぶみ』



写真 11 征露紀念之碑



写真 12 花立

30 石幟

所在地 大野城市白木原1丁目9-17
(白木原地祿神社境内)

種別 7 記念関係

年代 大正15(1926)年11月

概要

白木原の地祿神社正面石段を上った所にある。右から表に「高德□乾坤」、裏には「大正十五年十一月下旬寄進 桂風謹書 日佐村石工村瀬貞吉」、正面左から表には「偉功安社稷」裏には「当村 従六位勲四等憲兵大尉 森山清朝倉郡朝倉村 古林ヤス」と刻まれている。高さ10cm、幅54.5cm、奥行48.5cmの台座上に、高さ333cm、幅36.5cm、奥行30.5cmを測る。

参考文献 大野城市 2004『大野城市のいしぶみ』



写真13 石幟

31 狛犬

所在地 大野城市白木原1丁目9-17
(白木原地祿神社境内)

種別 7 記念・顕彰関係

年代 大正15(1926)年11月

概要

白木原地祿神社拝殿前にある一対の狛犬である。正面右の狛犬の台座裏面には「陸軍中將 従三位勲一等功二級 白水淡閣下謹書セラル 浮羽郡姫治村小塩 石工高浪□太」、右側面には「平野教學 青柳□ 野口巖雄 野口保二郎」と記されている。正面左の狛犬の台座裏には「花田徳助 花田茂 花田富次 野口健」右側面には「大正十五年十一月」と記されている。高さ250cm、幅145cm、奥行115cmの3段重ねの台座に、高さ155cm、幅60cm、奥行33cmの凝灰岩製の狛犬が配置されている。これまで『大野城市史』(民俗編)と『大野城市のいしぶみ』には正面左の狛犬の情報のみが記載されていた。

参考文献 大野城市 2004『大野城市のいしぶみ』



写真14 狛犬



写真15 狛犬(右)

32 石灯籠

所在地 大野城市瓦田2丁目2-28
(瓦田地祿神社境内)

種別 7 記念関係

年代 昭和14(1939)年1月

概要

瓦田地祿神社拜殿の横にある。石灯籠の竿正面に「奉納」、竿の裏面に「出征御願成就 昭和拾四年一月 瀬利昇一」と刻まれている。高さ218cmを測る。凝灰岩製。

参考文献 大野城市2004『大野城市のいしぶみ』



写真16 石灯籠(裏)

33 瓦田区忠魂碑

所在地 大野城市白木原3丁目4
(瓦田区納骨堂前)

種別 7 慰霊関係

年代 昭和33(1958)年3月

概要

石碑は瓦田区納骨堂前にある。表に「忠魂」、裏に日露戦役戦死者1名と大東亜戦役戦死者(イロハ順)21名の氏名が刻まれている。碑高は300cmを測る。

参考文献 大野城市史編纂委員会編1990『大野城市史』(民俗編)



写真17 瓦田区忠魂碑

34 日露戦役記念碑

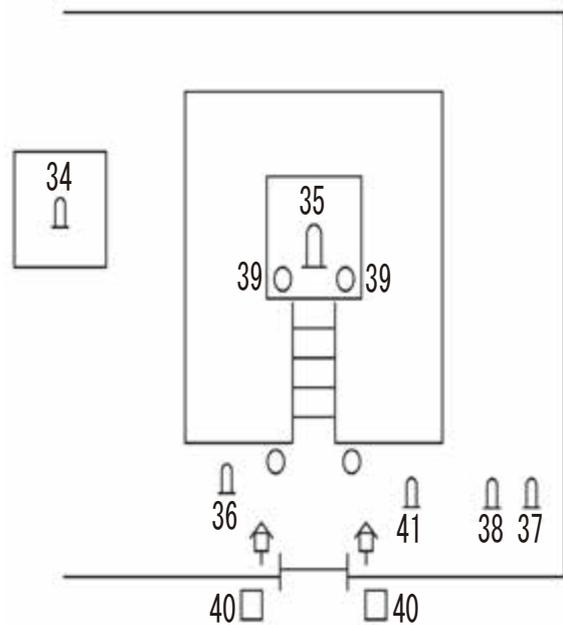
所在地 大野城市瓦田3丁目3

種別 7 記念・慰霊関係

年代 明治39(1906)年4月

概要

日露戦争に大野村から出征した140名の氏名が刻まれている。碑文によると、6名が戦病死している。記念碑の建築資金は全村民の寄付によるものであり、上牛頸、下牛頸、上大利、下大利、白木原、瓦田、筒井、井相田、仲島、畑詰、中、乙金、山田の各区が醸出金を出した。『大野城市のいしぶみ』に全文が記載されている。石碑の表の文末に「従七位文學士 生田徳太郎謹撰 関三郎謹書 明治三十九年四月 岩戸村大字片縄 石工 田中常吉 運搬人 中山竹吉」と刻



第6図 日露戦役記念碑、忠魂碑など配置略図

まれている。

参考文献 大野城市史編纂委員会編 1990『大野城市史』
(民俗編)

35 忠魂碑

所在地 大野城市瓦田3丁目3

種別 7 慰霊関係

年代 昭和15(1940)年2月11日

概要

日露戦役記念碑の東側に位置する。忠魂碑は皇紀二千六百年にあたる昭和15年を記念し、西南戦争以降の戦役における大野村の戦没者の冥福を祈って建立された。陸軍大将の林仙之(なりゆき)閣下の題字である。碑高は約7mを図る。正面に石段を有する石積みの土台上に、オベリスク状の石碑が建てられている。この忠魂碑の建立以後、忠魂碑前で戦没者の村葬が実施されるようになった。しかし太平洋戦争末期には物資不足や空襲警報の頻発で村葬も簡略化された。『山上高太郎日記』によると、日支事変～太平洋戦争終結までの戦没者228名のうち、村葬が行われたのは136名であった。

36 忠魂奉讃碑

所在地 大野城市瓦田3丁目3

種別 7 記念・慰霊関係

年代 昭和15(1940)年2月11日

概要

忠魂碑前の左側にある。「晃天垂悠遠 億兆仰無量光 皇紀二千六百年肇國之日 奉祀大野村尚武会」と刻まれている。碑高は195cm(台座含めると265cm)を測る。題字は大野村長山上高太郎の筆である。

37 忠魂奉祀資金献納者芳名碑

38 忠魂奉祀資金献納者芳名忠魂家族

所在地 大野城市瓦田3丁目3

種別 7 慰霊関係

年代 昭和15(1940)年2月11日

概要



写真18 日露戦役記念碑(表)



写真19 忠魂碑前での村葬(昭和17(1942)年、大野城市所蔵)



写真20 忠魂碑全景

忠魂碑前の戦没者哀頌碑右側にある。昭和15年2月11日に除幕式を行った忠魂碑は村内各種団体、個人、産業組合、工場、出征軍人及び遺族から5,827円の資金により建立された。その明細が「忠魂奉祀資金献納者芳名碑」と「忠魂奉祀資金献納者芳名忠魂家族」の2基の石碑に刻まれている。37は碑高170cm、38は碑高135cmを測る。

39 戦没者墓碑銘

所在地 大野城市瓦田3丁目3

種別 7 慰霊関係

年代 太平洋戦争中?

概要

忠魂碑正面石段を上がった左右に一对で建っている。正面左側には西南役、台湾守備、日露役、シベリア役、支那事変、大東亜戦争に出征して亡くなった25名の氏名が記されている。正面右側は大東亜戦争に従軍した兵士12名の氏名が記されている。建立年代は不明であるが、昭和18年5月18日に忠魂碑前で村葬を行った大東亜戦争戦没者名が最後に刻まれて以降、余白はあるが空白のままである。碑高は112cmを測る。

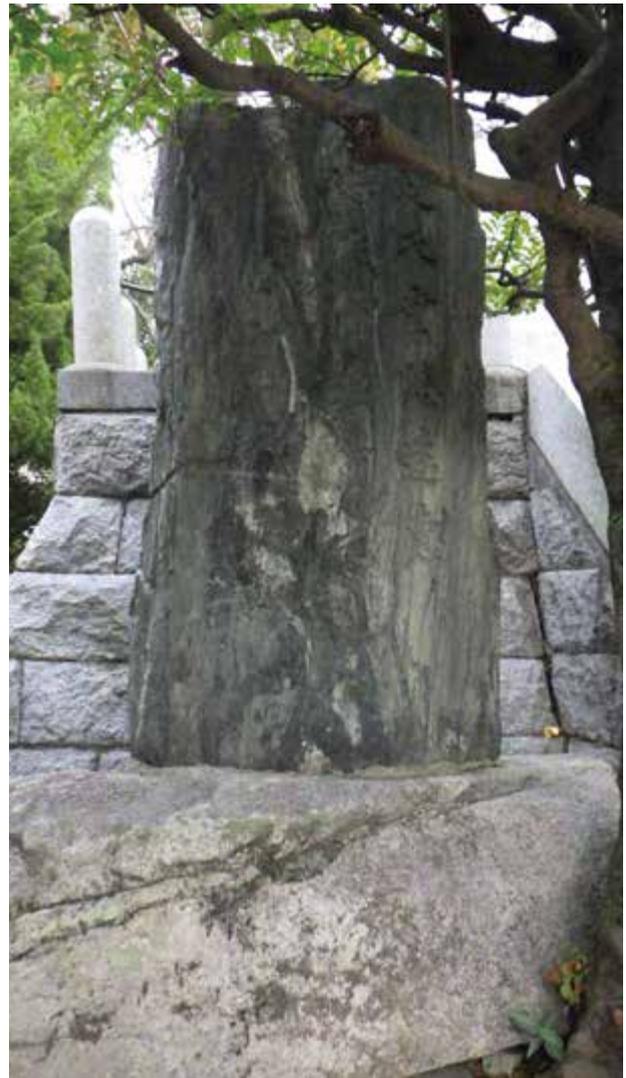


写真21 忠魂奉讃碑（表）

40 石幟

所在地 大野城市瓦田3丁目3

種別 7 記念・顕彰関係

年代 昭和17(1942)年?

概要

忠魂碑前にある。正面右の石幟の表には「天輝士」、裏には「奉献 役場農會養蚕組合職員一同 国民學校 職員 児童 一同 青年學校 職員一同」と刻まれている。正面左の石幟の表には「國耀志」、裏には「皇紀二千六百二年二月十八日大東亜戦争第一次線捷 奉祝記念」と刻まれている。大野村は明治以降、福岡県下でも養蚕の盛んな地域で、現在の大野城市役所やまどかびあには福岡県蚕業試験場や繭検定所があった。石幟はどちらも高さ279cm、幅32cm、



写真22 忠魂奉祀資金献納者芳名碑（右）

忠魂奉祀資金献納者芳名碑忠魂家族（左）

奥行 30cmを測る。

41 戦没者哀頌碑

所在地 大野城市瓦田3丁目3

種別 7 記念・顕彰関係

年代 昭和27(1952)年5月20日

概要

石碑の表には西南戦争(明治10(1877)年)1名、台湾守備(明治28(1895)年)1名、日露戦争(明治37・38(1904~05)年)6名、シベリア出兵(大正7(1918)年)2名、現役兵中に3名、日支事変(昭和12(1937)年)~太平洋戦争終結(昭和20(1945)年)まで228名の戦病死者、計241名の氏名が刻まれている。石碑の裏には「石工 井上美代吉 昭和二十七年五月建之 大野町長白壁喜平次 同町遺族会長藤量」と刻まれている。石碑は大野町と戦没者遺族会で建立された。昭和27年5月20日に大野小学校の講堂において白壁大野町長が祭主となって戦没者慰霊祭を行った。続いて講和条約発効記念式典を挙行後、戦没者哀頌碑の除幕式を行っている。高さ270cm(台座含む316cm)、幅115cm、奥行35cmを測る。

日支事変~太平洋戦争の時の大野村総人口は9,350名ほどで、700名あまりが召集された。そのうち、召集者の31.4%が戦病死している。

34~41の石碑は瓦田公民館北側にあり、瓦田ふれあい公園とゲートボール場に隣接している。これら石碑群が建立されている場所は瓦田地祿神社の所有である。この戦没者哀頌碑が建立された昭和27年以降、毎年8月に戦没者遺族会が忠魂碑前で慰霊祭を実施してきたが、近年は行われていない。現在、戦没者遺族会では年2回、石碑群の定期清掃を実施し、石碑や周辺環境の管理を続けている。



写真23 戦没者墓碑銘(正面左)



写真24 戦没者哀頌碑(正面)

42 日露戦役従軍記念門柱

所在地 大野城市瓦田3丁目2-1
(大野小学校南門)

種別 7 記念関係

年代 明治39(1906)年12月

概要

大野小学校の門柱として現在も使用されている。正面右の門柱側面には「日露戦役従軍記念 陸軍工兵曹長勲七等功七級梅崎竹次郎 陸軍歩兵軍曹勲七等功七級高原虎太郎 陸軍歩兵上等兵勲八等功七級見城市次郎」と刻まれている。正面左の門柱側面には「明治三十九年十二月」と刻まれている。門柱の高さは225cmを測る。



写真25 日露戦役従軍記念門柱

43 軍人勅諭御下賜五十周年記念国旗掲揚台

所在地 大野城市瓦田3丁目2-1
(大野小学校内)

種別 7 記念関係

年代 昭和7(1932)年1月4日

概要

昭和21(1946)年までは大野小学校校庭東南隅にあった奉安殿の前にあり、国旗掲揚台として使用されていた。石碑の表には「勅諭御下賜五十年記念」、右側面に「昭和七年一月四日」、裏に「帝國在郷軍人会大野村分會」と刻まれている。軍人勅諭は日本の軍隊の軍事教練の支柱として旧制中学校、大学校、青年学校等で暗唱させられたもので、明治15(1882)年1月4日に下賜された。掲揚台を建立した大野村在郷軍人会は明治42(1909)年1月25日に発足し、昭和20(1945)年9月20日に解散した。当時の大野村長が記した「山上高太郎日記」には、掲揚台は昭和7年8月20日に建立されたと記されている。碑の高さは142cmを測る。現在、掲揚台は大野町学校校庭に面した校旗と国旗掲揚のポール間に設置されている。

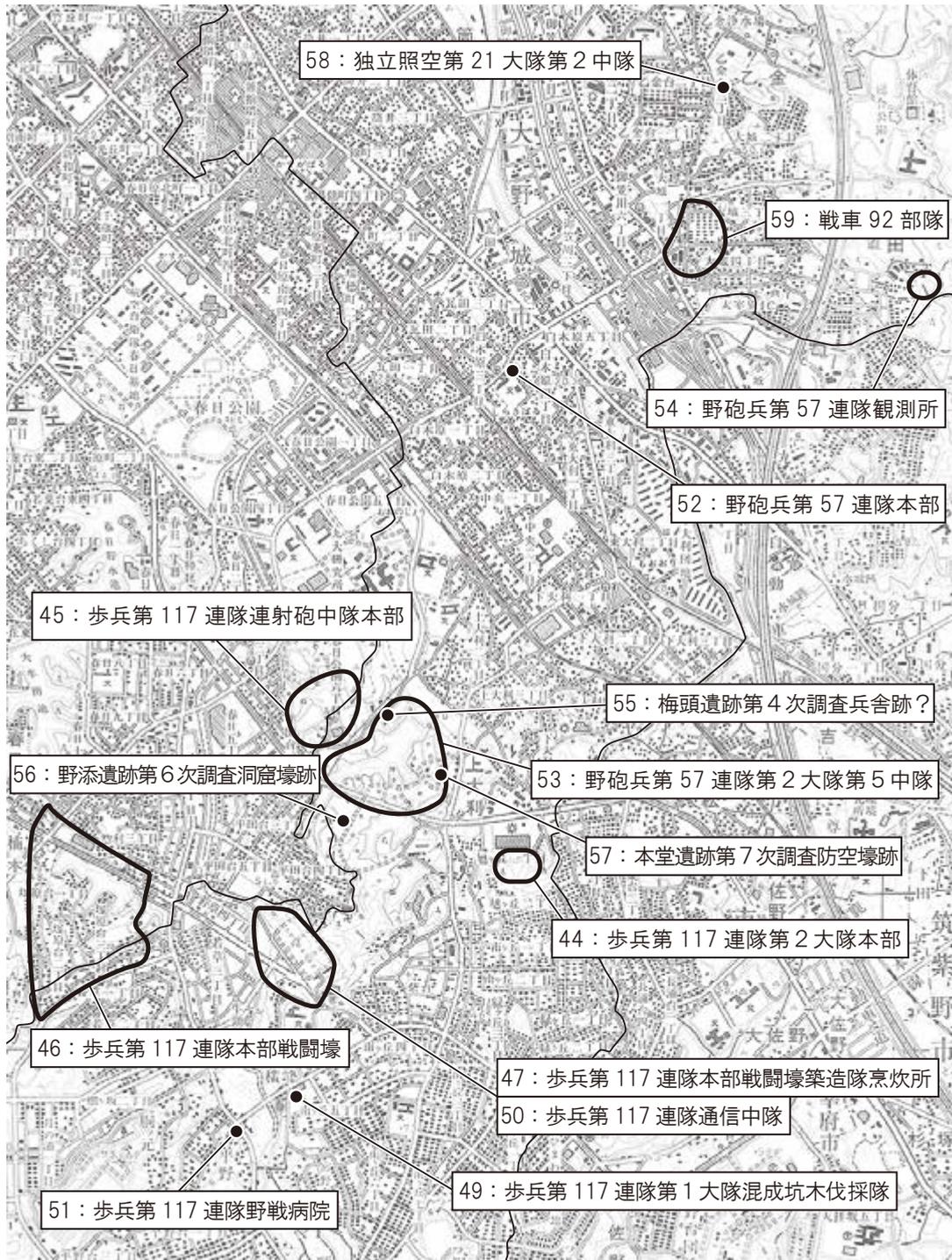
35～43の参考文献 大野城市史編纂委員会編1990『大野城市史』(民俗編)



写真26 日露戦役従軍記念門柱右側文字部分



写真27 軍人勅諭御下賜五十周年記念国旗掲揚台



第7図 歩兵第117連隊・野砲兵第57連隊・独立照空第21大隊・
戦車92部隊及び関連遺跡位置図 (1/30,000)

44～51 歩兵第117連隊第2大隊本部ほか

所在地 大野城市上大利字梅頭・野添、牛頸
字花無尾ほか

種別 2 軍事・防衛関係

年代 昭和20(1945)年4月20日～9月
27日(復員完結)

概要

歩兵第117連隊(通称号「奥」七二二部隊)は昭和15(1840)年8月に秋田市で編成されて第57師団に編入、昭和16(1841)年9月に満州に渡り、満州国黒河省山神府でソビエトと満州の国境防衛に当たっていたが、昭和20年3月31日に本土防衛のために移動を命じられた。同年4月10日に山神府を出発し、同年4月16日に朝鮮半島の清津港から輸送船に乗り、同年4月20日に博多湾に上陸した。連隊は師団命令により連隊本部を筑紫郡日佐国民学校に置き、第2大隊本部を筑紫郡大野村上大利野添に置いた。

52～54 野砲兵第57連隊本部ほか

所在地 大野城市釜蓋、瓦田、上大利ほか

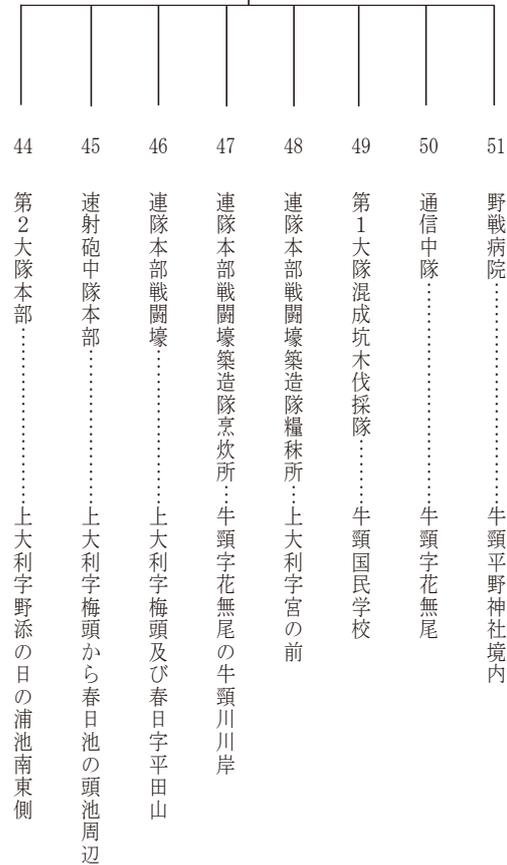
種別 2 軍事・防衛関係

年代 昭和20(1945)年4月15日～9月
30日(復員完結)

概要

野砲兵第57連隊(通称号「奥」七二二部隊)は昭和15(1840)年7月に青森県弘前市で編成され、昭和16(1841)年7月に満州国黒河省山神府でソビエトと満州の国境防衛に当たっていた。昭和20年3月下旬に移駐の命令が下り、同年4月3日に山神府を出発し、同年4月15日に博多湾に上陸した。連隊本部を糟屋郡久山町久原の龍興寺に置き、大野村には第2大隊第5中隊を上大利字梅頭の三兼池周辺に兵舎を造り、南北両岸に洞窟壕を築造して布陣した。段列は上大利字谷蟹に洞窟壕を築造した。戦局の激化に伴い、同年5月20日に久山町の連隊本部は大野村瓦田の大野国民学校に移駐し、大野村釜蓋区の紅付岩に観測所を設けた。

歩兵第117連隊



第8図 大野村での歩兵第117連隊配備図



第9図 歩兵第117連隊通信中隊三角兵舎イラスト

参考文献 遠藤樹之助・加藤直勝編 1979『写真集郷土部隊の戦歴』(秋田県の戦友Ⅱ)、春日市史編纂委員会編 1990『春日市史中巻』(近代・現代・農業水利)、大野城市史編さん委員会編 2004『大野城市下巻』(近代・現代編)

55 梅頭遺跡第4次調査兵舎跡？

所在地 大野城市上大利字梅頭

種別 2 軍事・防衛関係

年代 太平洋戦争時？

概要

調査担当者によると上大利北土地区画整理に伴う梅頭遺跡第4次調査で、調査地東側丘陵上に三角兵舎の跡とおぼしき土坑を確認した。



写真 28 野添遺跡第6次調査洞窟壕跡全景

56 野添遺跡第6次調査洞窟壕跡

所在地 大野城市上大利字梅頭

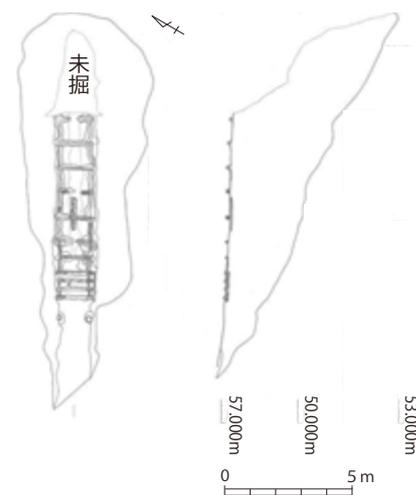
種別 2 軍事・防衛関係

年代 昭和20(1945)年頃か

概要

野添遺跡第6次調査時に、丘陵中腹を高さ約3m、幅1.5～1.7mに水平に掘り込んでいた横穴が検出された。約16.5mまで奥に掘り進んだが、完掘できず調査を断念した。山腹に大規模な横穴が掘られ、柱や床面に松を用いた構築材を使用していた。地元住民から昭和20年に上大利から南側丘陵地に陸軍が本土決戦に備え陣地構築をしており、松材を使用していたとの証言があった。遺物は出土していないが本土決戦向けに陸軍が構築した遺構と考えられる。

参考文献 大野城市史編さん委員会編2004『大野城市下巻』(近代・現代編)、大野城市教育委員会2006『牛頸野添遺跡群Ⅲ～第6・8次調査～』



第10図 野添遺跡第6次洞窟壕跡実測図(1/300)

57 本堂遺跡第7次調査防空壕跡？

所在地 大野城市上大利字本堂

種別 2 軍事・防衛関係

年代 太平洋戦争時？

概要

本堂遺跡第7次調査地に面した北側丘陵付近斜面に位置したため、未調査のままである。細長い形状から野添遺跡第6次調査と同様な防空壕の可能性はある。

参考文献 大野城市史編さん委員会編2004『大野城市下巻』(近代・現代編)、大野城市教育委員会2008『牛



写真 29 本堂遺跡第7次調査全景

58 独立照空第21大隊第2中隊

所在地 大野城市釜蓋字雉ヶ尾

種別 2 軍事・防衛関係

年代 昭和20(1945)年5月11日～9月20日

概要

独立照空第21大隊(通称号「彗」八〇七九部隊)は昭和16(1941)年に広島で編成された部隊。『山上高太郎日記』(昭和20年5月12日)によると、「軍曹「今まで遠賀で陣地を構築して居たが、雉ヶ尾に昨夕方移動して来た。労力の協力をお願いしたい」と申出て五十人の二週間位要すると、用具等打合はせて受諾する。事は急になつたらしい。」と記されている。陣地は沖坂池南側の松山と北側の桃畑を拓いて、照空灯、聴音機、対空双眼鏡、発電掲載車などを配備し、照空灯を据え付け、周囲に兵舎などを築造した。同年6月19日の福岡大空襲の時には、ここの照空灯もB29の姿をくっきりと照らし出していた。

参考文献 大野城市史編さん委員会編2004『大野城市下巻』(近代・現代編)、『山上高太郎日記』

59 戦車92部隊

所在地 大野城市上大利、釜蓋付近

種別 2 軍事・防衛関係

年代 昭和20(1945)年7月30日(大野村配備)

概要

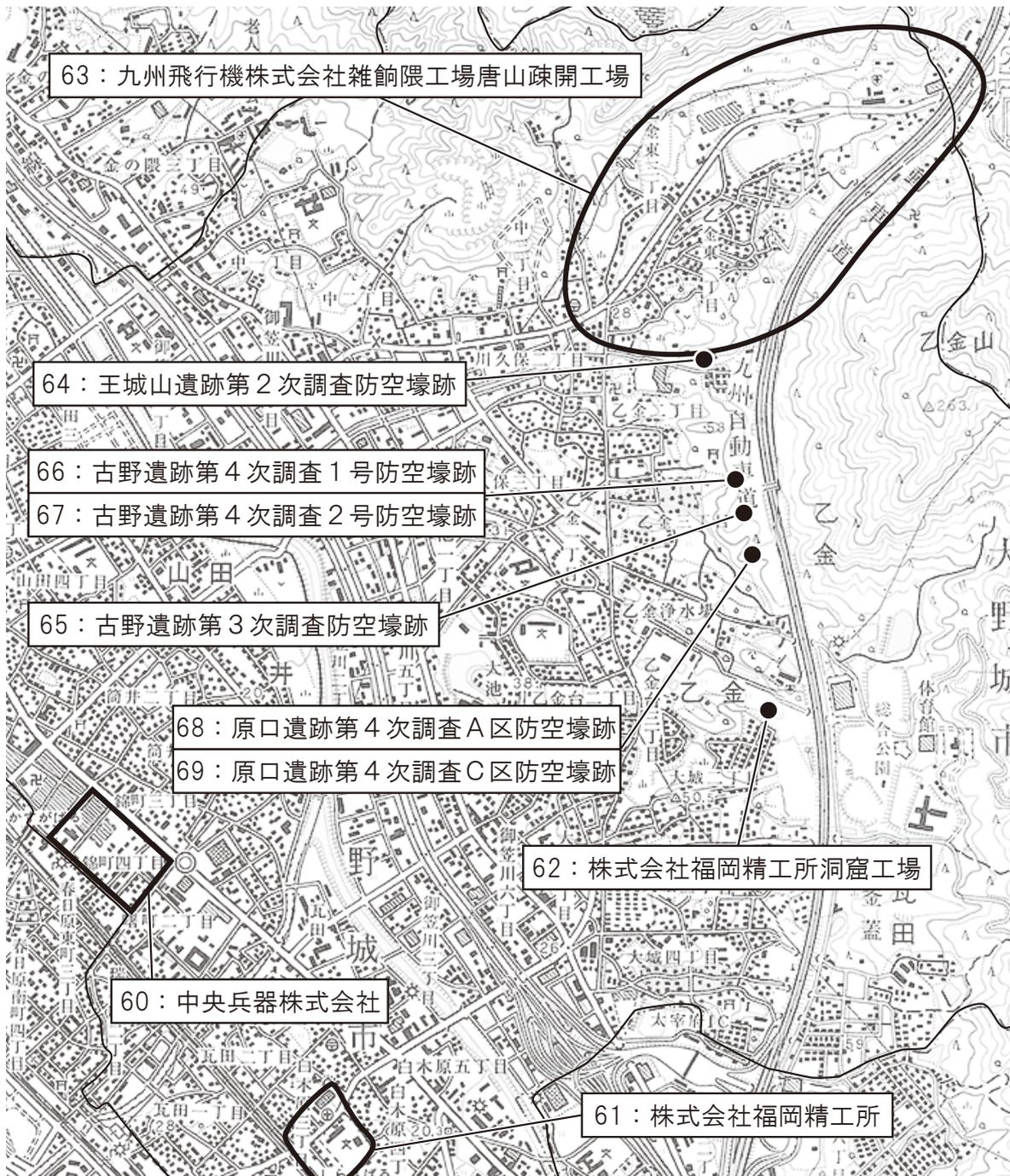
『山上高太郎日記』に「昭和二十年七月三十日 九二部隊(戦車)副官と外一人来る。平田、上大利に来るそう。いよいよ切迫に近づいたか。」「昭和二十年八月七日 陸軍技手福住清氏来場 戦車壕を釜蓋県道に造るから関連した工作を村道にも造らなければならぬが了承してほしい。更に用材、人夫等の協力を願うと。一切を受諾する。かような処に敵の戦車が来るのだらうかと考えた。」と記されている。『大野城市史』(下巻)に歩兵第117連隊第2大隊本部の伍長や地元住民の話として、「上大利の船頭ヶ浦池の東側辺に戦車が数台駐留していた。上大利の梅頭や谷蟹の丘陵地帯に道路を造るときには、戦車を数回往復させて道を開いていた。また釜蓋の水城村境の所に戦車壕が造られていた。」と記載されている。

参考文献 大野城市史編さん委員会編2004『大野城市下巻』(近代・現代編)、『山上高太郎日記』



第11図 独立照空第21大隊第2中隊 雉ヶ尾陣地配置略図

(『山上高太郎日記』昭和20年9月19日より作図)



第12図 中央兵器株式会社・株式会社福岡精工所及び周辺遺跡位置図 (1/20,000)



写真30 株式会社宮田製作所
(『宮田自転車70年誌』昭和35(1960)年より)



写真31 株式会社福岡精工所2階建て建物
(『大野中学校卒業アルバム』昭和29(1954)年より)

60 中央兵器株式会社

所在地 大野城市錦町1・2丁目

所有者 私有地など（大野城イオンなど）

種別 3 生産関係

年代 昭和18（1943）年9月（海軍指定）

昭和20（1945）年9月もしくは10月（進駐軍接收）、昭和26（1951）年（接收解除）

概要

昭和14（1939）年2月11日に日本自動車株式会社福岡工場が操業した。自動車の修理が主流で他に航空機の部品も作っていた。昭和18年9月3日、日本自動車株式会社福岡工場に航空機用水雷を作るように海軍から命令があった。これを受けて、工場資本を大倉に移し社名も「中央兵器株式会社」に変更した。旧日本自動車工場の施設設備を整備して、魚雷運搬車、魚雷部品、航空機部品の製造を行った。終戦間際には人間魚雷の部品製造も作っていたと言われている。従業員は1,900人くらいであった。昭和20年9月（10月の記録もある）に米国進駐軍に接收され、元航空機部品製造工場の建物を進駐軍兵士の宿舎にし、将校クラスは国道3号線（現在の県道112号線）東側の2階建ての元徴用工員寮2棟のうち、新しい方の寮で寝泊まりしていた。昭和21（1946）年5月に進駐軍兵士は引き揚げたが、旧中央兵器株式会社の従業員の一部は進駐軍労務者として雇用され続け、進駐軍が接收した工場機械器具がサビつかないように手入れして保管する仕事だった。「これを埋め戻せと命じられ、米兵の監視下で10ヵ月ほどかけて防空壕をつぶした。」との証言記録（読売新聞平成28（2016）年10月13日記事）があり、工場の地下に巨大な防空壕が掘られていたことが判る。昭和26（1951）年に進駐軍の接收は解除された。

参考文献 大野城市史編さん委員会編2004『大野城市下巻』（近代・現代編）

61 株式会社福岡精工所

所在地 大野城市白木原

所有者 私有地・公有地など（大野中学校、福岡県筑紫合同庁舎など）

種別 3 生産関係

年代 昭和16（1941）年10月（海軍管理工場指定）

昭和21（1945）年10月10日（工場用地の一部進駐軍接收）

概要

昭和11（1936）年9月18日からギヤコムコースター付自転車を製作していた株式会社宮田製作所を、昭和16年8月に福岡精工所株式会社を買収し水上飛行機のフロートや魚雷の製造を開始した。昭和17～18（1942～43）年にかけて周囲の田畑を買収して工場用地を拡大した。従業員は最盛期に約3,500人であった。昭和20年4月に第1疎開地として大野村乙金小字通り谷の丘陵地を買収し、隧道を掘り、旋盤機械などを入れて作業を開始した。その後、第2疎開地として大野村乙金小字雉ヶ尾北方の森林地帯を買収して工事を始めたが、終戦となり工事は中止された。同年10月10日に米国進駐軍により工場用地の一部が接收され、工場の一部と西側の寮に米国進駐軍第127連隊第1大隊（通称レッドアロー部隊）600人が駐留した。この他に、板付基地春日原住宅地区の住宅建築人夫収容所に当てられた。昭和21年3月からアルミやジェラルミンを材料にした家庭用品の製造を開始したが、昭和27（1952）年に工場は閉鎖した。

参考文献 大野城市史編さん委員会編2004『大野城市下巻』（近代・現代編）

62 株式会社福岡精工所洞窟工場

所在地 大野城市乙金

種別 3 生産関係

年代 昭和20(1945)年1月～8月15日

概要

株式会社福岡精工所はB-29による空襲を避けるため、工場の疎開を開始した。昭和20年1月24日に四王寺山麓の釜蓋原を工場全面移転の候補地に選定したが、第1疎開地として同年4月に大野村乙金小字通り谷の丘陵地を買収した。隧道を掘り、その中に旋盤機械などを入れて作業を開始した。次に第2疎開地として大野村乙金小字雉ヶ尾北方の森林地帯を買収して工事を進めていたが、同年8月15日に終戦となり工事を中止した。参考文献 大野城市史編さん委員会編 2004『大野城市下巻』(近代・現代編)

63 九州飛行機株式会社雑餉隈工場

唐山疎開工場

所在地 大野城市乙金字唐山

種別 3 生産関係

年代 昭和20(1945)年2月～8月

概要

昭和20年、那珂町と春日村に跨る軍需工場・九州飛行機株式会社雑餉隈工場は、筑紫郡筑紫村、御笠村、大野村、糟屋郡須恵村や福岡市今津などに分散疎開させた。地元古老たちの記憶では、唐山池の東側に一番大きなU字型壕があり、南側には南北方向に5つの入口、東西方向に2つの入口があった。唐山池の北側の宇美道を隔てたところにも2～3本の入口があった。地下壕の入口と宇美道との間の深田には壕を掘り出した土で取付道路が作られていた。乙金東公民館北側の工場には2千トンの圧力プレス機が据え付けられ、飛行機の胴体や翼のプレス加工をしていた。同年5月12日の『山上高太郎日記』には「藤井少尉に案内されて地下壕を見る。之なる哉と思った。旋盤は既に運転しており業者の目は光っていた。数十台の旋盤がU字型の地下に並んでいた。」と書かれている。



写真 32 軍用自転車折畳状況

(『宮田自転車70年誌』昭和35(1960)年より)



第13図 九州飛行機株式会社唐山疎開工場見取り略図



写真 33 米軍に接收された極地戦闘機・震電

(昭和20(1945)年、渡辺鉄工株式会社提供)

参考文献 大野城市史編さん委員会編 2004『大野城市下巻』（近代・現代編）、『山上高太郎日記』、粕屋町教育委員会 1997『平成9年募集一戦争体験記一』

64 王城山遺跡第2次調査防空壕跡

所在地 大野城市乙金2丁目910-44、
910-60、917-18の一部

種別 3 生産関係

年代 昭和20(1945)年?

概要

丘陵北側裾部の2ヶ所に入口を設置し、東西50m、南北35mの平面コの字形を呈す。壕の幅は床面で3m、床面から天井部までの高さは3mである。東辺部の床面は南東隅部付近が最も高く、北側に向って緩やかに低くなる。壕内部の壁面は全面に板(厚さ3cm、幅25cm、長さ1.6~2.0m)を貼っており、東側から施工していたと考えられる。板材の内側(壕内部)に20~50cm間隔で直径20cmの柱を立てて、天井と板材を支えていた。床面から1.5mほどの高さには板材の内側(壕内部)に直径15cmほどの丸太材を横方向に設置する。丸太材と柱材は鋸で固定する。床面にも板を設置していた可能性が高い。東側入口から南20mの地点から東南隅部までの間にL字形・コ字形の金具を床面に打ち込んでおり、機械類を設置するための土台と考えられる。東側入口より13m南の地点では、40cm四方・高さ60cmの方柱状を呈する土台があった。防空壕跡は規模が大きいこと、多くの機械類が出土しており、九州飛行機株式会社もしくは株式会社福岡精工所の地下疎開工場の飛行機部品を製造していた可能性が高い。

参考文献 大野城市教育委員会 2016『乙金地区遺跡群15~王城山遺跡第1・2次調査~』大野城市文化財調査報告書第139集

65 古野遺跡第3次調査防空壕跡

所在地 大野城市乙金3丁目
699、910-64、905-1の一部

種別 4 居住関係



写真34 王城山遺跡第2次調査防空壕跡全景

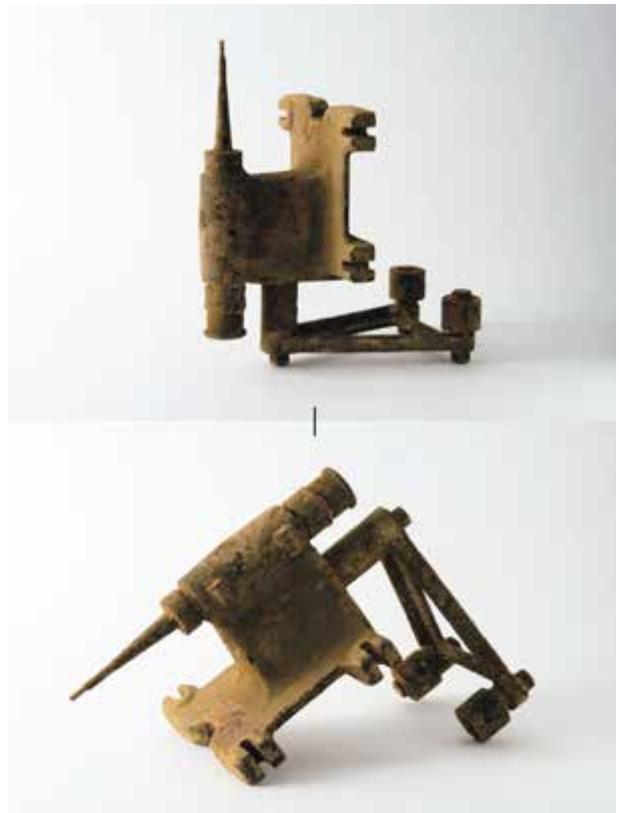


写真35 王城山遺跡第2次調査防空壕跡出土遺物



写真36 王城山遺跡第2次調査防空壕跡出土遺物

年 代 昭和 20 (1945) 年?

概 要

西向き急斜面に横穴を掘削して築造し、2ヶ所に入口部を設置している。平面コの字形を呈する。全長約 38 m、床面からの高さ 2 m、床面の幅は 1.9 ~ 2.6 m、断面は台形である。床面の壁際に約 60cm 間隔で柱穴が規則的に並び、壁面補強のための柱穴と思われる。入口部分の柱穴が多く検出され、入口が補強されていた。壕内から鉄器、木材、鉄釘が出土している。

参考文献 大野城市教育委員会 2015 『乙金地区遺跡群 12 ~ 古野遺跡第 2・3・5 次調査 ~』

66 古野遺跡第 4 次調査 1 号防空壕跡

所在地 大野城市乙金 2 丁目 849-2 ほか

種 別 4 居住関係

年 代 昭和 20 (1945) 年?

概 要

西丘陵北側の急斜面裾部付近に横穴を掘削して構築され、南北 9 m 以上を確認した。床面の標高は 33 m 前後で、幅は 1.5 ~ 1.7 m で南側が高い。壁面沿いには 1.5 m 間隔で柱穴が並び、壁面を補強する支柱と考える。出土遺物はない。

67 古野遺跡第 4 次調査 2 号防空壕跡

所在地 大野城市乙金 2 丁目 849-2 ほか

種 別 4 居住関係

年 代 昭和 20 (1945) 年?

概 要

調査区西丘陵中央の北側急斜面裾部の 2ヶ所に入口を設置する。床面の標高は 39.5 m 前後である。発掘作業の安全対策のため、床面から高さ 1 m まで重機で丘陵を掘削した後、防空壕内に A ~ E 区を設け、調査を行った。平面はおおむね L 字型を呈し、一部クランク状に屈曲する。規模は直線距離で南北 11 m、東西 17 m である。床面の幅は東西入口が 1 m、B 区がもっとも広く 2 m 前後、他は 1 ~ 1.3 m である。A 区床面は長さ 10 m、幅 1 m の範囲が硬化していた。遺物の多くは B 区で出土し、重要な空間であったことを示している。C・D 区のクラン



写真 37 古野遺跡第 3 次調査防空壕跡全景



写真 38 古野遺跡第 4 次調査 1 号防空壕跡全景



写真 39 古野遺跡第 4 次調査 2 号防空壕跡全景



写真 40 古野遺跡第 4 次調査 2 号 B 区防空壕跡
出土遺物

ク状の構造は爆風を防ぐ効果を意図したものと
考えられる。参考文献 大野城市教育委員会 2017『乙
金地区遺跡群 21 ～古野遺跡第 4 次調査～』

68 原口遺跡第 4 次調査 A 区防空壕跡

所在地 大野城市乙金 3 丁目

670、680、681 他の各一部

種 別 4 居住関係

年 代 昭和 20 (1945) 年?

概 要

横穴が東西方向に直線的にのび、長さは 35
m 以上、幅 3.5 ～ 3.6 m、深さ 1.5 m 以上と考
えられる。東西方向に板材を貼った後、南北方
向の横木で補強したものと考えられる。両側壁
沿いに 1 ～ 2 m 間隔で柱材が残る。壕内から釘
や鏝と考えられる鉄製品が出土した。

69 原口遺跡第 4 次調査 C 区防空壕跡

所在地 大野城市乙金 3 丁目

670、680、681 他の各一部

種 別 4 居住関係

年 代 昭和 20 (1945) 年?

概 要

丘陵に掘削した横穴が南北方向に直線的にの
びる。残存長約 22 m、最大幅約 3.4 m を測り、
天井の高さは崩落のため不明である。壁沿いの
床面で直径 15cm ほどの柱穴を確認し、東側の
柱穴列はおおむね 1 m 間隔であるが、西側の柱
穴列は一部密集する部分がある。西側柱穴列に
接して、深さ 10 ～ 20cm の排水溝と考えられる
溝が検出されている。壕内から板材や柱材、針
金、鉄板が出土した。参考文献 大野城市教育委員
会 2013『乙金地区遺跡群 7 ～原口遺跡第 1 ～ 4 次調査～』

70 後原遺跡第 22 次調査防空壕跡

所在地 大野城市白木原 1 丁目 273 ほか

種 別 4 居住関係

年 代 昭和 19 ～ 20 年頃か

概 要

長辺 2.13 m、短辺 1.55 m の長方形を呈す
防空壕 S K 14 が検出された。戦時下の一般住
宅用防空壕跡と考えられる。参考文献 大野城市
教育委員会 2017『後原遺跡 3 - 第 22 次調査 -』



写真 41 原口遺跡第 4 次調査 A 区防空壕跡全景

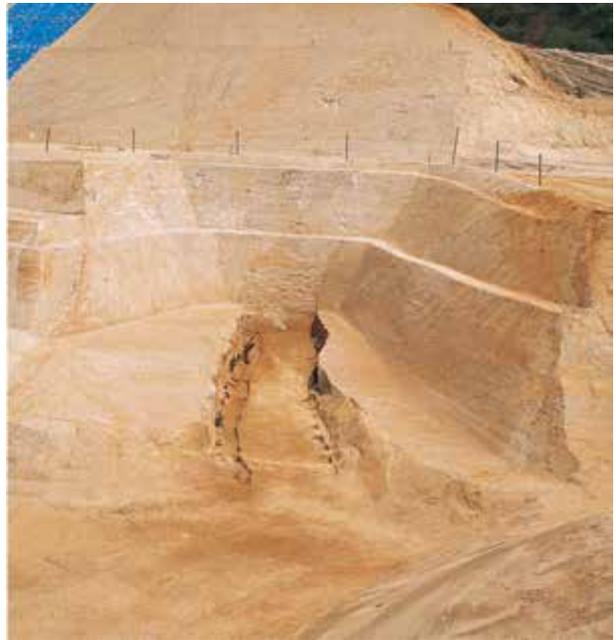
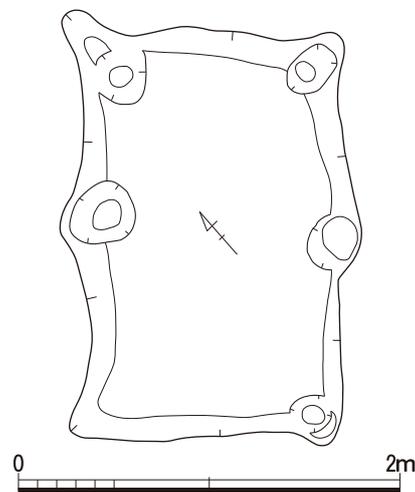


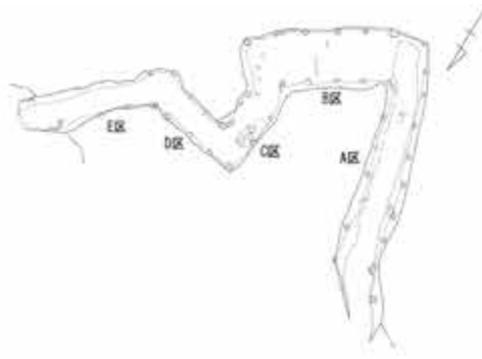
写真 42 原口遺跡第 4 次調査 C 区防空壕跡全景



第 14 図 後原遺跡第 22 次調査 S K 14 防空壕跡平面図 (1/40)



古野遺跡第4次調査1号防空壕跡



古野遺跡第4次調査2号防空壕跡



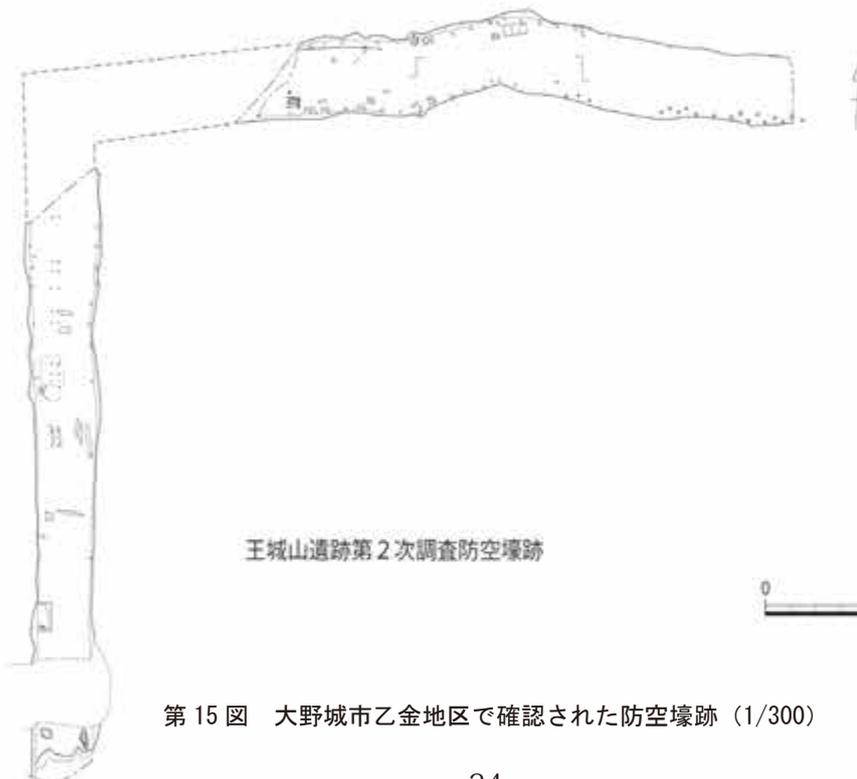
古野遺跡第3次調査防空壕跡



原口遺跡第4次調査A区防空壕跡



原口遺跡第4次調査C区防空壕跡



王城山遺跡第2次調査防空壕跡



第15図 大野城市乙金地区で確認された防空壕跡 (1/300)

71 板付基地春日原住宅地区 (ITAZUKE AIR BASE ANNEX)

所在地 大野城市上大利及び春日市

種 別 2 軍事・防衛関係

年 代 昭和 20 (1945) 年 9 月～昭和 47 (1972) 年 6 月 30 日

概 要

昭和 20 年 9 月 22 日、福岡県に進駐した米国進駐軍は旧日本軍の軍事施設や軍需工場を接收した。大野村にあった中央兵器株式会社と株式会社福岡精工所も接收され、各工場内や工員用寮を接收住宅として使用した。接收された株式会社福岡精工所の工場内建物は板付基地の住宅建築を行う入居者として使用された。進駐軍の住宅エリア・板付基地春日原住宅地区は、春日村の軍需工場・小倉陸軍造兵廠春日製造所と、地続きだった大野村上大利の山林や墓地を米国進駐軍が買収して約 165 万㎡の広大な土地に造成された。造成工事は昭和 21 (1946) 年に始まり、進駐軍の将校家族用住宅 (DEPENDENT HOUSING) や宿舎を中心に、将校クラブや空軍クラブ、下士官クラブの他、ボウリング場や野球場、スケート場、体育館、プール、モトクロスバイクレース場などのスポーツ施設、映画館や劇場、ビリヤード場などの娯楽施設、レストランや銀行、病院、教会、F E N (極東放送) のスタジオなどの施設が建築された。基地内への物資の搬出入は旧小倉陸軍造兵廠春日製造所の引き込み線と、白木原信号所を新たに設置して行われた。板付基地春日原住宅地区は鉄条網が張られたフェンスと高いコンクリートの塀で囲まれ、周囲の大野村や春日村とは隔絶されたアメリカの町そのものだった。戦後、直接・間接含めて多くの日本人が雇用された。板付基地春日原住宅地区への出入口は春日村春日原に面した正門の北門 (NORTH GATE) と、大野村白木原に面した東門 (EAST GATE) が設置された。大野村の住民は板付基地春日原住宅地区のことをベース、あるいは白木原ベースと呼ぶようになった。昭和 25 (1950) 年 6 月に朝鮮戦争が勃発し、多くの米兵とその家族、軍関係者が板付基地に駐留することになった。昭和 29 (1954) 年に板付基地春日原住宅地区の敷地内に航空自衛隊春日基地が開庁した。

基地に商品を納入する地元業者は「板付基地商工会」を結成していた。基地内への出店許可を受けたコンセッションが中心で、理容・美容院・洗濯屋・洋服屋・写真屋・花屋・タクシー等である。地元業者が B X に納入する商品には、カメラ・竹細工・陶器・貴金属・宝石等があった。昭和 35 (1960) 年 4 月～昭和 36 (1961) 年 1 月のデータで基地と調達契約をした業者数は九州地区で福岡県 78%、長崎県 20% を占める。個人消費は貨幣で行うが、基地内で流通する通貨はすべて軍票に限られている。軍票を日本円に交換する業務は基地内のチェイス・マンハッタン銀行の他、各クラブでも代行していた。ただし、軍票を日本円に交換した場合、軍票への再交換は禁止されていた。昭和 35 (1960) 年末、駐留する米兵とその家族 1 万人に対し、日本人労務者約 7 千人を雇用する基地経済は、大野町の地域経済にも大きな影響を与えていた。地域別の労務者は福岡市 1,109 人 (39%)、春日町 416 人 (15%)、大野町 159 人 (6%)、筑紫野町 152 人 (5%)、志賀町 151 人 (5%)、和白町 149 人 (5%) と基地周辺市町村の比率が高い。板付基地春日原住宅地区の存在は地域経済に大きな影響を与えた一方で、重大な事故や事件が発生した。昭和 38 (1963) 年 12 月、板付基地を中継基地化し縮小することが発表された。昭和 39 (1964) 年 5 月 4 日には板付基地から横田基地へ移駐を開始し、日本人労務者の 40～50% が解雇された。昭和 47 (1972) 年 6 月 30 日に板付基地春日原住宅地は返還された。



写真 43 板付基地春日原住宅地区のDH住宅（春日市所蔵）



写真 44 板付基地司令本部（春日市所蔵）



第 16 図 板付基地春日原住宅地区内の施設配置図（1/15,000）

- ①ボウリング場 ②輸送オフィス ③コミュニティセンター ④プール ⑤FEN放送局 ⑥浄水場 ⑦ハウス事務所 ⑧給油所 ⑨カミサリ（板付スーパーマーケット） ⑩プラットフォーム ⑪航空自衛隊司令部
- ⑫歯医者 ⑬動物病院 ⑭家族用住宅 ⑮家族用住宅 ⑯下士官クラブ ⑰洋服店 ⑱赤十字 ⑲郵便局 ⑳食堂 ㉑図書館 ㉒クリーニング ㉓銀行 ㉔体育館 ㉕BX ㉖映画館 ㉗BX・カフェテリア ㉘フットボール場 ㉙春日コート ㉚ハウス供給事務所 ㉛空軍憲兵本部 ㉜病院 ㉝ゲストハウス ㉞財務オフィス ㉟野球場 ㊱AACs ㊲兵士用宿舎 ㊳中古品店 ㊴空軍クラブ ㊵ベース司令部 ㊶信用組合 ㊷将校クラブ
- ㊸独身将校宿舎 ㊹ヘリポート ㊺少年野球場 ㊻教会 ㊼学校 ㊽レーダー基地 ㊾モトクロスバイク場 ㊿モンキーハウス

72 御供田遺跡第8次調査 板付基地春日原住宅地区関連遺構

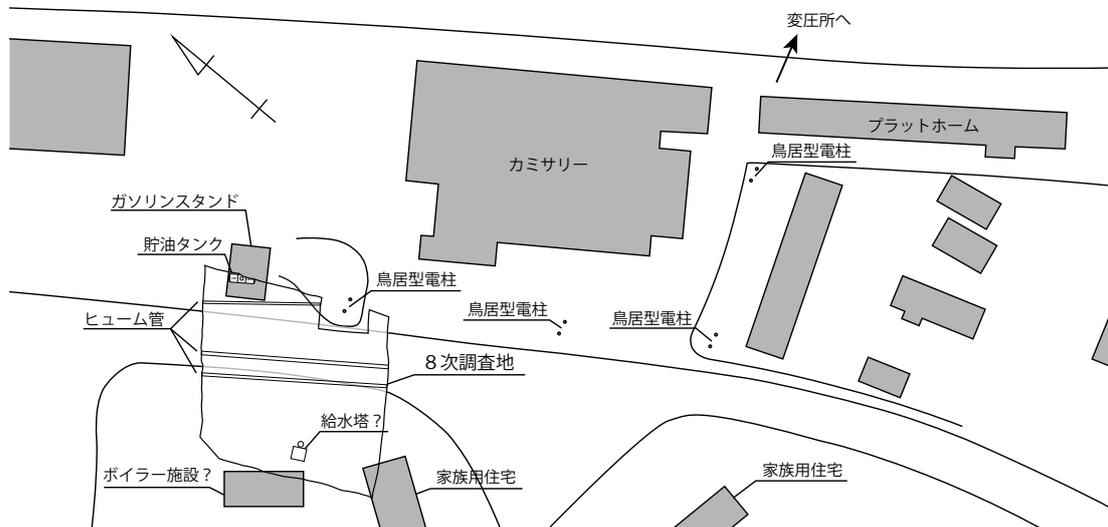
所在地 大野城市上大利白木原 317-13

種別 6 交通・インフラ関係

年代 昭和20(1945)年中頃～昭和47(1972)年6月30日

概要

板付基地春日原住宅地区内の施設配置図と本調査地の遺構配置図を重ねたものが、第17図である。本調査地は、春日原住宅地区の東に位置する。昭和36(1961)年の空中写真を見ると、北西から南東にかけてアスファルト舗装の道路が走り、道路の北東にはガソリンスタンドが建ち、調査地のさらに西側には家族用住宅が建っている。従って調査区西側で確認した造成土は、家族用住宅など施設の建設に伴うものと考えられる。昭和23(1948)年の空中写真では、調査地西側周辺は、造成された箇所と自然丘陵が残る箇所があるが、昭和31(1956)年の空中写真では自然丘陵部分の造成が行われており、昭和36年には、家族用住宅が立ち並んでいる。これは、基地内の住宅不足に対応した結果と考えられる。貯油タンクが検出された場所には、当時ガソリンスタンドが建っていることが判明した。この施設は昭和23(1948)年の空中写真には写っていないため、貯油タンクは、昭和23年から昭和36年の間に埋められ、板付基地返還の昭和47(1972)年まで利用されていた可能性がある。コンクリート構造物は、春日原住宅地区内の家族用住宅が木造であったことから、特殊な構造物とみられる。これは水槽の可能性があり、候補として給水塔が挙がる。鋼管が接続していることから、ポンプを用いてタンクに揚水し、タンクから各施設へ配水したのではないかと考えられる。昭和23(1948)年の空中写真には写っていないが、昭和31(1956)年の空中写真に写っていることから、昭和23年から昭和31年の間、自然丘陵部分の整地と同時期に建設されたと推測できる。調査区内で見つかった配管は、セントラルヒーティング配管と下水用のヒューム管である。西側造成土(家族用住宅地)で見つかったセントラルヒーティング配管は、ボイラーで発生させた蒸気熱を春日原住宅地区の住宅や施設内部に届けるための配管で、蒸気管と蒸気の熱を放出して温度が下がった凝縮水(ドレン)管の二本が通っている。また下水用のヒューム管は、径の大きいものと小さいものが通っており、大きいものは雨水管で、小さいものは汚水管とみられる。白木原地区の聞き取り調査の結果、雨水はヒューム管により直接牛頸川に流され、汚水は一度春日原住宅地区にある浄水施設に集められ、浄化後に牛頸川に流されることが判明した。



第17図 御供田遺跡第8次調査区と板付基地春日原住宅地区施設配置図(1/1,400)

73・74 木製鳥居型電柱

所在地 大野城市白木原 317-13

種 別 6 インフラ関係

年 代 昭和 20 (1945) 年中頃～昭和 47 (1972)
年 6 月 30 日

概 要

電柱は、御供田遺跡第 8 次調査地の東側に 2 基存在し、調査地内で唯一地上に存在する板付基地関連の構造物である。

両者は約 40 m 離れて設置されており、配電線はすでに撤去されている。

昭和 47 (1972) 年の住宅地図を見ると、中央 1 丁目 343-4 周辺に変圧所があることが判明した。また昭和 36 (1961) 年の空中写真を見ると、この変圧所から調査した電柱の間には 3 本の鳥居型電柱が設置されており、電線が変圧所から春日原住宅地区内へと伸びていたことが分かる。今回調査した電柱には高電圧専用の碍子もついていたことから、鳥居型電柱は変圧所で変換された電流を春日原住宅地区内へ配給していたと考えられる。写真 46 の電柱のうち、手前の電柱 (73) は現存しているが、奥の電柱 (74) は調査後に消滅した。なお、今も残っている手前の電柱 (73) は、空中写真との照合の結果、写真 47 の板付スーパーマーケットの左端に写る電柱と同一のものだと考えられる。

参考文献 大野城市教育委員会 2023 『御供田遺跡 6』
—第 8 次調査—大野城市文化財調査報告書第 203 集



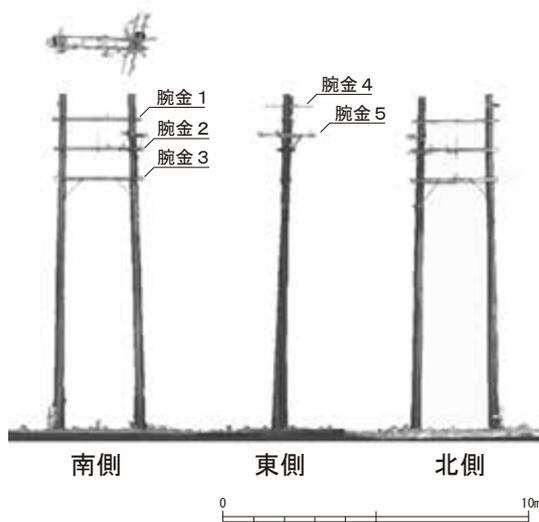
写真 47 板付スーパーマーケット (春日市所蔵)



写真 45 貯油タンク



写真 46 木製鳥居型電柱 (手前 73、奥 74)



第18図 木製鳥居型電柱74の3D図 (1/250)

75 フェンス

所在地 大野城市上大利

種別 2 軍事・防衛関係

年代 昭和20(1945)年中頃～昭和47(1972)
年6月30日

概要

板付基地春日原住宅地区と周辺地域とを区切るための遮断具。高さ230cm、直径6cmを測り、13条の鉄条網が設置されていた。昭和47年6月30日に板付基地春日原住宅地区が返還になりほとんどのフェンスは取り除かれたが、JR大野城駅や大利小学校、大利中学校周辺にフェンスが現存している。



写真48 春日公園造成中の基地跡地を取り囲むフェンス（昭和58（1983）年、筑紫文化財研究所所蔵）

76・77 US 石標

所在地 大野城市東大利（76）、白木原（77）

種別 6 インフラ関係

年代 昭和20(1945)年中頃～昭和47(1972)
年6月30日

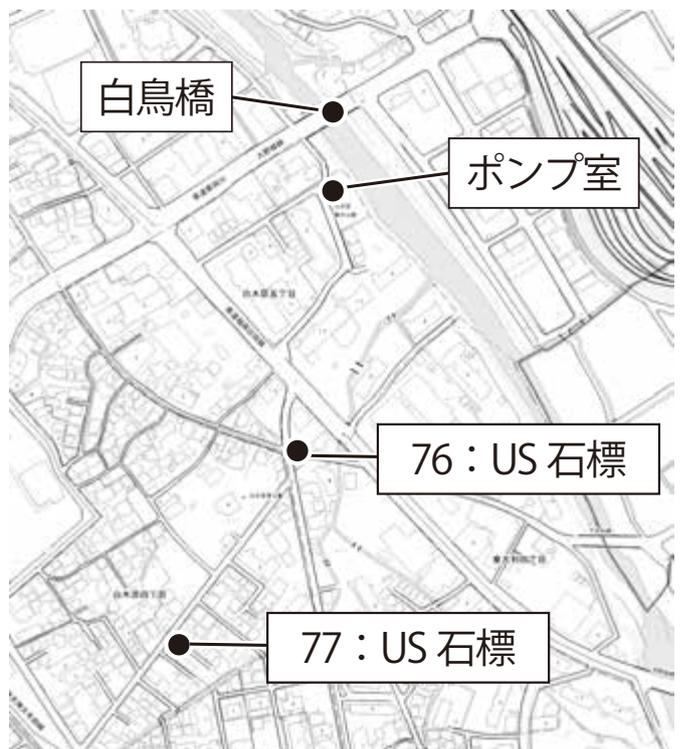
概要

『基地物語』に「ニューベースのイーストゲート（東門）を出て、通称ベース通りと言われる通りを東へ訳一軒程行くと三笠川にかかった白鳥橋に出る。橋の手前の道を五十米程上流に行くと、右側にポンプ室が在った。…中略…此处は、春日原ベースに水を給水していた所である。」と記されている。御笠川からポンプ室で水を汲み上げ、板付基地春日原住宅地区まで鑄鉄管で水を送っていた。送水管の上に設置された石標が市内に一ヶ所だけ残されている（76）。石標は天井部12cm角、高さ19.2cmを測る。天井部に「W 矢印」、側面に「US 3.60 m」と刻まれている。また近年の道路工事で消滅した77の石標には天井部に「W 矢印」、側面に「US 1.00 m」と刻まれていた。数値の意味は不明である。

参考文献 石野田豊 1997『基地物語』



写真49 US石標（76）



第19図 US 石標位置図 (1/10,000)

78 ダンスホール跡

所在地 大野城市下大利4丁目757-43

種別 8 その他 米軍関係者向け娯楽施設

年代 昭和21(1946)年12月～昭和23(1948)年頃

概要

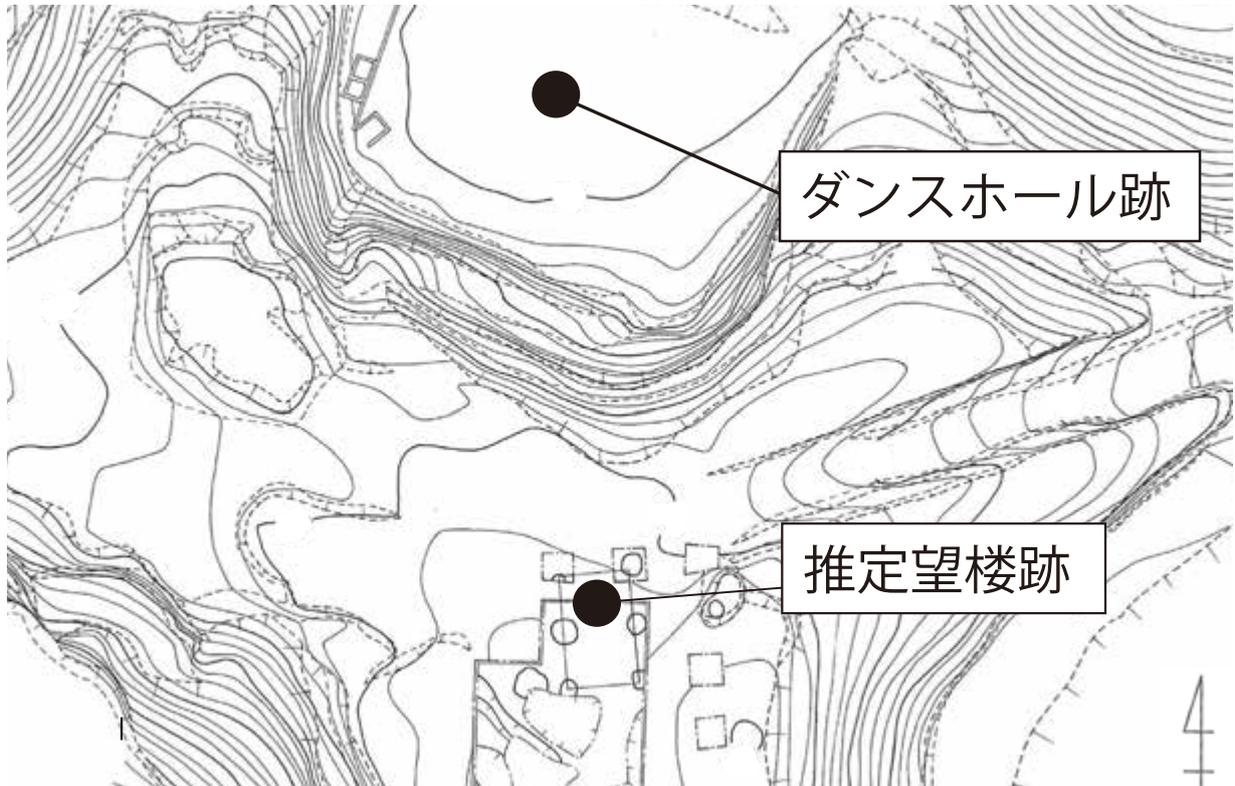
国特別史跡「水城跡」の推定望楼跡北西側、松尾池を望む段上に昭和21年(1946)12月に米軍関係者向け娯楽施設としてダンスホールが建築された。聞き取り調査で「ジープが思水園の坂道を登っていった。」「酔っ払いの軍人が騒ぎながら通っていった。」「アメリカ人がいるから近づいてはいけないと教えられた。」などの証言が得られた。米軍の住居エリアとして大野村と春日村の設置された板付基地春日原住宅地区内にはクラブや劇場、映画館等の娯楽保養施設が昭和23年にはほぼ完成している。同時期にダンスホールは廃業している。



写真50 ダンスホール跡基礎部分



写真51 ダンスホール跡全景



第20図 ダンスホール跡実測図(1/600)

79 通称：白木原ベース通り（通称）

所在地 大野城市白木原1丁目ほか

種別 8 その他

年代 昭和20（1945）年9月～昭和47（1972）年6月30日

概要

板付基地春日原住宅地区への出入口は春日村春日原に面した正門の北門と、大野村白木原に面した東門が設置された。地域住民は板付基地春日原住宅地区のことをベース、あるいは白木原ベースや春日原ベースと呼ぶようになった。昭和25（1950）年、朝鮮戦争が勃発したことで駐留する米兵やその家族、軍関係者（軍属）が急増し、東門から西鉄白木原駅までの約600mの通りには米人向けの店舗が出店し始めた。地元住民はこの通りのことを白木原ベース通り（以下、白木原ベース通りと記す）と呼んだ。

昭和25年頃、白木原ベース通りとその周辺に55軒あった店舗は、昭和37（1967）年には116軒まで増加した。白木原ベース通りの店舗の業種は飲食業（バー、レストラン、食堂）、宿泊業（ホテル、旅館）、クリーニング業、小売業（食料品店、電気屋、自転車店、時計店等）、理容・美容（バーバー、サロン、美容室）、服飾業（テイラー、洋服店等）、その他のサービス業（保険、英語代書、写真館等）がある。業種により白木原ベース通りの出店地域に片寄りがあり、バーが全体の7割近くを占めた飲食業は、西鉄白木原駅付近の白木原ベース通りと北側の裏通り周辺に集中していた。白木原在住70代男性は「あのころ、学校の先生は小学生や中学生は線路から向こうに行くなど言っていた。それは、立ちんぼの女性たちがいっぱいいたから。女性たちは腕に巻いている布の色で、黒人相手か、白人相手か示していた。右腕に白い布なら白人、左腕に赤い布なら黒人という具合であった。店にも黒人専用、白人専用の店があって、黒人が白人専用の店に入ったら、ピストルでずどんと撃たれた。その際には、MPが大きなシェパードを連れて出動していた。」と証言する。『板付基地の経済』（1961年発行）によると、バー等で働く女性は平

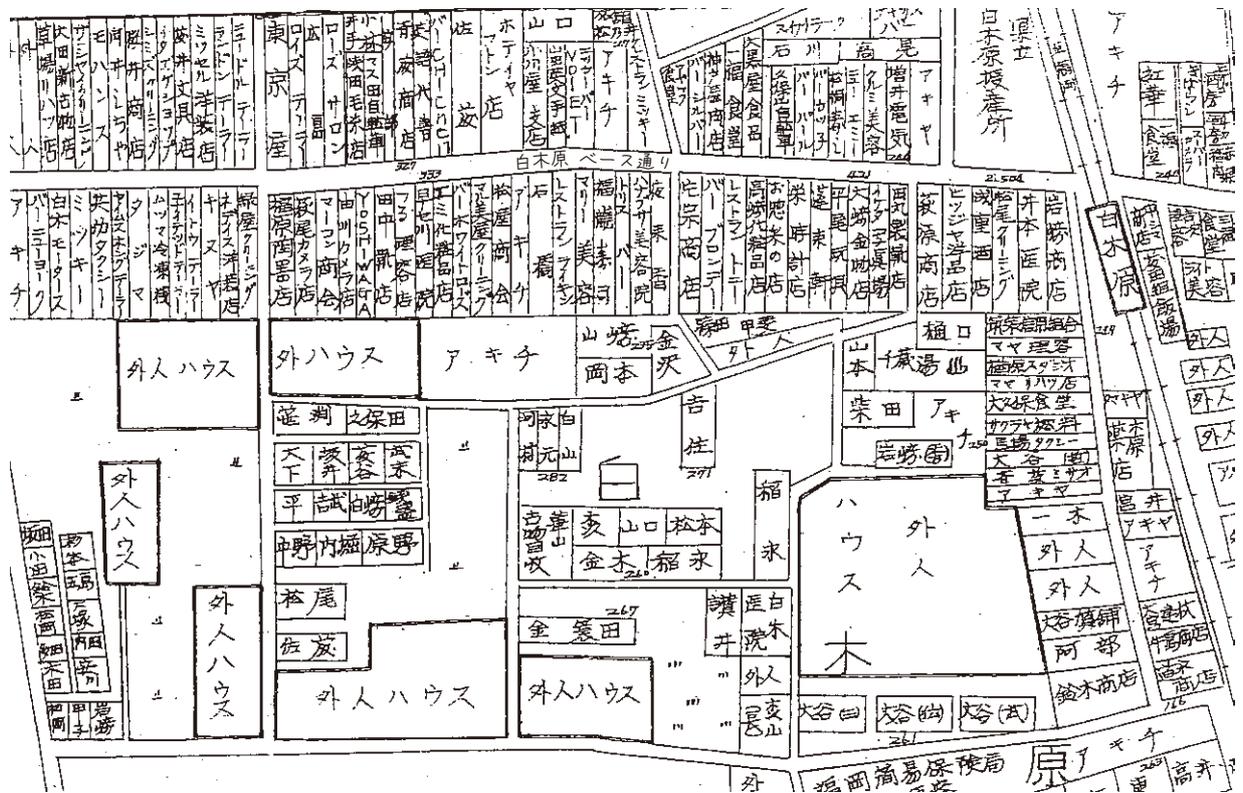


写真52 白木原ベース通り航空写真（昭和31（1956）年、国土地理院）

均年齢 24 才、福岡より佐賀、長崎、熊本出身者が多かったことや、1 女性当り 1 ヶ月 5 万円の売り上げがあると推定すると年間約 1 億 2 千万円の金が米軍人、軍属によって落とされていると記されている。

飲食業の他には板付基地春日原住宅地区の東門近くの通りはテイラーが昭和 37 (1967) 年に 14 軒並んでいた。この他にクリーニング屋 5 軒や外資保険会社支店、英語の代書サービスを行う店もあった。これらの店の看板は英語で表示され、夜になるとネオンが輝いた。夜、近隣の町民等が西鉄や国鉄に乗りし白木原に差し掛かると、周囲が田畑ばかりでほぼ真っ暗な中、白木原ベース通りと板付基地春日原住宅地区だけが光り輝いていた。

昭和 47 (1972) 年 6 月 30 日に板付基地春日原住宅地区は返還された。白木原ベース通りは陸橋の春日大橋建設に伴い両側 5 m ずつ拡張され、店舗は移転や改修していった。当時の面影を残す建物は残っていないが、現在でも「白木原ベース通り」と呼称している地域住民もいる。



第 21 図 白木原ベース通りと周辺の住宅地図より一部 (昭和 37 (1962) 年)



写真 53 白木原ベース通り
(昭和 36 (1961) 年、大野城市所蔵)



写真 54 ウエスリー商会
(昭和 58 (1983) 年、筑紫文化財研究所所蔵)

80 米軍ハウス（通称）

所在地 大野城市内

種 別 4 居住関係

年 代 昭和 25（1950）年～昭和 40（1970）年代

概 要

板付基地春日原住宅地区内には米軍将校家族用住宅デペンデントハウスが約 580 戸あり、技術軍曹以上の階級が官費で家族と住むことができた。板付基地に着任した米軍将校が基地内のオンベースハウスに家族と入居するまでには一定の期間（平均 15～22 ヶ月）が必要だった。この期間は基地外の米軍公認ハウス（オフベースハウス、通称：米軍ハウス、以下米軍ハウスと記す）に入居することになった。この米軍ハウスには基地内のオンベースハウスに入居できない下士官米兵が自費で家族や恋人と住むことができた。米軍ハウスは基地から半径 5 マイル（約 8 km）以内に所在することが前提であり、板付基地への利便性から北門と春日原ベース通り、東門と白木原ベース通り周辺地域に多く建築された。

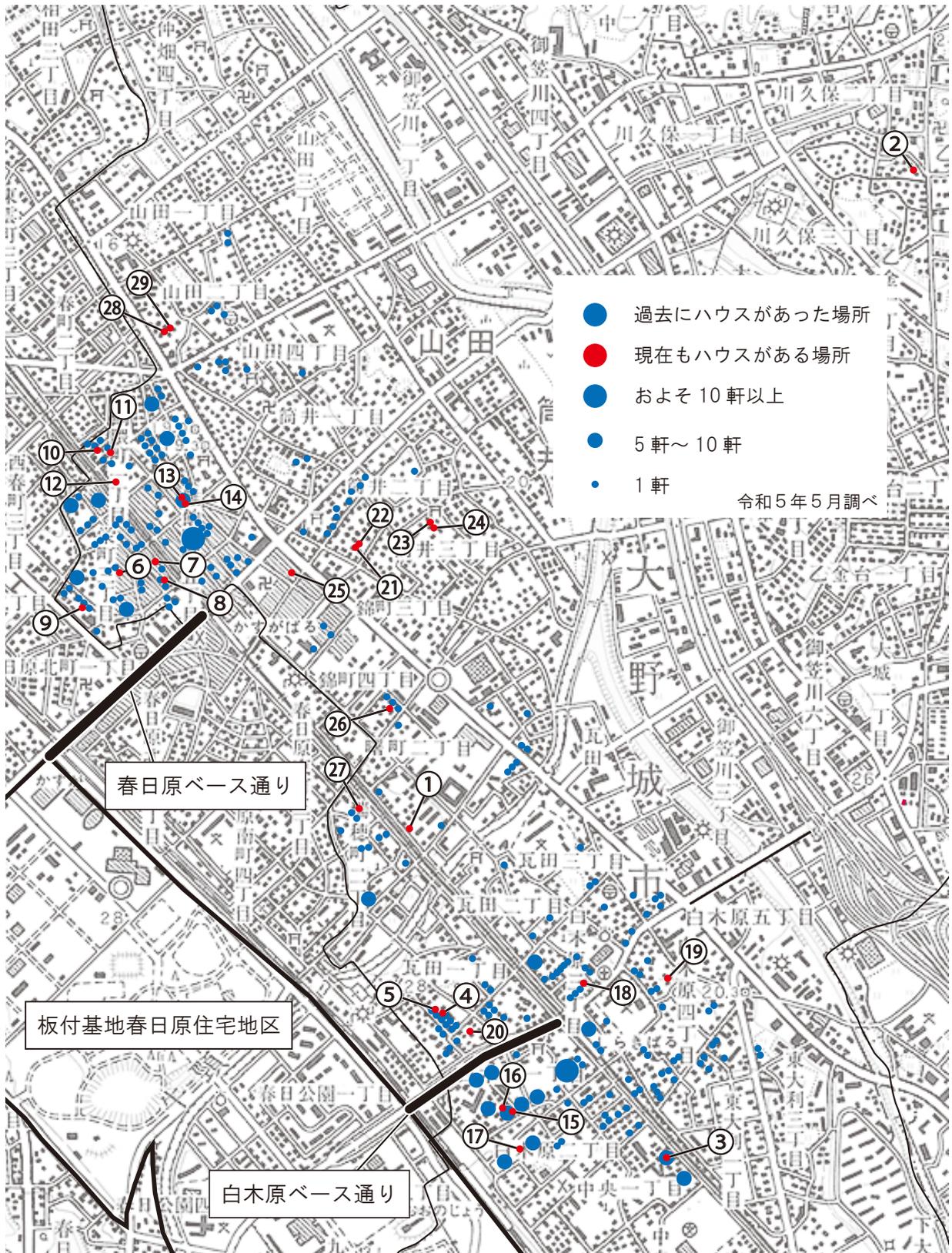
米軍ハウスは土地を持つ日本人がアメリカ仕様のハウスを建て、昭和 35（1960）年には基地周辺に約 1,200 戸あった。これら米軍ハウスの日本人家のほとんどは 6 つのハウス組合（通称）に加入していた。ハウス組合は西鉄白木原駅前に H. DOW 住宅土地周旋所があり（第 22 図）、春日原には筑紫住宅協同組合、大坪住宅周旋所、陣内住宅周旋所があった。これらの組合は住宅供給事務所オフベースハウス課（Base Housing Office Off-base Housing Section、以後オフベース課）との賃貸料の交渉及び契約、貸付斡旋や浄化槽などの衛生上必要な施設や措置の指導、組合員の納税指導も行っていた。米軍ハウスの家賃は大家や組合が決めることができず、オフベース課がスコア表に基づき、新築の米軍ハウスの規格検査を実施し、米軍ハウスの公認や家賃の決定を行っていた。米軍ハウスの家賃はベッドルーム数に応じておおそ相場が決まっており、1 ベッド 30 ドル（10,800 円）、2 ベッド 50 ドル（18,000 円）、3 ベッド 70～100 ドル（25,000～36,000 円）であった（1 ドル 360 円固定レート）。日本人大卒初任給が 1 万円ほどの時代に、米軍ハウスの大家は日本人向け賃貸住宅の 2～3 倍で米軍ハウスを貸すことができた。これら米軍ハウスは昭和 37 年 2 月下旬頃、大野町に 404 戸以上建築されていたが、令和 6 年 3 月時点で 29 戸になっている。現存する米軍ハウスは一般住宅 18 戸、飲食店 2 戸、アトリエ兼事務所 1 戸、空き家 5 戸、不明 3 戸となっている。築年数 60～70 年が経過し、アメリカンな雰囲気を活かしたりリノベーションをして利活用している場合もある。米軍ハウスが解体される場合、所有者や管理者、関係機関（春日ベース・ハウスの会、九州産業大学 建築都市工学部 住宅・インテリア学科等）の協力を得て、測量や写真撮影等で記録調査を実施している。



写真 55 通称：ソテツハウス IAB844 の外観



写真 56 IAB844

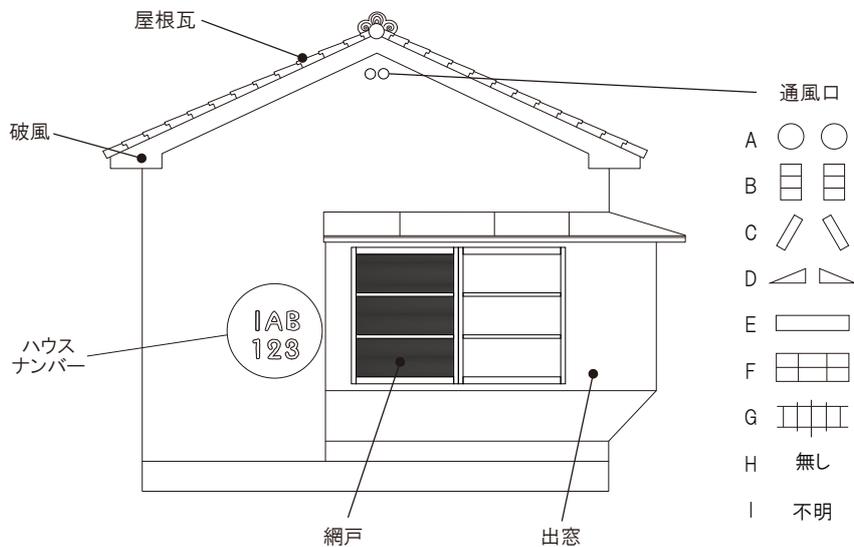


第24図 米軍ハウス分布図 (1/17,500)

※青丸表示は昭和37年住宅地図に記載のある米軍ハウスの場所を表示している。赤丸表示と丸番号は第2表大野城市内米軍ハウス一覧表の通し番号と同一である。現存する米軍ハウスの位置を示している。

第2表 大野城市内の米軍ハウス一覧表

通し 番号	所在	建築年代	ハウスナンバー	構造・規模	床面積(㎡)	屋根	
						形状	瓦の種類
①	大野城市曙町	昭和29年11月29日	無	木造1階建	33.88	切妻	トタン
②	大野城市乙金	昭和38年4月3日	IAB2600	木造1階建	72.09	切妻	スレート(赤茶)
③	大野城市中央	昭和35年1月15日	無	木造1階建	64.96	切妻	スレート(赤茶)
④	大野城市瓦田	昭和32年6月19日	無	木造1階建	33.05	切妻	スレート(緑)
⑤	大野城市瓦田	昭和32年6月19日	無	木造1階建	33.05	切妻	スレート(緑)
⑥	大野城市栄町	昭和31年3月2日	無	木造1階建	35.93	切妻	リフォーム済
⑦	大野城市栄町	昭和26年9月27日	無	木造1階建	59.5	切妻	スレート(青)
⑧	大野城市栄町	昭和27年4月10日	無	木造1階建	47.66	切妻	スレート(青)
⑨	大野城市栄町	不明	無	木造1階建	不明	切妻	スレート(グレー)
⑩	大野城市雑餉隈町	昭和32年5月3日	無	木造1階建	72.72	切妻	スレート(青)
⑪	大野城市雑餉隈町	昭和31年5月29日	無	木造1階建	57.98	切妻	スレート(黒)
⑫	大野城市雑餉隈町	昭和32年3月8日	無	木造1階建	82.87	切妻	スレート(青)
⑬	大野城市雑餉隈町	昭和34年3月1日	無	木造1階建	98.69	切妻	スレート(青)
⑭	大野城市雑餉隈町	不明	無	木造1階建	不明	切妻	スレート(赤茶)
⑮	大野城市白木原	昭和31年8月28日	無	木造1階建	55.73	切妻	金属
⑯	大野城市白木原	昭和31年2月1日	IAB914	木造1階建	82.02	切妻	スレート(青)
⑰	大野城市白木原	昭和38年6月22日	玄関横に跡があるが判別不能	木造1階建	48.02	切妻	スレート(青)
⑱	大野城市白木原	昭和32年8月23日	無	木造1階建	54.54	切妻	スレート(青)
⑲	大野城市白木原	昭和35年9月28日	無	木造1階建	56.19	切妻	スレート(グレー)
⑳	大野城市白木原	昭和34年頃	IAB733	木造1階建	75.2	切妻	スレート(赤茶)
㉑	大野城市筒井	昭和33年12月20日	無	木造2階建	1階93.41 2階28.15	切妻	スレート(緑)
㉒	大野城市筒井	昭和33年12月20日	無	木造2階建	1階93.41 2階28.15	切妻	スレート(緑)
㉓	大野城市筒井	昭和35年月日不明	無	木造1階建	66.34	切妻	スレート(青)
㉔	大野城市筒井	昭和35年9月18日	無	木造1階建	69.42	切妻	スレート(青)
㉕	大野城市錦町	昭和33年6月30日	無	木造1階建	49.58	切妻	陶器(グレー)
㉖	大野城市錦町	昭和29年月日不明	無	木造1階建	84.12	切妻	スレート(赤)
㉗	大野城市瑞穂町	不明	無	木造1階建	不明	切妻	スレート(青)
㉘	大野城市山田	昭和46年9月30日	無	木造1階建	39.74	切妻	スレート(青)
㉙	大野城市山田	昭和46年9月30日	無	木造1階建	39.74	切妻	スレート(青)



第25図 米軍ハウス部分名称図

屋根	通風口	出窓	ベッド数	昭和37年住宅地図の記載	仕様他
破風					
有 (モルタル塗り直し)	A	有 (斜めテーパー有)	1	範囲外	
有 (板金と推定)	H	有 (斜めテーパー有)	3	無	69頁「図2 調査建物概要」の米軍ハウス③に該当。オリジナルの網戸、玄関横にタイル貼りの立方体の台が設けられている。
有 (モルタル塗り直し)	E	有 (斜めテーパー有)		有	
有 (モルタル塗り直し)	A	有 (斜めテーパー有)	1	範囲外	69頁「図2 調査建物概要」の米軍ハウス①に該当。
有 (モルタル塗り直し)	A	有 (斜めテーパー有)	1	範囲外	
有 (モルタル塗り直し)	I	有 (斜めテーパー有)	1	無	
有 (モルタル塗り直し)	B	無		有	オリジナルのガレージがある。
有 (モルタル塗り直し)	I	有 (斜めテーパー無)		有	
有 (モルタル塗り直し)	I	有 (斜めテーパー無)		有	
有 (モルタル塗り直し)	H	有 (斜めテーパー有)	3	有	
有 (モルタル塗り直し)	H	有 (斜めテーパー有)		有	
有 (モルタル塗り直し)	H	有 (斜めテーパー有)		有	リフォーム済。南国風の植物が植えられている。
有 (モルタル塗り直し)	E	有 (斜めテーパー有)	3	有	
有 (モルタル塗り直し)	C	有 (斜めテーパー無)		無	
有 (モルタル塗り直し)	C	有 (未確認)		有	
有 (モルタル塗り直し)	C	無		有	外壁の工事済。オリジナルの網戸が付いている。
有 (モルタル塗り直し)	A	有 (斜めテーパー有)		無	
有 (モルタル塗り直し)	A	有 (斜めテーパー有)		有	
有 (モルタル塗り直し)	C	有 (斜めテーパー有)		有	
有 (モルタル塗り直し)	D	有 (斜めテーパー有)	3	有	69頁「図2 調査建物概要」の米軍ハウス④に該当。
有 (モルタル塗り直し)	G	無		有	玄関横にタイル貼りの立方体の台が設けられている。
有 (モルタル塗り直し)	G	無		有	玄関横にタイル貼りの立方体の台が設けられている。
有 (茶色に塗り直し)	A	無		有	
有 (茶色に塗り直し)	A	無		有	リフォーム済。
有 (モルタル塗り直し)	F	有 (斜めテーパー有)		無	
無	A	無		有	
有 (モルタル塗り直し)	C	有 (斜めテーパー有)		有	
有 (モルタル塗り直し)	I	有 (斜めテーパー有)		無	
有 (モルタル塗り直し)	I	有 (斜めテーパー有)		無	

第3表 大野城市内の米軍ハウス数の変遷

地区名	仲畑	山田	御笠川	乙金	筒井	雑餉隈町	錦町	栄町	瑞穂町	瓦田	白木原	中央	東大利	下大利	上大利	曙町	合計
昭和37年住宅地図記載の数	4	24	0	0	48	90	11	45	10	42	115	2	8	4	0	1	404
令和5年度残存戸数	0	2	0	1	4	5	2	4	1	2	6	1	0	0	0	1	29

※『観光と産業 西日本住宅詳細図 筑紫郡』昭和37(1962)年に「外人」、「外人ハウス」、「米人」、「米人宅」と記載されている戸及び地区を元に数を産出している。地区を含むため、昭和37年時の米軍ハウスの実数は合計の404より多いと考えられるが、行政地区毎の米軍ハウス数の目安にはなる。

81 米軍機の墜落・不時着・部品落下地点

所在地 大野城市田屋・中ほか

種別 8 その他

年代 昭和24(1949)年6月～昭和36(1961)年10月

概要

昭和20(1945)年9月、旧日本軍の席田飛行場を接収して造成された板付飛行場は、昭和27(1952)年のワシントン講和条約締結後も板付基地春日原住宅地区と同様に米軍の無制限使用の基地として使用された。昭和25(1950)年6月に朝鮮戦争が勃発し、板付飛行場は朝鮮半島への爆撃と輸送の第一線基地になった。当時、板付基地春日原住宅地区と板付飛行場とで消防士をしていた麻生政祐(故人)さんを取材した平成28(2016)年10月13日読売新聞朝刊記事によると、「朝鮮戦争のさなか、米空軍機は迎撃や対空砲火で傷付き、板付に帰投してきた。パイロットと基地の無線交信で事態を把握しながら待機した。操縦席の風防を吹き飛ばされたり、大きな穴を開けられたりした機体が着陸すると同時に消防車を寄せ、爆発や火災に備えた。滑走路に向かう誘導路での炎上事故、車輪が出ない機体の胴体着陸にも遭遇。24時間勤務で、出動が18～20回を数えた日もある。「動乱(朝鮮戦争)の頃は消防車の中で無線を聞きながら眠っていた」と記されている。米軍機の発着回数の増加と、板付飛行場と周囲の住宅地との近さが米軍機の墜落事故等による被害を引き起こした。昭和47(1972)年の板付基地返還までの間、米軍機の発着経路下にあたる福岡市東区二又瀬や大野町田屋地区等での墜落や不時着、部品落下等の事故は114件に及んだ。大野町域での米軍機関連の事故は8件発生し、死亡者9名(関連死含む)、苗代や収穫への影響などの物的被害がおきた。

(大野城市内の墜落や部品落下等被害状況)

昭和24(1949)年6月	田屋南西1,500m	飛行機墜落、乗員死亡2名	
昭和24(1949)年8月	田屋東南方田圃	機銃弾誤射	被害者1名
昭和25(1950)年5月	宇美県道	飛行機墜落、乗員死亡2名	
昭和26(1951)年5月	田屋地区苗代田	補助タンク落下、苗代六反歩全滅	被害者1名
昭和28(1953)年3月	田屋東南方1km	補助タンク落下、小麦五反全滅	被害者4名
昭和29(1954)年10月	御笠川の中	補助タンク落下	
昭和31(1956)年5月	田屋東方300m	飛行機墜落、死者なし、麦の被害大	
昭和36(1961)年4月	中地区水田	補助タンク落下に伴う交通事故	被害者3名

上記の被害状況については参考文献を元に記載したが、場所や日時が曖昧になっており、すべての地点を第2図に反映することができなかった。また米軍機の離発着に伴う爆音被害は学校教育、健康被害(早産、高血圧や脳・耳鼻関係疾病発症)や家畜の減産、建物損傷など深刻な状況であった。大野町の小・中学校では昭和32(1957)年度から国の補助を受け、防音工事が始まったが、木造校舎では効果に限界があり、昭和35(1960)年に大野北小学校、大野小学校、大野中学校の木造校舎から鉄筋への建て替え工事の陳情を調達庁に行った。大野町は「板付基地の飛行機騒音によるテレビ、ラジオ聴取料減免について」の陳情を昭和39(1964)年2月に福岡防衛施設局に提出し、日本放送協会は同年5月から畑詰、仲島、山田の134世帯を半額免除、6世帯が全額免除とすることを通知した。後に牛頸、上大利を除く大野町全域も半額免除になったが、昭和47年の基地返還まで爆音被害や墜落事故への不安がなくなることはなかった。

IV. 手記や日記、証言記録について

戦地や戦場、戦時下あるいは戦後の暮らしに関する個人の記憶は、時間の経過とともに確実に失われている。当時の実情を後世に伝える兵士の手記や個人の日記、そして証言記録は今後さらに重要になってくると考えられる。ここでは個人所蔵の資料や、聞き取り調査で得られた証言を記しておく。

1. ビルマ戦争の手記

作者の井手貞一（明治31（1898）年～平成7（1995）年没）は昭和52（1977）年8月15日に『戦時物語』（10頁）、昭和54（1979）年8月15日に『僕の一生』（118頁）、『戦時物語』（12頁）等を戦地から持って帰った絵や日記を元に書き起こした。所蔵者によると「父・貞一がビルマ戦争終結後、ビルマの首都マンダレーでイギリス軍捕虜になった時、支給された缶詰のラベルを剥がして絵や日記を書いていた。引き揚げの際にそれらを持って帰国し、書き起こしたものが『戦時物語』等の手記である。現地です



写真57 『戦時物語』より一場面

（井手勲さん所蔵）

いた絵や日記は遺品整理の際に捨ててしまった。」とのことである。作者は大正9（1920）年佐賀歩兵第55連隊衛生部の看護兵になり、大正12（1923）年東京第一衛戍病院に転属になり関東大震災を経験する。昭和16（1941）年12月8日に日黒の伝染病研修所特殊講座修了式後の懇親会中に太平洋戦争開戦のニュースを聞いた。昭和19（1944）年6月6日に46歳で召集され、第49師団防疫給水部（通称号「狼」一八七七一六）としてビルマ戦争に出征した。武器や弾薬、薬、衛生材料もない中、衛生兵として従軍したこと等が絵と文章で記された貴重な記録である。

2. 山上高太郎日記

作者の山上高太郎（明治22（1889）年～昭和54（1946）年没）は昭和5（1930）年10月2日から大野村長を勤め、GHQによる公職追放令で昭和21年9月30日に辞職した。大野村長の任期中に日中戦争～太平洋戦争までの召集令状接受状況や戦死者及び村葬（病气入院中や出張中を除く）について、日記に記載していた。太平洋戦争終戦直後、日本軍の命令で召集や戦死者に関わる役場の正式記録はすべて焼却処分され残存していない中で非常に貴重な記録となっている。また昭和20（1945）年8月15日の日記には「十時半過ラヂオは回を重ねて十二時重大報導を告げた服を代へ威儀を正して十二時を待つ時は来た玉音を拝聴した断腸 " " " " " " " "一人村長室で泣いた無念遺瀨なかった大御心に感泣極まりがなかった（後略）」と記されている。後に、昭和30（1955）年4月30日～昭和38（1963）年4月29日まで大野町長を務め、任期中に大野町の板付基地周辺での犯罪や事故、被害への対処や、板付基地司令官との交流について記されている。戦中から戦後、公職にあった人物が記した日本軍や米軍とのやりとり等を記した貴重な記録である。



写真58 山上高太郎日記

（山上高昭さん所蔵）

3. 板付基地関係の証言記録

松島 一寅さん（大野城市白木原在住：昭和13（1938）年生まれ） 令和3（2021）年11月25日聞き取り調査

私と家族が経営していたスーパーマーケット大黒屋は、終戦後の昭和21(1946)年頃、昔の原病院があった日田街道沿いの通りで父母が魚屋「大黒」を開いたのが始まり。白木原ベース通りに移転した後、魚屋から総合食料品店となり、再度移転してスーパーマーケットになった。昭和24～25(1949～50)年頃、私が小学校5～6年生頃に大黒屋の棟上げ式があって、2階に上がってから餅を撒いた記憶がある。家は2階建ての建物で、店舗兼住宅だった。昭和26・7年頃には増築して店を拡大した。

当時は何もない時代だったから、大黒屋は地域の大きな店という存在で、開店した昭和20年～30年代は、野菜や魚、食料品や、ちょっとした日用雑貨、化粧品など手近な物を売っていた。氷も近所のバーとかに配達していた。日本人相手の店が白木原ベース通りでは少ない中、大黒屋のお客さんは、ほとんど日本人で外国人相手の商売じゃなかった。

ところが朝鮮戦争の頃かよくわからないけど、アメリカの兵隊さんがうちの店からお菓子を買って、子供に配ることがあった。私も兵隊さんからアメリカのチョコレートバーなどをもらったことがある。その時のおいしかった事が今でも記憶にあって忘れられないよ。

うちの店の隣にはレンガのパン焼き窯があって、コッペパンやあんパンなどをつくって売る坂本パン屋があった。再度移転した先の大黒屋の隣にあったほていやさんは呉服屋さんだった。白木原に来る前は、雁ノ巣の方で商売していたと聞いたことがある。ベース通りには、クリーニング屋や大きなクリーニング工場もあった。今では当たり前になっているけど、当時の日本は固形石けんと洗たく板でみんな自分でやっていた。アメリカ人にとってクリーニング屋の存在は当たり前だったから、新しい商売としてできたんだと思う。日本人が経営していた通称マイクさんのレストランも、当時としては珍しい水洗式のトイレ設備だったので驚いた。

ベース通りにあったお寿司屋さんでは、日本人のお姉さんたちがよく食事をしていました。ベース通りには外国人相手のバーがあって、そこで働く女性がかかりいた。そういえば、バーで働くお姉さんたちからよく引越を頼まれた。店のトラックで当時の日本人には珍しいベッドなどをよく運んだ。チップをもらった時は嬉しかった。松桐寿しの隣にあったバーは、黒人相手のバーだった。バーの周辺で黒人と白人が喧嘩していると、気づいた黒人がサアッと周りから寄ってくる。白人はあまり寄ってこなかった。当時の白人は、黒人相手に接客する女性を嫌がっていたように思う。嫌がるというか、なにかやっぱりそこに垣根があるんだなと思う。バーとかで喧嘩があったり、なにか事件があれば、基地からジープに乗ってMP（憲兵）が来て、基地の中に連れて行った。日本人は基地の中に自由に入れなかったけど、独立記念日の盛大な花火大会、7月4日だったと思う、その日はお祝いをするから日本人も花火見物で中に入ることができた。今の白木原ベース通りには当時から残っている店はほとんどない。道を広げるために立ち退きがあって、土地を両方5mずつ取られたからね。白木原の町は時代と共に大きく変遷していくことになった。白木原ベース通りは日本の町とは違う、異質の町だった。



写真 59 大黒屋スーパーマーケット

(昭和47(1972)年頃、大野城市所蔵)

自分は佐賀県武雄市の出身で、長崎県佐世保市の自転車店で 5 年間修業した後、昭和 25 年（1950）頃から白木原ベース通りの麻生自転車店で働いていた。昭和 38 年（1963）に、白木原ベース通りのマス田自転車店の後を引き継いで、「フジタケ輪業」を創業した。

店では自転車やホンダのカブ号などを売っていた。カブ号は板付基地の進駐米兵達にも人気で、よく売れた。米兵将校は軍用機にそのままカブ号を乗せていたが、一般の米兵はカブ号を二つに切って、1 m 真四角の箱に入れて小包にしてアメリカに送っていた。

板付基地の中にはモトクロスバイクレース場があって、レースに出場するアメリカ兵がホンダの C D 50 というバイクを買ってエンジンオイルの中でクランクのすべりがよくなるようにうちの店で金をかけて改造をした。アメリカ兵はその改造バイクでレースに出て、見事優勝した。その後、アメリカ兵は優勝のお礼にと行って、板付基地の中のレストランでステーキをご馳走してくれた。レストランは映画館の近くにあったと思う。レストランの中は酒を飲むところと、料理を食べるところに分かれていた。アメリカ兵には子供が 2 人いて、山田にあった米軍ハウスに住んでいて、ハウスの家賃は 1 万 2 千円だった。当時、西戸崎にはアメリカ軍専用ビーチがあって、そこに大きなアメ車に乗せてもらって、遊びに行った。ビーチで焼いて食べた大きなアメリカンソーセージは味が濃くておいしかった。アメ車はシボレーやフォード、高級車はキャデラックだった。白木原ベース通りは他の道に比べると広くて、陸王っていう日本のハーレーに乗っている人とかもいた。そのアメリカ兵は本国に帰る時に、スプーンセットをプレゼントしてくれた。

また、ハービーというアメリカ人は軍人ではなくて軍属だったようで、よく店に遊びに来ていて、仲良くなった。道の向かい側に、呉さんが経営しているアーコンテイナーがあった。アーコンテイナーで赤色のマフラーをバイク仲間と揃いで買って、佐賀県武雄市にハービーも一緒になってツーリングに行った。ハービーがアメリカに帰る時には浴衣をプレゼントしたり、家でお別れ会をした。ベビーシッターやメイド、自動車の手入れや掃除、靴磨き等、仕事がたくさんあり、たくさんの日本人が働いていた。白木原ベース通りはアメリカの街で、異質だった。

ちょうど時代の流れで板付基地があって、自転車からバイク、バイクから車へと移り変わっていく頃だった。白木原の店の他に、住宅開発が始まった南ヶ丘にも店を出した。自転車を 10 年連続で年間 500 台以上販売し、メーカーから表彰を受けたくらいバイクが売れていて、バイク販売数で「地域一番店」になった。自分は商売では金メダルだったと思っている。



写真 60 アーコンテイナーの揃いのマフラー
（藤武 肇さん所蔵）



写真 61 フジタケ輪業
（藤武 肇さん所蔵）

昭和36（1961）年、白木原で中国の故郷で親しい人に呼び掛ける言葉の「阿康（アーコン）」からアーコン商会を立ち上げた。店の看板は「Ah Kong Co.,Ltd」。アメリカ軍将校たちはハワイやフィリピンの基地から爆撃機で板付飛行場に飛んできて、まず私の店に服を作りにくる。生地を選んで採寸してから、ベースに報告に帰り、独身将校宿舎でシャワーを浴び、食事をして1時間半くらいゆったりしてから、また私の店に来て仮縫いをする。翌朝十一時頃、再び出発するときまでには、きっちり縫いあがった服を渡せるような仕事をさせていた。店の裏にあった米軍ハウスを1棟借りて、5人の職人を雇って分担作業で、一晚で5～6着作ることもあった。米軍ハウスの大家は地元住民には月5千円で貸していたが、米軍には月1万8千円で貸していた。スーツの値段は1着上下で50ドル、1万8千円で売っていた。将校たちの好みの色はパステルカラーで、アメリカからブルックスブラザーズの雑誌を持ってきて、このデザインで作ってくれと注文していた。特に黒人将校はおしゃれで、それを見て白人将校が真似していた。白木原ベース通りにはインド人のテイラーが3軒、日本人のテイラーが3軒、自分のように中国人のテイラーが2～3軒あった。白木原ベース通りにはテイラーの他に、写真屋、クリーニング屋、洋食屋、家電屋があった。家電屋ではステレオが入荷すると山積みになっていたが、木調のステレオは日本で安く買って、アメリカに持っていくと高く売れるからとアメリカ兵たちに人気があり、あっという間に売れてなくなっていた。

店の客がアメリカ軍司令官や将校だったので、白木原ベース内の将校クラブに顔パスで出入りしていた。司令官にゴルフに誘われたら、朝早くフォード社製のコンバーチブル車が店の前にやってきて、雁ノ巣のブレディ基地まで行った。将校クラブでコーヒーを飲んでからワンラウンドプレイ。ゴルフの後は将校クラブでサンドイッチなんかを食べて昼前に店に帰ってきていた。当時の白木原の通りは舗装されてなくて砂利道だったから、将校たちは砂埃をたてないよう気を使って、ゆっくりと運転していた。クリスマスに将校たちにプレゼントをあげたら、ジョニーウォーカーの赤と黒も持ってきてくれた。それはベースの外に持ち出せない高級酒だ。一見したら持ち出したことが分からないが、酒を飲み終わったら、瓶底にアメリカ軍マークのシールが貼ってあった。家で飲むにはいいが、バレると大変なので友達にあげるときには「くれぐれも外に持ち出さないように」と言って渡していた。白木原ベース通りには私服警察のタバコGメンがいて「ちょっとお兄さん。タバコ見せて。」と声をかけ、アメリカ製のタバコを持っていると没収していた。



写真 62 アーコンテイラーの店内
（右が呉さん、(有)太平閣所蔵）

うちの店での支払いは円だったが、日本各地のベースだけで使用できる MPC（軍票）があった。偽 MPC が出回らないように、時々デザインが変わった。デザインが変わる時期は未確定で機密情報なのに、なぜか事前に変更時期が分かっていた。それはオンリーと呼ばれるアメリカ兵とつきあっている日本人女性が情報を教えてくれていた。勤務が終わって時間が空いた将校たちが友達を連れて店に来て、雑誌を読んだり話をしたりして過ごしていた。店には常に誰かがいるといった感じで、いい時代だったと思う。

アーコン商会は夫の呉がしていて、私は店には関わっていなかったからよく分からないけど、店のまわりには沢山のテイラーがあった。白木原ベース通りの裏はアメリカ兵とその家族たちが住んでいるハウスが沢山あって、家の近所には10軒並びのハウスがあった。そこには子どもがいないアメリカ人夫婦や、5～7才くらいの男の子が2人いるアメリカ人家族もいた。その子どもがいるアメリカ人夫婦が基地の中とかにでかける時に、子どもたちと遊んだり、ごはんを食べたりして面倒を見たりするハウスメイドみたいなことをしていた。そのとき、給料をもらったとかはよく覚えていないけど、おやつやごはんを食べさせてもらったりして仲良くしていた。呉と違って、私は英語が全然しゃべれなかったけど、アメリカの子どもたちの面倒を見ていて、困ったことは一度もなかった。お互いに単語の英語と日本語で話しをしていた。

ある時にはハウスで日本のおいしい赤ワインを飲ませてもらって、家は近所だけど、帰れないくらい酔っぱらってしまった。それでそのままハウスの大きなダブルベットで寝泊まりしたことがあった。次の日に呉が心配して、「千鶴子、千鶴子」って呼んで様子を見に来たことを覚えている。ハウスは平屋で3つくらい部屋があって、子ども部屋には二段ベッドや椅子みたいなベッドが置いてあった。

アメリカ人家族もアメリカ人夫婦もほんとにいい人達だった。とてもやさしかったし、大事にしてくれた。人どうしのつながりができるからね。ハウスに住んでいたアメリカ兵とその家族がステイツ（STATES、アメリカ本国のこと）に帰る時には、基地の外のハウスから一時的に基地の



写真 63 アーコンテイラー外観

（左から2番目が増田さん、右太平閣所蔵）

中のハウスに引っ越しをしていた。ベースの中に日本人は勝手に入れない。だけど、ハウスメイドしていたアメリカ人家族の基地の中のハウスに何度か遊びに行った。その後、板付飛行場からステイツに帰る時には飛行場までお見送りに行った。アメリカ人家族がステイツに帰ることになった時、半分冗談だと思うけど、「千鶴子と一緒にアメリカに帰りたい。千鶴子もアメリカに行かないか。」と言われた。「私は夫がいるし、無理だから」と言って断った。子どもたちも私によくなついていたからね。

基地が返還になってから、一時期、テイラーと中華料理店をしていた。近所に中華料理屋とかなかったから、近所の人もよく来てくれて、出前もしていた。親戚の子どもが神戸の太平閣で豚まんの修行をしてきて、中華料理店でも豚まんを出すようになった。その頃、私は春日駅の近くと天神から先の場所に豚まんの出張販売に行って本当によく働いたよね。その後で豚まんのテイクアウト専門店の「太平閣」になった。

私が中学 2 年生だった昭和 38（1963）年、家の敷地に 2 棟の米軍ハウスが建った。乙金で初めて建った米軍ハウスで、近所の関山工務店に建ててもらった。家賃はその当時で 7 万円くらいだったと聞いている。ハウスを建てるために父が銀行からお金を借りたが、家賃が高かったからお金を返すのも早かった。うちの米軍ハウスが建ってから、近所でも米軍ハウスがたくさん建った。

うちの米軍ハウスに入居したアメリカ人夫婦は週末になると、子供達を置いて必ず遊びに行く。それでベビーシッターをお願いされて、1 時間 100 円で 8 時間して 800 円をもらっていた。そのアメリカ人夫婦の友達から「私のところにもベビーシッターに来て。」と言われて、母がうちの米軍ハウスを担当して、私が近所の米軍ハウスに行っておベビーシッターをしていた。中学生で英語を習い始めたばかりで、おまけにネイティブの英語が難しい。アメリカ人の奥さんにベビーシッターの時間を「セブントゥーリー」と言われたけど、「セブントゥーリー」が分からない。困っていると、「セブントゥーリー」と言って腕時計の針を指さした。それは「7：30（seven thirty）」のことだった。当時は二層式の小さなタイル張りのキッチンで赤ちゃんを風呂に入れていた。離乳食は瓶詰だし、料理も缶詰とかだからキッチンはきれいだった。アメリカ人家族はレシートがものすごく長くてびっくりするくらい、食料品をいつも紙袋いっぱい買ってきていた。室内には長いソファがあって、冬はボイラーを焚いているから、アメリカ人家族は室内では半袖で過ごし、奥さんは外出するときには毛皮のコートをさっと着て出かけていた。アメリカ人のカメラマンさん家族が入居していた時は写真を撮ってくれたり、父と母を「パパさん、ママさん」と呼んでくれたり、楽しい思いをいっぱいした。そのうち、カメラマンさん家族は横須賀に引き揚げでアメリカに帰還することになってね。その時に「満壽美をトランクケースに入れてつれて帰りたい。」って言われた。父は「いやいや、まだ学校に行かんといかんから、いかん。」って言って断った。今思えば、ついて行ってたら人生変わったかもなと思うこともある。私が通っていた大野中学校は白木原ベース通り沿いにあるので、周りにもたくさん米軍ハウスがあった。同級生の友達が住んでいる白木原の米軍ハウスに遊びに行くと、ハンサムなアメリカ人のお父さんに麻雀を教えてもらったこともあった。

伯母は志賀島で看護婦の仕事をしていた時に、アメリカ人のポールと知り合ってね。伯母がポールと結婚したいと言った時、家族や親戚が反対したけど、私の父だけが「人生、どこでどうなるか分かんやけん。」と言って、OKサインを出した。伯母が米軍ハウスで使っていた可愛いティーカップを今でも大切にしているし、父が建てた米軍ハウスは私にも思い入れがある。だから、外観の雰囲気は今も大事にしている。



写真 64 アンカーホッキング社のティーセット（池田満壽美さん所蔵）



写真 65 大野城市乙金の米軍ハウス IAB2600

おふくろが昭和 23（1948）年頃から西鉄白木原駅近くでライト美容室を始めた。ライト美容室の近くには 8 軒の米軍ハウスがあった。ある日、そのハウスに住んでいるアメリカ人の奥さんが美容室にやってきた。おふくろが「ヘアースタイル？」と尋ねると、アメリカ人の奥さんは「Please Marilyn Monroe」。新婚旅行でジョー・ディマジオとマリリン・モンローが福岡に来たりして、当時、マリリン・モンローのヘアースタイルが大流行していた。アメリカ人の髪質はやわらかくて少しのパーマ液でふわっとパーマがかかる。おふくろがアメリカ人の奥さんの髪型をマリリン・モンローのヘアースタイルにすると、ものすごく喜んでくれて、バーンとお金を払ってくれた。希望通りにマリリン・モンローのヘアースタイルになったアメリカ人の奥さんは、近所や友達のアメりカ人の奥さん達に宣伝してくれて、ライト美容室はものすごく儲かった。チップも千円をバーンとくれていた。アメリカ人の奥さんたちが次々とライト美容室に来て、みんなマリリン・モンローのヘアースタイルになって笑顔で出ていった。すると白木原ベース通りの街中がマリリン・モンローだらけになっていた。私はそのころ、大野小学校から大野中学校に行っていたころで、ライト美容室で使う灯油の買い出しのお手伝いをしていた。白木原ベース通りにはライト美容室の他にも美容院があったが、カタコトでも英語でやりとりできる店のほうが儲かっていたと思う。おふくろは 96 歳で亡くなったが、「アメリカさんのときはよかった。アメリカ人の奥さんたちはできあがった髪型を見て、とても喜んで感謝してくれた。ものすごくやりがいがあった。」と言っていた。

戦後すぐ、日本人はごはんも食べられないほど貧しいときに基地ができて、白木原ベース通りができたことで黄金時代を迎えていた。ライト美容室が儲かっていたころ、白木原ベース通りにはアメリカ兵がたくさんいて、アメリカ兵相手のバーもたくさんあった。バーではウイスキー 1 杯もビールもつまみも千円。先にお金を受け取ってから、酒やつまみを渡す。酒もつまみも飛ぶように売れて、千円だからおつりをやり取りする必要もない。カウンターの下に置いたリンゴ箱にアメリカ兵からもらった千円札を入れ、こぼれないように足で踏んづけていたと知り合いから聞いた。大野中学校 1 年か、2 年のころ、基地の中で日米親善野球大会があった。大野中学校野球部の応援で生徒の家族や近所の人達も基地の中の野球場に行った。試合が終わった後、大野中学校の野球部員以外の人達はさっさと基地から帰らされた。あとで、大野中学校野球部員の友達に聞いたら、「大きなビーフステーキがひとり一枚ずつ用意されていて、びっくりした。食べようと思ってもナイフとフォークの使いかたがわからなくて、どうしようと思っていたら、ビーフステーキが好きじゃないと思われて、料理を下げられてしまった。今思い出しても残念だ。」と言っていた。きっとアメリカ軍のほうは大野中学校野球部員分のビーフステーキやらを用意していたけど、応援に来た人数が多くてびっくりして試合後、さっさと基地から出したんだな、と思った。

マクドナルドがまだ日本に進出してなかった頃に白木原ベース通りではハンバーガーを売ってる店があって、本当に美味しかった思い出がある。



第 26 図 ライト美容室と 8 軒の米軍ハウス地図
（昭和 37（1962）年住宅地図より一部掲載）

昭和 33（1958）年、高校 1 年生の頃、基地で働いていた同級生に誘われて、基地内のカミサリーで働くようになった。カミサリーの裏手にはプラットホームがあって、アメリカから空輸された野菜や冷凍食品、缶詰なんか引き込み線で運び込まれていた。プラットホームは J R 大野城駅西口を出て、左手側の駐輪場あたりにあったかな。プラットホームとカミサリーは屋根で繋がっていて、到着した荷物を大きな冷凍庫に入れたり、倉庫に運んだりした。カミサリーの棚に食料品を陳列したり、整理したり。クリスマス前には冷凍された大きな七面鳥が沢山入荷してきて、一羽まるごと飛ぶように売っていた。カミサリーで驚いたのが、缶詰で沢山売られていたベビーフード。日本のように離乳食を手作りしない、アメリカは合理的な生活をしているなあと思った。日本の食生活では 2～3 日置きに買い物をするけど、基地では 1 度に 1 週間分の食材を大量に買うのが当たり前。カミサリーでの仕事は今のスーパーマーケットのような仕事だったけど、客が購入した商品を車やハウスまで配達するデリバリーボーイもしていた。カミサリーのレジは今のコストコやイケアみたいにベルトコンベア式になっていて、デリバリーボーイは客が購入した商品を大きな紙袋に手際よく袋詰めしていく。紙袋の底に缶詰や瓶詰などの重いものを入れて、上のほうにはクラッカーなど軽いものを詰める。毎回、大きな紙袋を 2 つ抱えて、客の車まで持っていくまでが仕事。このデリバリーボーイをするとチップがもらえる。50 セント札、良い時は 1 ドル札を貰っていた。1 ドルが 360 円の時代で、10 回もポーターをすれば、2,000～3,000 円になるけど、ドルでもらうので、換金できない。それにもらったチップは、カミサリーの裏手にチップボックスという箱が置いてあって、そこに入れるようになっていた。そこから自分達の給料が出ていたようなもんだけど、カミサリーで働いて少し経つと要領が良くなって、チップを少しずつ貯めた。カミサリーで購入した商品は基地の外の米軍ハウスへ配達もしていた。配達の際は客から配達方面、白木原だったら S、春日原だったら K と、ハウスナンバーを聞いて、紙袋に書いておく。幌付きのトラックに買い物袋を配達場所の遠いところから奥に詰めていって、最後に自分が紙袋が倒れないように荷台に乗り込んで出発していた。白木原や春日原、遠い所では前原（現在の糸島市）のほうまで配達に行っていた。

カミサリーは日曜日が定休日。基地の中で、日曜日にちょっとした日用品が買える、キオスクみたいな売店があった。日曜日は売店で働いたり、月に 1～2 度、久留米の聖母園に届けに行き、子どもたちとランチを食べたりといった慈善活動もしていた。日本に赴任してくるアメリカ兵やその家族は着る物以外何も持たず、手ぶらでやって来ても日本でアメリカそのものの生活を始めることができるようになっていた。カミサリーでは月給 6～7 千円くらいもらえた。当時の大学卒の給料が 1 万円だから、高校生のアルバイトでは結構な収入だった。



写真 66 聖母園でのランチ風景（井上善久さん所蔵）

バイク店主になる前、父は米軍基地所属の消防士をしていて、母はベビーシッターをやっていた。自分は毎日、スクールバスで基地の子供達と一緒に、当時都府楼にあったちいさこべ幼稚園に行っていた。幼稚園に行くと園児の半分はアメリカの子供達で、家に帰るとベビーシッターの母に連れられて、毎晩近所の米軍ハウスに行った。家の近くは米軍ハウスが多くて、日本人よりもアメリカ人の家族の方が多く住んでいました。米軍ハウスの住人は将校クラスの人達で、夫婦で夜、ナイトクラブに行っている間、母がハウスの子供達のお世話をしていた。私も毎日、ハウスの子供達と遊んでいたのもので、ものごころがついた頃から英語を話していた。学校にはハーフの子供達も沢山いて、いじめもあった。いじめられてる子を庇うと、庇った子がいじめられたり、子供だけじゃなく大人も心無い言葉をかけたりして、なんでそんなことするのかと思っていた。そばかすだらけだったハーフの子供たちも大人になると、スラっとして見違えるような美男美女になっていた。

中学生になって、学校の英語の授業を楽しみにしていたのに、先生の英語がまったく分からない。教科書を読んでも分からない。アメリカ人達が言う水のことはウォーターではなく、ワラ。私が米語発音で教科書を読むと先生からそれは間違いだと指摘される。中学、高校の英語はあんまり好きじゃなかった。

父が基地のPXでアップルパイを買ってきてくれて食べた。「うまいなあ。こんなうまいものがあるんだらうか」と思った。そのアップルパイの味が忘れられなくて、大学時代の春休みにアップルパイを食べることを目的の一つに2ヵ月ほどアメリカ横断の旅に行った。10年ぶりにネイティブな英語に触れたら、英語を思い出した。聞いた英語が全部分かる。おいしいアップルパイにも出会うことができた。両親は英語教育を受けていない世代だけど、生活に必要であれば難なく外国語はマスターできるんだと感じた。白木原に住んでて商売している人はみんな英語がしゃべれたんじゃないかな。



写真 67 ちいさこべ幼稚園



写真 68 麻生自転車店（麻生 政昭さん所蔵）

航空自衛官だった昭和 37(1962) 年頃、25 歳のときに、航空自衛隊春日基地に転勤することになった。今の福岡空港国際ターミナル側にコントロールタワーという建物があった。そこの 1 階にあるベースオペレーション（基地のことを管理する部署）にて、アメリカ兵と一緒に働き、日本人は私一人で、会話は英語だった。当時の板付空港は、航空機の離発着はもちろんのこと、駐機場の使用もすべて米軍管轄下であり、日本航空の航空機は、現在の国内線側の駐機場を米軍から借用して運行していた。日本航空と米軍の話がうまくいかないこともあり、私が代役をつとめることもあった。26 歳のころに結婚し、大野城市山田の借家に住むことになり、当初は車を持っていないだったので、飛行場までの通勤は旧 3 号線の山田交差点近くにあった米軍バス停でバスを利用した。春日原発と白木原発のバスが約 30 分ごとに運行していて、もちろん、米軍のバスには普通の人は乗れなかった。ベースでの昼食は、日本円をドルに換え、ベースオペレーションの隣にあるスナックバーを利用し、ハンバーガー等を買って食べた。正式にはダメだけど、制服を着て堂々とスナックバーに入っても、米軍人や日本人従業員の人は誰も何も言わなかった。

当時、米軍機は F-102・105 やファントムが展開していた時期で、ファントムが九大工学部に墜落したとき（昭和 43（1968）年 6 月 2 日）も板付基地にいた。米軍人が現地に行くと反対運動をしている学生に分かるので、私がかかり出され、機体撤収のための切断箇所を見積り、解体して持ってくるため、車に乗りながら道路上の低い電線の高さを棒などで測定した。基地返還運動が活発だった記憶はほとんどないが、黒人差別問題が本国から飛び火した。軍隊は人種差別はご法度のはずだが、一時期異様な状態だったと鮮明に記憶している。心ない軍人から「リメンバー・パールハーバー」と卑下されたこともあったが、終始、毅然とした態度を崩すことはなかったたので、多くの米軍人将校や隊員と仲良く仕事することができた。シーズンになると長い期間をかけてリーグ戦（ナイター）が行われた。自衛隊からは 2 チーム（基地と防空管制群）、米軍からは複数チームが参加し、私は米軍の管制気象チームから出場した。3 塁打を打った同期生と 3 塁ベース上でぱったり出会い、「お前、どうして米軍チームにいるんだ」と言われた。

ある年のクリスマスパーティに米軍司令官から着物を着た妻を同伴しての招待を受け、行ってみたら、日本人の女性は妻一人しかいないし、英語が話せない。仕方がないので「私の妻は英語が全く話せない。みなさま方はせっかく日本に来ているのだから、日本語で話しかけてください」とお願いした。しばらくたってから妻のほうを見ると、部屋の奥のほうで米軍人の奥さんたちに囲まれていた。何をしているんだろうかと心配になって行って見たら、その奥さんたちが辞書を手にしながら、一生懸命かたことの日本語でしゃべってくれていて、なんとか話が通じていた。



写真 69 板付飛行場のコントロールタワー

V. 特論

戦争遺跡からみた大野城市域の特徴

宗像市教育委員会 池田拓

1. はじめに

近年、大野城市域では、大野城市教育委員会（現 大野城市心のふるさと館文化財担当）を中心とした継続的な調査により、近現代の戦争や軍事に関わる戦争遺跡が多く把握されている。こうした活動は、日本が直接経験した戦争の終結からまもなく 80 年が経過する状況で、戦争体験者の減少を背景に、各所に残るモノに注目する動きが日本国内で広がっていることとも軌を一にする。

では、大野城市域にはどのような戦争遺跡があり、そこからこの地域にどのような特徴を見出すことができるだろうか。本稿では、大野城市の戦争遺跡の種別に着目して、大野城市域に生産、軍事・防衛、居住に関わる特徴があることを述べる。さらに、それぞれの特徴が大野城市域に現れた要因について考察する。

2. 大野城市域の戦争遺跡

(1) 81 件の戦争遺跡

現在、大野城市域では戦争遺跡が 81 件報告されている。遺跡の種別では、軍事・防衛：18 件、生産関係 5 件、居住関係：7 件、埋葬関係：3 件、交通・インフラ関係：5 件、記念・慰霊関係：40 件、その他：3 件である。

このうち、10 件は発掘調査によって発見されたが、これまでに遺構の性格や機能の位置づけがされたのはその中で 1 件のみである。その他の遺跡では、横穴式の防空壕（洞窟壕）等が発見されているが、詳細は分かっていない。

(2) 発掘調査で見つかった遺構の概要

本堂遺跡第 7 次調査 本堂遺跡は、三兼池と水城がある地峡部の西端を隔てる丘陵部に位置する。第 7 次調査区は東に向かって開く谷部で、その南側斜面の標高 45 m 付近で洞窟壕が検出された。しかし、調査対象とならなかったため、詳細は不明である。

王城山遺跡第 2 次調査 王城山遺跡は、乙金地区に所在する遺跡で、防空壕が 1 基検出され、複数の遺物も出土した。その後の調査研究により、この防空壕は太平洋戦争末期の地下疎開工場である可能性が高まった²。

防空壕は、その規模や内部の状況まで詳細が記録されている。遺構は調査区の北東部に位置し、床面の標高は約 37 m である。丘陵北側裾部の 2 か所に出入口があり、全体の規模は東西 50 m、南北 35 m 程で、平面形は



写真 1 王城山遺跡第 2 次調査検出地下疎開工場
(大野城市教育委員会 2015 引用)

1 遺跡の種別は、本書で大野城市心のふるさと館文化財担当が設定したものとした。

2 池田拓 2017

コ字形である。遺構各部の大きさは、床面の幅が3 m、床面から天井までの高さが3 mである。東辺部の床面は、南東隅部付近から北側に向かって緩やかな下り傾斜となっている。内部の壁面は全面板張り、20～50 cm 間隔で壁と天井を支える柱材（多くは丸太材）が検出されている。また、床面の複数か所には、機械類を設置するための土台と考えられる遺構が検出された。遺物は、木製柵や木箱、機械類や工具類、ガラス製品、加工痕が残る合板等が出土した。

原口遺跡第4次調査 調査地点は、乙金山から西側に派生する丘陵上に位置する遺跡の斜面部で、発掘調査で防空壕2基が検出された。

A区で検出された防空壕は、1か所の出入口がある直線状の横穴式地下壕である。確認された範囲で西南西方向に1か所の出入口が開き、平面プランはI字形である。長さは丘陵の陥没状況から35 m以上あると考えられている。床面の幅は3.5～3.6 m、天井部までの高さは1.5 m以上あったと考えられている。両壁沿いには1～2 m 間隔で支保と思われる柱材が残る。

C区で検出された防空壕は、1か所の出入口がある直線状の横穴式地下壕である。確認された範囲で南北方向にのび、平面プランはI字形である。残存長は約22 mで、最大幅約3.4 m、高さは崩落のため不明である。両壁際には溝があり、出入口に向かって床面が下り傾斜することや、湧水があることから排水溝の可能性も考えられている。

この2基の防空壕について、報告書では、この防空壕は古野遺跡第3次調査で検出された防空壕と同様に、太平洋戦争末期の疎開工場や燃料資材倉庫の一部の可能性があると述べている（大野城市教育委員会2013）。

古野遺跡第3次調査 調査地点は、乙金山から西側に派生する丘陵上に位置する遺跡の斜面部で、太平洋戦争末期に構築されたと考えられる防空壕が1基検出された。

防空壕は、西北西方向に2か所の入口があり、平面プランはコ字形である。全長約38 m、床面の幅は1.9～2.6 m、天井部は調査時点の地表下約15 mで確認され、床面からの高さは約2 mである。掘削断面は台形である。床面の壁際には、約0.6 m 間隔でピットが規則的に並び、これは支保の柱穴とみられる。また、入口部分に柱穴が多く検出されており、ここを特に補強していた。

遺跡のある地域では、昭和19（1944）年初め頃からの工場疎開で地下壕や谷部を利用した燃料資材倉庫を建設したことが知られており、当防空壕もその際に造られた施設の一部である可能性があるとされる（大野城市教育委員会2015）。

古野遺跡第4次調査 調査地点は、乙金山から西側に派生する丘陵上に位置する遺跡の斜面部で、発掘調査で防空壕2基が検出された。

1号防空壕は、1か所以上の出入口がある直線状の横穴式地下壕である。この防空壕は尾根が最も狭くなる地点に構築されており、床面での標高は約33 mである。確認された範囲で北方向に1か所の出入口が開き、平面プランはI字形である。全長9 m以上、床面の幅は1.5～1.7 mで奥に向かって高くなる。両壁沿いに1.5 m 間隔で柱穴が並び、これは支保と考えられ、出入口付近は間隔が狭く入念な補強を示している。

2号防空壕は、2か所の出入口があるL字形の横穴式地下壕である。北側急傾斜裾部に構築されており、床面での標高は約39.5 mである。北東方向と北西方向に出入口が開き、平面プランは一部がクランク状に屈曲するL字形である。規模は直線距離で南北11 m、東西17 mである。床面の幅は最奥部が最も広く約2 m、出入口が1.0 m、その他は1～1.3 mである。床面は東側出入口からクランク部に向け上り傾斜で最も高くなり、その他はほぼ平坦である。

こうした状況から、2号防空壕は最奥部が主要な空間で、クランク状の構造は爆風を防ぐ効果を意図したものと考えられている（大野城市教育委員会 2017）。

野添遺跡第6次調査 野添遺跡は、上大利地区に位置する遺跡で、1基の洞窟壕が検出された。この遺構は、地元住民の証言から太平洋戦争末期に周辺地域に布陣した陸軍部隊が築造したものと推定されている。

洞窟壕は、複雑な地形の谷部に築造されている。野添遺跡が位置する上大利地区は、入り組んだ丘陵と谷部の池が連なる複雑な地形が広がり、遺構はこうした地形のなかで南西方向に開く谷の突き当りで検出された。標高は約50mである。

壕は確認された限り、1つの入口を持ち奥に向かって直線状に構築されている。安全上の理由から完掘されていないが、入口は谷が開く方向と同じ南西方向の丘陵斜面にあることが確認されている。内部は、床面の幅が約1.5～1.7m、長さは16.5m以上でほぼ水平の平面形I字形、掘削断面形は砲弾形で、高さは約3mである。床面には、入口から約3mの両壁下に柱を立てたと思われるピットが掘られ、このピットから奥に約80cmの地点から、数本おきに間隔が広くなるように丸木が梯子状に配され、丸木の間には約10cmの貼床が施されている。また、両側壁下にも壁沿いに丸木を配している。

この洞窟壕からは、遺構の年代や性格を推測できる遺物は出土していない。そのため、地元住民の証言と、他地域における類例、昭和20（1945）年の大野城市（大野村）内の陸軍部隊の配備状況から、本土決戦準備のために陸軍部隊によって構築されたものと推定されている（大野城市教育委員会 2006）。

後原遺跡第22次調査 アジア太平洋戦争時の防空壕SK14が検出された。防空壕は平面長方形を呈し、長辺2.13m、短辺1.55m、深さ0.55mを測る。底面は平坦で壁面は直立し、断面は箱形を呈す。北東・北西・南西角と東西壁際中央でピットが確認された。統制陶器「岐1088」が出土している。

3. 戦争遺跡の種別からみる大野城市域の特徴

本項では、大野城市内で確認されている遺跡の総数に対する種別の割合を、福岡県内の他地域と比較することで、大野城市域の特徴を明らかにする。

図1は、福岡県内の戦争遺跡の件数が多い大野城市を含む上位5市における戦争遺跡の種別の内訳⁶をグラフ化したものである⁷。このグラフを通して、各地域における遺跡の種別の割合が明らかとなり、そこから各地域の特徴を見出すことができる。県内最多の299件が所在する北九州市は、「軍事・防衛」に分類される遺跡が48%を占める。北九州市は、官営八幡製鐵所や小倉陸軍造兵廠等があったことで、生産関係の施設が集中していたという印象が先行する。しかしこの表からは、実際には軍事施設が集中したことがこの特徴の地域ということが分かる。福岡市、糸島市も最多は「軍事・防衛」で、やはり軍事施設が集中する地域といえる。一方、久留米市は「政治・行政」が最多で、師団衛戍地として軍都の色合いが強く出ている。

大野城市の遺跡は、「軍事・防衛」22%、「生産」6%、「居住」8%、「埋葬」4%、「交通」7%

3 大野城市教育委員会 2006

4 伊藤厚史 1998「愛知県東部における本土決戦準備（2）」『三河考古』第11号

5 大野城市史編さん委員会編 2004『大野城市史』下巻（近代・現代編）、大野城市

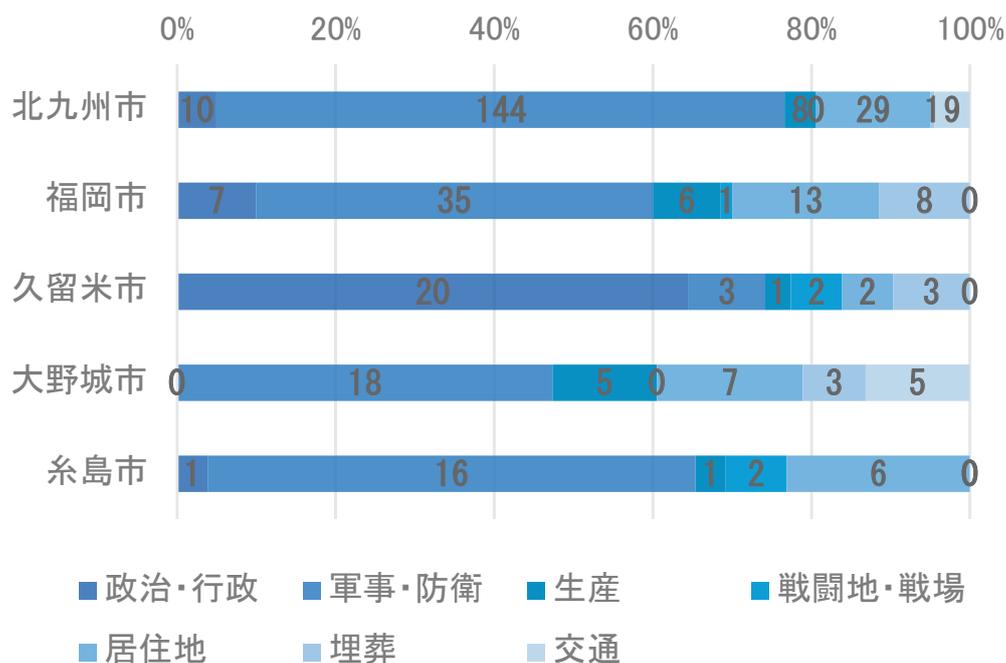


図1 遺跡数と種別の関係

である。大野城市域は「軍事・防衛」の遺跡が多く、「居住」と「生産」がそれに次ぐことが分かる。

「軍事・防衛」に関する遺跡は、ほぼ全てがアジア太平洋戦争末期の昭和20（1945）年に造られた。この時期には、戦局が絶望的に推移する状況で、全国的に本土決戦準備が進められ、大野城市域を含む玄界灘沿岸地域にも、博多湾に連合軍が上陸した場合を想定して陸軍部隊が進駐し、陣地構築を行った。この時期に構築された陣地として周辺で把握されている遺跡には、糟屋郡粕屋町大隈の野戦陣地跡がある⁸。

「居住」に関する遺跡は、アジア太平洋戦争後に占領軍が使用した米軍ハウスが1件あり、その他は発掘調査で検出された防空壕である。この防空壕の詳細は未解明だが、空襲の被害を避けるために構築された疎開工場や軍部隊の陣地である可能性も想定される。

「生産」に関する遺跡は、1940年代前半のアジア太平洋戦争の進展に伴う日本の軍需生産が拡大する時期に造られた。大野城市域で「生産」規模が拡大した背景には、それ以前から航空機生産を行っていた渡辺鉄工所の雑餉隈工場が近傍にあったことや、アジア太平洋戦争中に軍需生産を開始した福岡精工所や日本自動車株式会社が存在したからだろう。

以上から、戦争遺跡からみた大野城市域の特徴は、①本土決戦のための軍事施設の集中、②戦後の占領軍の居住地、③アジア太平洋戦争の進展に伴う生産施設の集中といえる。

6 福岡県教育委員会 2020『福岡県の戦争遺跡』

7 このグラフに「その他」の種別は含まない。「その他」の多くは記念碑で、数が多いことからグラフ化した際に本稿で用いたい種別の多少の特徴が見えづらくなるためである。なお、「その他」の数は北九州市98、福岡市55、久留米市89、大野城市43、糸島市34である。

8 糟屋郡粕屋町大隈には本土決戦準備で歩兵第132連隊の一部が駐屯し陣地構築を行った。当地には監視哨や地下壕、個人用掩体（タコツボ）が多数残っている（福岡県教育委員会 2020『福岡県の戦争遺跡』）。

次節以降では、なぜこのような特徴が大野城市域で出現したのかを考察する。

4. アジア太平洋戦争敗戦頃まで維持された軍需生産

大野城市域では、アジア太平洋戦争の進展に伴う軍需生産の拡大によって、複数の工場が軍需工場化した。年産10万台の自転車の製作能力をもち、九州一円と朝鮮、満州へ出荷していた宮田自転車製作所福岡工場⁹が、株式会社福岡精工所に買収されたのち、昭和16(1941)年10月に海軍管理工場に指定され、水上飛行機のフロートや魚雷の製造を行った。また、自動車修理や航空機部品製造を行っていた日本自動車株式会社福岡工場は、昭和18年(1943)年9月に海軍管理工場に指定され、社名も中央兵器株式会社となり魚雷運搬台車、魚雷部品、航空機部品の製造を始めた。

軍需工場化したこれらの工場のうち、福岡精工所と九州飛行機は、戦局の悪化する昭和19(1944)年以降、空襲による被害を避けるため、乙金の丘陵部等に工場疎開を行った。乙金地区の発掘調査で見つかった

複数の地下壕のうち、王城山遺跡第2次調査で検出された壕はこの時に構築された地下疎開工場で、その他の壕も同じ目的で構築された可能性がある。

こうした軍需工場化とその工場の疎開によって、大野城市域では敗戦に至る時期まで軍需生産が続



図2 全国で構築された地下工場（浄法寺1961引用改変）

けられた。地下工場への疎開など困難な状況でも生産を継続したのは、航空機生産・開発を継続していた九州飛行機への製品供給が必要だったことも要因と考えられる¹⁰。

5. 本土決戦準備

昭和20(1945)年、日本全国で連合国軍の日本本土侵攻を迎え撃つための「決号作戦」準備が進められた。現在では、連合国軍の日本本土侵攻計画「ダウンフォール作戦」が、1945年冬以降の九州南部と関東平野への侵攻計画で、日本軍も連合国軍の計画を的確に予測していたことが知られている。

決号作戦は、後退・持久を考慮しない沿岸要域での徹底的な攻勢作戦とされた。当時の参謀本部第一部長だった宮崎周一の回想によると、決号作戦は文字通り「絶体絶命の一戦」

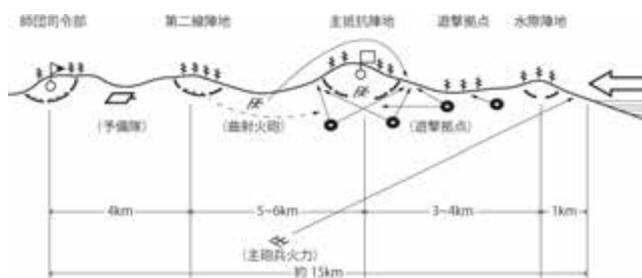


図3 防御陣地編成の一例（『戦史叢書本土決戦準備〈2〉』引用改変）

9 将来的に自動車、オートバイの製造も計画し、軍需用装甲自動車や飛行機の製造も可能な設備を備えていた（赤司2004）

10 九州飛行機は終戦まで航空機の生産と開発を継続し、特徴的な外観の戦闘機「震電」の試作機が1945年8月に初飛行に成功した。

で、「作戦は連続不断の攻勢」をとり「頼むは石に立つ矢の念力のみ」という恐るべき内容で、もはや万策尽きた感がにじみ出ている。

一方、実際に連合軍の上陸・侵攻が想定された地点では、全国同時進行で野戦陣地の構築等が大規模に行われた。その範囲は、日本列島の太平洋側を中心に、朝鮮半島南部に及ぶ。

大野城市域では、関門～前原への連合軍の上陸を想定した第16方面軍¹¹の「陸作第二号に号作戦」のための陸軍部隊進駐と陣地構築が進められた。この作戦は、連合軍が福岡海岸または博多湾に上陸する想定で、博多湾に上陸した際には、「沿岸配備兵団」が配置された福岡平野周辺の主抵抗陣地で時間を稼ぎ、筑後川付近に控える「攻勢兵団」が沿岸部で連合軍を撃破する計画だった。

大野城市域には、主抵抗陣地が構築された地域より後方の「第二線陣地」が構築された。図3は防御陣地編成の一例を示しており、主抵抗陣地の後方に第二線陣地が設定されている。図4は第56軍¹²司令部が作成した「配備要図」で、地下壕が検出された野添遺跡等が位置する上大利～牛頸地域に「予備陣地」が記されている。

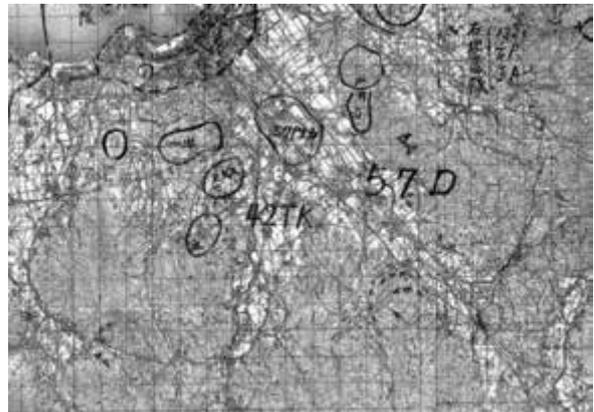


図4 上大利～牛頸地域に記された予備陣地（第56軍配備要図）引用）

予備陣地とは、主抵抗陣地が突破された場合等に備え後方に構築された陣地である。

図3と図4を見比べると、博多湾から上陸してくる敵に対して、水際陣地及び遊撃拠点（福岡市街地）、主抵抗陣地（福岡市街地南郊）、第二線陣地（大野城市域）という直線的な構成が見えてくる。その場合、野添遺跡付近に駐屯していたといわれる野砲兵第57連隊は図3における曲射火砲の位置づけだったかもしれない。

6. 占領軍の居住地

アジア太平洋戦争の敗戦後、日本にはアメリカ軍を中心とする占領軍が進駐した。席田飛行場があった福岡周辺の半径10mile内が占領地区で、大野城市域にも昭和20（1945）年10月24日に米軍部隊が福岡精工所に進駐した。その後、軍需工場だった中央兵器、九州飛行機等にも占領軍が駐屯した。

朝鮮戦争が始まると、板付基地（旧席田飛行場）は朝鮮半島への前線基地としても機能したため拡充された。それに伴い米軍将兵の数も急増し、春日原住宅地区などが建設された。米軍人用の住居は借家として基地外にも建築され、大野城市域と春日市域で500戸程度存在したという。市内には、当時米軍将校が家族と居住した「米軍ハウス」が29棟健在で、大野城市域が占領軍の居住地だったことを直接示す資料として、近年、再評価されている。

一方、御供田第8次調査では、春日原住宅地区の遺構である上下水道管や貯油タンクが検出され、木製鳥居型電柱も報告された。現在、地上では占領軍の巨大施設があったことはわずかに残る建物や市内を通る異様に幅が広い道路等気づかなければほとんど分からないが、地中にはこうした資料が今も多く残っているのである。

11 本土決戦のため1945年2月に編成。九州方面を作戰地域として諸部隊を指揮した。

12 1945年4月編成。第16方面軍の指揮下で九州北部を作戰地域とし諸部隊を指揮した。

7. おわりに

本稿では、戦争遺跡の種別からみた大野城市域の特徴を3点あげ、その要因について考察を行った。大野城市域は、アジア太平洋戦争の期間に軍需工場化した民間工場が敗戦に至るまで生産活動を継続し、その要因として隣接地域に所在した九州飛行機との関係を想定した。また、アジア太平洋戦争末期の本土決戦において、大野城市域が博多湾方向から上陸してくる敵に対する第二線陣地として機能したことを指摘した。このことは、古代にも博多湾方向から侵攻してくる敵を阻止するために市名の由来となった大野城や水城が築かれた歴史を考えると興味深い共通点である。戦後は軍需工場の接収や造成によって占領軍の居住地として機能し、その痕跡は今も地上と地中に残されている。

近年の調査研究により、大野城市内の多くの戦争遺跡が新たに把握された。このことは、近代(または近世)以後の物質資料が希薄な多くの地域に先駆けて大野城市が成し遂げた重要な成果である。

一方、従来把握されていた資料には、発掘調査で見つかった遺構の概要で述べたとおり、その実態が分かっていないものもある。今後、記憶に頼ることができなくなる地域の歴史をより理解するために、こうした資料の解明も重要な課題となるだろう。

参考文献・史料

池田拓 2017「乙金地区遺跡群の地下壕—王城山遺跡の地下疎開工場を中心に—」『大野城市文化財調査報告書 157：乙金地区遺跡群 21』大野城市教育委員会

伊藤厚史 1998「愛知県東部における本土決戦準備(2)」『三河考古』第11号

大野城市教育委員会 2004『大野城市史 下巻 近代・現代編』大野城市史編さん委員会

大野城市教育委員会 2006『大野城市文化財調査報告書 69：牛頸野添遺跡群Ⅲ』大野城市教育委員会

大野城市教育委員会 2013『大野城市文化財調査報告書 109：後原遺跡 3』大野城市教育委員会

大野城市教育委員会 2013『大野城市文化財調査報告書 110：乙金地区遺跡群 7』大野城市教育委員会

大野城市教育委員会 2015『大野城市文化財調査報告書 123：乙金地区遺跡群 12』大野城市教育委員会

大野城市教育委員会 2016『大野城市文化財調査報告書 139：乙金地区遺跡群 15』大野城市教育委員会

大野城市教育委員会 2017『大野城市文化財調査報告書 157：乙金地区遺跡群 21』大野城市教育委員会

大野城市教育委員会 2023『大野城市文化財調査報告書 203：御供田遺跡 6』大野城市教育委員会

浄法寺朝美 1981『日本防空史』原書房

福岡県教育委員会 2020『福岡県文化財調査報告書 274：福岡県の戦争遺跡』福岡県教育委員会

防衛庁防衛研修所戦史室 1971『戦史叢書 本土決戦準備〈1〉—関東の防衛—』朝雲新聞社

防衛庁防衛研修所戦史室 1972『戦史叢書 本土決戦準備〈2〉—九州の防衛—』朝雲新聞社

56A 司令部(昭和20年11月)「第56軍配備要図 於昭和20年8月15日 集成5万分1地形図」『第56軍国土決戦史資料 昭20.11』防衛省防衛研究所蔵

2. 板付基地周辺の米軍ハウスの構造と特徴

九州産業大学 建築都市工学部 住居・インテリア学科 松野尾仁美

1. はじめに

1.1 研究の背景

昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日に日本はポツダム宣言を受諾し、同年 9 月 2 日には降伏文書に署名し、第二次世界大戦が終戦した。その後、日本では連合国最高司令官総司令部 (GHQ) による占領政策が取られた。福岡県の旧日本軍の施設も接収され、大野村 (現大野城市) と春日村 (現春日市) を跨るエリアに板付基地春日原住宅地区が建設された。昭和 25 (1950) 年には、朝鮮戦争が勃発し、板付基地は朝鮮半島に向けた前線基地となり、駐留する米国軍人やその家族が増加し、板付基地春日原住宅地区での住宅不足が顕著になった。この住宅不足を解消するため、板付基地春日原住宅地区周辺には米軍ハウスが建設され、現在も春日市と大野城市に複数残存している。その後、昭和 47 (1972) 年に基地が返還されるまで、地域住民は様々な形で板付基地に関わっており、板付基地を含めて米軍ハウスの存在は、地域社会に多大な影響を与えたと考えられる。基地の返還から 50 年を経た現在では、当時を知らない住民が地域の歴史や文化を知る上で、その遺産である米軍ハウスの存在は重要といえる。

なお、本稿で扱う米軍ハウスとは「1940 年代後半～1970 年頃に米軍が駐留した基地の外に建てられた米兵及び軍属向けの住宅」と定義する。基地内に建設された住宅はディペンデントハウス (以下、DH と記す) とされ、一方、基地外に建設された住宅はオフベースハウスとされていたが、地域住民らは米軍ハウスなどと通称で呼んでいた。これらの米軍ハウスは、板付基地春日原住宅地区内の住宅供給事務所オフベースハウス課 (以下、オフベース課と記す) からハウス組合等を通じて依頼がなされ、土地を所有する日本人オーナーが建設して米軍に賃貸していた。

1.2 既往研究

既往研究では、福生市や入間市など他の地域での米軍ハウスやその活用に関する研究及び調査はなされているが、福岡県板付基地周辺を対象としたものは少ない。その中で、西尾氏ら¹⁾は板付基地周辺の米軍ハウスの建物やその分布状況などの概要を調査し報告している。

前述の西尾氏らの調査は占領下における接収住宅に関する大場氏らの一連の研究といえ、大場氏らはその成果を学術図書²⁾として上辞している。その中の研究の背景で、大場氏は連合軍が維持運営に要する需要を間接調達方式で行ったことを記述している。また、DH 建設全般に関わる権限を有する第八軍司令部は軍内部令の『家族住宅に関する件』を出し、DH 建設計画の手続き、各部隊の建設予定数、設計および仕様など、住宅建設の方針を示したことを明らかにし、その付表『家族住宅の敷地ならびに配置に関する基準』で建築形式などの指示があったと述べている。これらから、DH や接収住宅についての建設資材や人員の調達の仕組みとして、GHQ 自らは建設行為を行わず、日本側への要求により、その需要を満たすことが前提にあったことが理解できる。オフベースハウス建設も同様であったと考えられ、DH に関する記述も参考とする。

また、小泉氏らが占領軍住宅についてまとめた学術図書³⁾は、本研究における重要な文献である。文献の中で『連合軍住宅新築工事標準仕様書』を示し、DH の設計方針について「注目されるのは、資材はもとより設計施工の技術に関して、アメリカ独自の設計施工技術にはこだわらず、わが国

の技術をもとにして建設することを述べていることである。」と記載しており、日本人による設計施工体制が取られたことが把握できる。加えて、昭和 21（1946）年に家族用住宅である DH 2 万戸の建設指示が出されたことの影響の大きさ^{脚註}に言及し、さらには、建設に加え、家具・什器や家電製品などの生産の礎となったとし、日本人の暮らしにまつわる様々な面に影響を与えた社会構造の転換点として位置付けられることを示唆している。

間取りについての既往研究では、藤木氏が戦後日本の住宅形式へのアメリカ近代住宅の影響について研究⁴⁾しており、DH についても言及し「そこで展開された生活は、その設計・建設・製造に携わった人や、それに接した日本人を通して一般の日本人に伝えられ、アメリカ式ライフスタイルの日本への定着に直接・間接の影響を与えたと考えられる。」としている。また、アメリカの住宅近代化の基本的な考え方にふれ、平面的な具体的な特徴として、「①リビング・ダイニングルームと個室の公私室分離型平面、②玄関から直接リビング・ダイニングルームに入り（以下、リビング直入玄関）、そこから寝室、子供室に至る動線を持つ。③廊下は少なく、寝室、子供室の前には浴室をつなぎ、リビングルームに至るプライバシーの高い廊下（以下、私的廊下）がある。④台所はリビング・ダイニングルームに対してセミオープンが多い。⑤子供室は個室が原則だが、一部がつながる個室、二人部屋、寝る場所のみ独立で活動スペースは共用など、育児への多様な工夫がある。⑥浴室は私室側に配置され、主寝室には専用浴室が多い。また、洗面器・便器を備えたフル・バスルームが多く、いずれも密室的空間である。⑦ガレージ回りの生活上有効な配置（物置、台所との関係）、⑧ユーティリティ、ランドリーの設置」をあげている。

1.3 研究の方法と目的

本研究では、実測調査や目視調査に基づく板付基地周辺で大野城市に残存する米軍ハウスの特徴と構造を整理し、現地見学を行なった横田基地周辺地域の米軍ハウスや資料に基づく DH との比較を行う。今後、戦後の住宅の変化を概観し、米軍ハウスが地域の住宅の仕様や間取りおよび生活スタイルに与えた影響を考察しながら、最終的に戦後の住宅変遷における米軍ハウスの位置づけを行うことを目指して、本稿はその基礎資料とすることを目的に、米軍ハウスの間取りや仕様などの調査結果をまとめ、報告するものである。実測調査や目視調査などの現地調査の概要は以下のとおりである。

<現地調査概要>

1) 板付基地周辺における大野城市内の米軍ハウス調査

これまでに、大野城市内に残存する米軍ハウスで、実測調査及び内部の目視調査ができたものは 4 棟である。うち、3 棟については所有者からの聞き取り調査も行っている。調査は、令和 2（2020）年から令和 5（2023）年の間に行い、その調査結果については、2. 板付基地周辺の米軍ハウスの調査にて報告する。

2) 横田基地周辺の米軍ハウス調査

横田基地は現在もアメリカ軍が運用しており、航空自衛隊も所在している。基地は立川市、昭島市、福生市、武蔵村山市、羽村市、瑞穂町の 5 市 1 町に跨っており、周辺には、多数の米軍ハウスがある。令和 4（2022）年 12 月 8 日、9 日の二日間にわたり、瑞穂町郷土資料館けやき館の協力の元、残存する米軍ハウスを見学した。その内容は、3. 文献調査及び他地域調査との比較にて報告する。

2. 板付基地周辺の米軍ハウスの調査

2.1 板付基地周辺の米軍ハウスの特徴

調査を行った米軍ハウスは、一戸建ての木造住宅で、在来工法で建築されている。全て平屋である。いずれも、壁はモルタル塗り、屋根はスレート瓦葺き²⁾の切妻屋根で、モルタル塗り回しの破風が共通した特徴である。出窓がある場合が多く、図1のように出窓下は斜めハンチの形状が外観の大きな特徴となっている。調査した4棟中の3棟は、ペンキで「IAB」(Itazuke Air Baseの略称)と「House Number」(3~4桁の数字)が記されていた。

設備面では、水洗の洋式トイレやバス及びシャワーが備え付けられ、これらを一つにまとめた西洋式となっている。外側に給水塔をもつ場合や、燃料を保管する場所に囲いが設けられている場合もあった。

内部床は原則フローリングであり、調査時には畳敷きとなっている部屋もあるが、その場合は日本人向けの賃貸物件等に利用される際に改変されたものと目される。窓枠と内部建具の色は青緑色などのペンキで塗られており、内壁はペンキで仕上げられていた。実測調査を行った4棟の米軍ハウスは、全て玄関扉を開けて直ぐに土間があり、かつ概ね60mmから150mm程度の段差が設けられている。外観目視の限りでは、建築当初から土間であったと推察される。また、ソテツなどの南国風な庭木が植えられていることが多い。玄関横にはタイル貼りの立方体の台が設けられることもあり、意匠的なアクセントといえるが、その用途などは不明である。

板付基地周辺の大野城市以外で調査した米軍ハウスでは、掃き出し窓となっている箇所が改変されている事例があり、当初は掃き出し窓ではなく、日本人の生活に合わせて改変された可能性が高い。その一方で、大野城市の米軍ハウス③は、所有者の話によると、外周部の建具形式は当時のままであるとの証言があり、テラスに面した建具が掃き出しであった事例である(図2 米軍ハウス③参照)。改変がないと目される腰高の建具には、固定式の網戸が取り付けられていた。

なお、文献³⁾では「ハウスは、外観は木造平屋・屋根はスレート瓦・破風がモルタル塗り・出窓の下が斜め・外壁に『IAB(ITAZUKE AIR BASE)』と三桁の数字による住宅番号が振られていた。内部は、床は板張り・トイレ、風呂は洋式水洗・天井が高いなど米人向けの住宅として造られたことが窺える。」と特徴が述べられ、今回の調査と同様であることが把握できている。

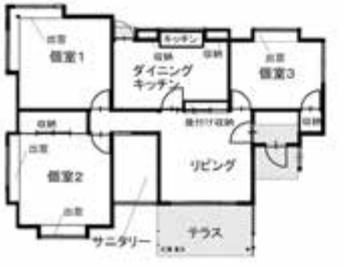


図1 典型的な米軍ハウスの外観：図2の米軍ハウス②

(春日ベース・ハウスの会提供)

2.2 調査を行なった米軍ハウスの事例

実測調査を行った大野城市内の4棟の米軍ハウスの事例を図2にまとめた。間取りは実測調査に基づき作図した。建物概要は、目視調査の範囲であり、解体を伴った調査は実施していない。

	間取り	調査概要・建物概要					
米軍ハウス①		調査日時	2023年03月31日	所在地	福岡県大野城市白木原	ハウスナンバー	不明
		調査者	九州産業大学 松野尾仁美 大野城心のふるさと館 山村智子				
米軍ハウス②		調査日時	2020年02月06日	所在地	福岡県大野城市瓦田	ハウスナンバー	IAB844 (リフトハウス)
		調査者	春日ベースハウスの会 中野秀孝 九州産業大学 松野尾仁美 学生1名 大野城心のふるさと館 山村智子他、鯉島由佳 他1名				
米軍ハウス③		調査日時	2021年04月16日	所在地	福岡県大野城市乙全	ハウスナンバー	IAB2600
		調査者	九州産業大学 松野尾仁美 大野城心のふるさと館 山村智子、鯉島由佳、深町美佳				
米軍ハウス④		調査日時	2023年09月23日,10月22日,11月03日	所在地	福岡県大野城市白木原	ハウスナンバー	IAB733
		調査者	春日ベースハウスの会 古川学, 中野秀孝 九州産業大学 松野尾仁美 学生3名 大野城心のふるさと館 山村智子, 尾川尚香				

* 米軍ハウス④の平面図は、春日ベースハウスの会の古川学氏および、九州産業大学の学生3名(井上葉也、長末愛里、長末優里)が作図した。

* 室名は、米軍ハウスとして使用されていた際の呼び方ではなく、調査時の室の使用状況などを鑑み便宜的にあてたものである。



図2 調査建物概要

1) 間取り

間取りについては、いずれもリビング（以下Lとする）、ダイニング（以下Dとする）、キッチン（以下Kとする）とベッドルーム（個室）の居室及びサニタリーで構成されている。事例の米軍ハウス④は、DKとLの間に間仕切りを兼ねた食器棚があるが、所有者からの聞き取りで、建築当初にはなかったことが確認されており、LDKは間仕切りなどで仕切らない一体的な空間であったと考えられる。文献⁴⁾においてアメリカの近代住宅の平面的特徴であるとしてあげられた、「リビング・ダイニングルームと個室の公私室分離型平面や、玄関から直接リビング・ダイニングルームに入り、そこから寝室、子供室に至る動線を持つ」点は、同様となっている。その一方で、間取りは同一でなく、敷地形状や道路との関係から臨機応変に計画されたものと思われる。

玄関はいずれも半畳程度の土間で、玄関からはLDに直接入る方式のリビング直入玄関となっている。米軍ハウス④は、Lと玄関の間が間仕切りと建具で仕切られているが、所有者によると当初は玄関とLは一体であったとのことである。さらには、4棟ともキッチンに直結する形で扉（勝手口）が設けられている。米軍ハウス③、④にはLに面して、屋根つきのテラスが設けられており、テラスに面した開口部は掃き出し窓となっていた。

ベッドルーム（個室）の数は、1ベッド、2ベッド、3ベッドの3タイプとなっている。なお、延べ面積は、1ベッドは概ね33㎡程度、2ベッドは概ね40～55㎡程度、3ベッドは概ね72～82㎡程度と考えられる。山村氏の報告⁵⁾によると、板付基地春日原住宅地区には4つ（西戸崎を含めると5つ）のハウス組合がありオフベース課との契約に関する手続きを行っていたとし「米軍ハウスの家賃はベッドルーム数に応じておおよそ相場が決まっており、1ベッド30ドル、2ベッド50ドル、3ベッド70から100ドル」と記している。このことからベッドルームの数で賃借料を決めていたと考えられ、今回調査した米軍ハウスは、そのベッドルーム数とも符合している。

2) 仕様

仕様の特徴としては、2.1 板付基地周辺の米軍ハウスの特徴に記載した通りで、いずれも外壁はモルタルで、破風もモルタル塗り回しとし、スレート瓦屋根、斜めハンチつきの出窓などが共通している。内部に目をむけると、天井に木をあしらった意匠（写真1）やキッチンとの境にカーブした垂れ壁がある、あるいはLD空間に棚が設けられているなど、それぞれの米軍ハウスで、個性豊かな表情が見られる。なお、米軍ハウス④の所有者によると、天井の意匠（写真2）は、当初のものか、当初のものに近づけて再現したか、のいずれかが不明であるとのことである。



写真1 米軍ハウス①の天井の意匠



写真2 米軍ハウス④の天井の意匠

3) 構造や工法

構造については在来工法が採用されている。寸法体系は、基本的に日本の寸法を用いていると思われるが、米軍ハウス②では、一部、内寸有効寸法から逆算すると矛盾する箇所が見られた。内壁の厚みなどから、柱や梁は三寸五分(105mm)の材料を用いていると目される。実測調査を行った米軍ハウス②は既に解体されており、仕様の詳細は把握できていない。その他の米軍ハウスについても、下地や床下及び小屋裏の詳細な調査を実施しておらず、細部は不明なままである。

米軍ハウス④については、天井の点検口から小屋組を目視でき、トラス構造が採用されていることを確認している。(写真3) 特徴的なのは、束ではなく、吊り木のような構成で、材を挟む手法が取られている点である。当時の住宅では和小屋組が一般的と考えられ、トラス構造や材を挟み込む工法は珍しかったのではないと思われる。

米軍ハウス④の出窓が剥落している箇所から、外壁の下地を確認したところ、木摺を打ち付け、その上にモルタルを施工していた。(写真4) 木摺の板幅は約45mmでクリアランスは9～15mm程度となっており、モルタルの塗り厚は約15mmで、木摺は地面と並行に固定されていた。



写真3 米軍ハウス④の小屋組



写真4 米軍ハウス④の外壁下地

3. 文献調査及び他地域調査と板付基地周辺の米軍ハウスとの比較

3.1 間取り

文献³⁾では、DHの住戸タイプについて、平面形式は9種類が基本とし、A・B・Cの3タイプに大別されるとし、以下のように整理している、Aタイプは約26坪(85.8㎡)～32坪(105.6㎡)で、寝室が2つと3つのタイプがあり、それぞれ平屋と2階建てがあり、Bタイプは約33坪(108.9㎡)から約46坪(151.8㎡)で、Aタイプ同様に、寝室が2つと3つのタイプがあり、それぞれ平屋と2階建てがあるとしている。Cタイプは、約41坪(135.3㎡)で寝室が4つあるタイプとしている。比較して、板付基地周辺の米軍ハウスの面積が小さいことがわかる。Aタイプは、中尉以下用、B型は佐官用、C型は多人数用との記載があり、こうした部屋数や面積の違いは居住者の階級の違いや利用人数の違いで、オフベースハウスも同様の考え方であったと推察できる。

文献³⁾に記載された間取りを確認すると、板付基地周辺の米軍ハウスと共通するのは、公室のL、D、Kとベッドルーム(個室)の居室及びサニタリーで構成されている点や、玄関から公室に直接Lに入る点があげられる。Kに扉(勝手口)が設けられている点も共通点である。一方で、DHではKが間仕切り及び扉で区切られており、その点が異なり、文献⁴⁾では、台所は使用人制のため独立型になっていると記載されている。また、玄関土間の表記がない点が異なっている。(図3)

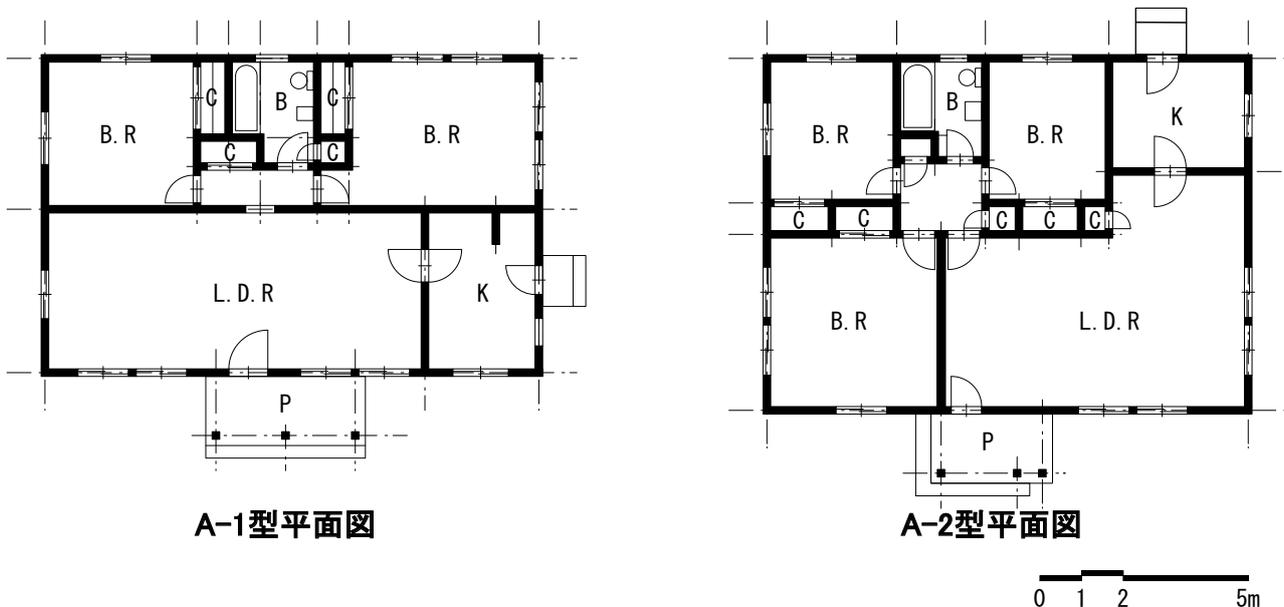


図3 DHのAタイプの間取り【出典：占領軍住宅の記録（下）】

瑞穂町で内部を見学した米軍ハウスは、KとLDの間は壁と建具で仕切られており、Kには勝手口が設けられていた。（写真6）玄関からLDに直接入り、玄関の土間がない点も文献に記載されている間取りと共通している。床材はフローリングで、設計GLから床の高さはわずかである。



写真5 瑞穂町に現存する米軍ハウスの外観



写真6 瑞穂町に現存する米軍ハウスの内観

3.2 構造と工法

文献³⁾では、DHは『日本式洋風構造』が取られたと明記され「この日本式洋風構造とは、具体的には（中略）軸部は明らかに在来の柱と梁による構造であり、一見すると在来工法と変わらない。（中略）耐震性への方策としての筋違が見られないことも注目される。」と記載してある。この筋違がないことに対して、時間の労力の節約や部材の断面欠損を抑える見地から意図的なものであったとし「建物の外壁の下地板を四隅の三尺から六尺幅部分にかけてを斜めに張るといふものであり、同様に火打ち材の代わりに床材の下張り板を斜め張りとするといふものであった。」という代替案がとられていたことを示している。また、小屋組については「軸部が在来の工法に基づいているのに対し『欧米住宅式』と記されている。これは、（中略）トラス構造（図4）のことで、在来の方法とは全く異なるものである。」と述べている。トラス構造が採用された理由として、経済性を重視したことによると記載している。

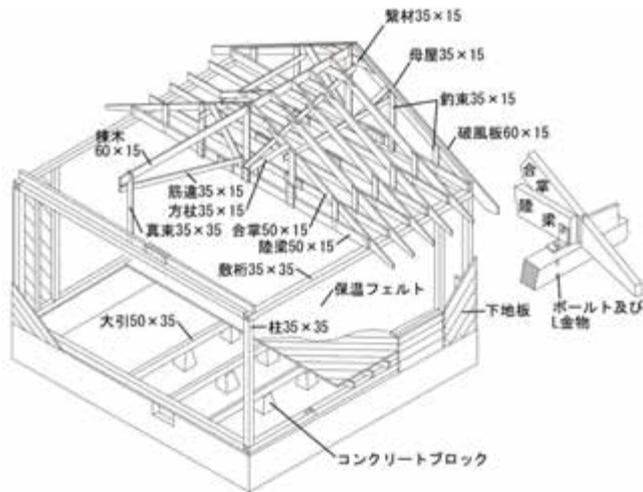


図4 DHの構造【出典：占領軍住宅の記録（下）】

横田基地周辺の瑞穂町で見学できた米軍ハウスの事例では、外壁はモルタルであった。当該建物は、リノベーション工事中で外壁の下地裏を確認できたが、筋違がないことが見て取れる。(写真7)

また、入間市のジョンソントウンのリノベーション後の米軍ハウスでは、平天井を撤去し、既存の小屋組を現しとした意匠から、トラス構造が採用されていたことが把握できた。(写真8)なお、ジョンソントウンの米軍ハウスでは外壁は下見板張りであった。



写真7 瑞穂町の米軍ハウス外壁下地裏



写真8 ジョンソントウンの米軍ハウスの内観

板付基地周辺の米軍ハウス④の小屋組で、簡易的ではあるがトラス構造が採用されていることが確認されており(写真3)、文献³⁾の記載のDHのように、軸組は在来工法、小屋組は『洋風住宅式』が採用されていた可能性が高い。しかしながら、構造的な調査は不十分といえ、未解明の部分が多い。今後、解体や改修工事などのタイミングで、構造が確認できる機会に詳細な調査を実施する必要がある。なお、同文献には、春日原ベースのDH調査⁷⁾で、床下地材の斜め張りが採用されていたという記述があり、板付基地周辺の米軍ハウスでも同様の工法が採用されていた可能性もあり、この点も確認の必要があると考える。

4. まとめ

本稿では、大野城市で調査を行った米軍ハウスの間取りや仕様を整理し、文献に記載されたDHや他地域の米軍ハウスとの共通点、相違点を把握した。間取りで共通するのは、公私室分離型平面であることや、玄関からリビングに直接入る方式のリビング直入玄関となっていることである。文献⁵⁾を確認すると、図5の右は大正11(1922)年に生活改善同盟会が博覧会にした居間中心型住宅であり、こうした居間(リビング)やダイニングといった公室と個室(私室)を分離した公私室分離型平面は、大正時代にはすでに提案されていたことがわかるが、このタイプの間

取りはあまり定着せず、図5左の中廊下型住宅を基本とした間取りが主流となっている。昭和30（1995）年以降の高度成長期の代表的な間取りでも、中廊下型の影響を残した間取りが見られる。（図6）



図5 中廊下型住宅と居間中心型住宅



図6 高度成長期の住宅のタイプ 【出典：住まいを読む—現代日本住居論（図5、6とも）】

文献⁹⁾から、戦後期におけるアメリカの近代住宅の情報の伝達は、書籍や雑誌などに始まり、『進駐軍家族住宅』に参与した日本人建築家による啓蒙記事や計画案の発表によって行われたと考えられる。しかしながら、前述のように、アメリカ式の間取りそのものが一般住宅に広く定着したとは考えにくい。一方で、文献³⁾にあるように、家具・什器や家電製品の普及、生活スタイルの変化などへの影響は大きかったことが推察できる。付加的な要素は改変が行いやすく、カーテンや網戸などは直ぐに取り入れられていったと思われる。それに対し、間取りを含めた構造躯体に関わる大掛かりな部分は急激に変化せず、かつ、従前の暮らしを反映された間取りと折り合いをつけながら、アメリカ的要素¹⁰⁾が取り入れられてきたと思われる。

構造や工法についても同様で、筋違をなくす工法や小屋組のトラス構造は、戦後の一般住宅ではあまり普及していないと思われる。この点については、構造や工法の調査が不十分であり、今後、更なる調査を行う必要がある。

今回の調査での板付基地周辺の大野城市の米軍ハウスと他地域との違いを見ると、斜めのハンチがある出窓、玄関土間があげられ、これらは板付基地周辺の米軍ハウスの特徴である可能性が高いが、沖縄、佐世保など未調査の地域も多く、事例を収集し、さらなる比較分析が必要である。

今後は、調査分析を継続し、戦後の住宅がどのように変化したかを整理した上で、米軍ハウスが地域の住宅の仕様や間取り及び生活スタイルに与えた影響を考察しながら、戦後の住宅変遷においての米軍ハウスの位置づけを行う必要がある。このことは、米軍ハウスを戦争遺産として過去のものにとどめるのではなく、歴史的背景をふまえながら、現在につながる人々の生活と関わる影響を紐解くために重要であると考えている。

謝辞

米軍ハウスの調査にご協力いただきました所有者及び居住者の皆様には、この場を借りてお礼を申し上げます。実測調査は、春日ベース・ハウスの会や大野城心のふるさと館との合同で行い、春日ベース・ハウスの会の中野秀孝会長、古川学氏、大野城心のふるさと館の山村智子氏、深町美佳氏、尾川絢香氏、前職員で愛知県陶磁美術館の鮫島由佳氏には、大変お世話になりました。また、瑞穂町郷土資料館けやき館の関口健氏、(株) JAPAMA の高山豊氏、米軍ハウス所有者の村木大樹氏には、現地調査で大変お世話になりました。(株) 磯野商会の磯野達夫氏、磯野章夫氏には写真や資料の提供にご協力頂き、ありがとうございました。

参考文献

- 1) 西尾聡基・大場修・他5名, 占領下福岡における施設接収と米軍ハウス—占領下日本の都市・住宅に関する研究その12—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(中国), pp241-242, 2017年8月
- 2) 大場修他5, 占領下日本の地方都市, 思文閣出版, 2021年5月
- 3) 小泉和子・高藪昭・内田青鞞, 占領軍住宅の記録(下), 住まいの図書館出版局, 1999年2月
- 4) 藤木忠善, 戦後日本の住宅形式形成過程におけるアメリカ近代住宅の影響—日本人に適した住宅原案型提案への準備研究—, 住宅総合研究財団 研究年報 No.21, 1994年, 研究 No.9312
- 5) 山村智子, 大野城市近現代史(1) 板付基地春日原住宅地区と米軍ハウス, 西日本文化, 西日本文化協会編(507), pp23-27, 2023-07
- 6) 鈴木成文, 住まいを読む—現代日本住居論, 株式会社建築資料研究社, 1999年2月
- 7) 片野博, 連合軍家族向住宅建設に関する調査報告(福岡県春日原ベースの場合), 日本建築学会九州支部研究報告, 第27号, pp289-292, 1983年3月

脚注

- 1)
参考文献3)では、GHQによる約2万戸の占領軍の家族住宅の建設を命じられたことに言及し「敗戦直後で極端に物資が欠乏していた中で、膨大な量の、しかも高いレベルの建築と家具・什器から家電製品までをきわめて短期間に生産しなければならないことになったわけである。(中略) 大変難事業ではあったが、しかしこれを遂行したことによって建設業をはじめ、家具・什器、電気業界はいずれも復興の手がかりを掴むことができ、戦時生産から平時生産への再転換が急速に促進されたのである。」と述べ、産業構造への影響に言及している。
- 2)
参考文献1)では、スレート瓦としており、同一の表記とする。なお、調査を共同で行っている春日ベース・ハウスの会では石材のスレート(粘板岩)と区別するためセメント瓦としている。スレート瓦はセメントに繊維を混入し、強度を高めたもので、セメント瓦も同様であるが、学術的には明確な分類はないものの、厚みが異なるともいわれる。
- 3)
参考文献4)では、「現在の住宅において、定着しているアメリカ的要素には①リビング・ダイニングルームと個室の公私室分離型平面、②リビング・ダイニングルームと接続されたセミオープン台所、③個室化した子供室がある。定着しなかったものには、①リビング直入玄関、②私的廊下、③主寝室の専用浴室、④フレキシビリティの高い子ども室がある。」と記載されている。

VI. 総括

戦争遺跡の概要 大野城市内の戦争遺跡は81件であった。西南戦争（明治10（1877）年）から板付基地春日原住宅地区返還（昭和47（1972）年）までを対象とした、これらの戦争遺跡は『福岡県の戦争遺跡』を参考に本書では8つの種別（1 政治・行政関係、2 軍事・防衛関係、3 生産関係、4 居住関係、5 埋葬関係、6 交通・インフラ関係、7 記念・慰霊関係、8 その他）を設定した。大野城市内の戦争遺跡は2～8の種別に分類し、2 軍事・防衛関係18件、3 生産関係5件、4 居住関係7件、5 埋葬関係3件、6 交通・インフラ関係5件、7 記念・慰霊関係40件、8 その他3件であった。なお、4 居住関係については米軍ハウス29戸を1件、8 その他に含まれる米軍機の墜落・不時着・部品落下等の8地点を1件と数えている。

記念・慰霊関係 西南戦争から太平洋戦争、関連する遺跡は7 記念・慰霊関係が40件と最も多く、明治10（1877）年9月吉日に牛頸の平野神社絵馬堂に奉納された絵馬西南戦争図が最も古い。絵馬は平成12（2000）年の絵馬堂改修時に修復・塗り直しが行われているが、西南戦争中に戦争の様子を伝える錦絵を参考に作成されたと考えられる貴重な絵馬である。西南戦争の絵馬が平野神社に奉納された経緯は不明だが、太平洋戦争中に建立された瓦田の戦没者墓碑銘に「陸軍歩兵一等兵 渋田又市 西南役」と記載があり、大野村から西南戦争に兵役や軍夫で出征した記録が残されている。絵馬の他、石造物29件の内24件は日露戦争から太平洋戦争中に建立されている。日露戦争5件、大正8年出征記念1件、昭和6年上海事変1件、昭和14年出征記念2件（内1件行方不明）、皇紀二千六百年にあたる昭和15年に6件、昭和17～20年太平洋戦争中2件、この他昭和天皇御大典や神社鎮座千年等の記念7件が確認できた。戦後建立された慰霊碑等は5件であり、神社や墓地の敷地及び所有地内に建立されている。太平洋戦争終結後7回忌や13回忌の節目の年に大野町や遺族会等で建立されたが、所有者や管理者が曖昧もしくは不明になっている例が確認された。これは慰霊碑の場所が関係者の高齢化等で慰霊や平和学習の場として使用されなくなっていることがその要因のひとつだと考えられる。

本土決戦準備と地下疎開工場 2 軍事・防衛関係は、昭和20年本土決戦準備で大野村に陣地構築を行った歩兵第117連隊と野砲兵第57連隊、独立照空第21大隊、戦車92部隊と関連する遺跡を含む18件である。3 生産関係5件は昭和18～20年軍需工場の中央兵器株式会社・株式会社福岡精工所と、九州飛行機株式会社雑餉隈工場等の地下疎開工場のほか、王城山遺跡第2次調査防空壕跡が含まれる。4 居住関係は太平洋戦争時の防空壕跡6件である。太平洋戦争時の防空壕跡で後原遺跡第22次調査SK14を除く5件の防空壕跡は大野城市乙金の丘陵地で確認されている。出土遺物から軍需工場に関わる防空壕跡と確認できた王城山遺跡第2次調査以外の防空壕跡は4 居住関係に分類している。しかし第15図で防空壕の規模を比較した結果、王城山遺跡と同規模の平面規模をもつ防空壕は原口遺跡第4次調査A・C区であり、出土遺物はないが軍需工場との関わりが推測される。古野遺跡第3次調査、古野遺跡第4次調査1・2号防空壕は平面形状がコの字形やクランク状を呈すものの、平面規模が前述の防空壕の三分の一程度の広さであった。いずれの防空壕も全体形状の把握や出土遺物の少なさからその性格を確定させることは難しいが、今後事例の増加や他地域の防空壕跡との比較検討で今後、種別が変更になる可能性がある。また調査担当者によると、これら防空壕跡は乙金区画整理事業に伴う事前調査で1,000分の1の地形測量図を作成し、この地形測量図と現地踏査に基づき防空壕跡の位置を推定する作業を行ったところ、地形の切込みや横穴状の落ち込みが確認でき、防空壕跡を発見する手がかりに

なったという。戦争遺跡を埋蔵文化財調査の対象とするかは未だ定まった基準がないものの、大野城市は太平洋戦争末期に本土決戦準備に伴う陣地構築や航空機製造の軍需工場関連の遺跡が牛頸や上大利、乙金、釜蓋の丘陵地に残されている可能性があり、地域性を考慮した取り組みが必要なかもしれない。

板付基地春日原住宅地区 報告の対象とした板付基地春日原住宅地区と関連遺跡については2軍事・防衛関係2件、4居住関係1件、6交通・インフラ関係5件、8その他3件の11件である。

4居住関係に分類した米軍ハウスは「1940年代後半～1970年頃に米軍が駐留した板付基地春日原住宅地区の外の大野城市（当時は大野町）内に建てられた米兵及び軍属向けの住宅」のことである。終戦直後、進駐軍が接収した軍需工場内建物や日本家屋等の接収住宅は対象としていない。多い時で400戸以上建築された米軍ハウスは、現在大野城市内に29戸残存していることが判明した。現存する米軍ハウスも空き家や居住状況が不明の場合、老朽化や税金対策で解体される可能性がある。悉皆調査を実施した平成31年以降解体された米軍ハウスは少なくとも5戸あり、所有者と連絡が取れた場合のみ記録調査を実施しているが、記録が取れた米軍ハウスはわずか1戸であった。本書の特論で松野尾氏は「米軍ハウスが地域の住宅の仕様や間取り及び生活スタイルに与えた影響を考察しながら、戦後の住宅変遷における米軍ハウスの位置づけを行う必要がある」と記され、他地域との比較検討も含めて米軍ハウスの記録調査や所有者及び居住者への証言調査を継続して行う必要がある。板付基地春日原住宅地区や白木原ベース通りの痕跡が殆ど残されていない中、大野村から大野町、大野城市に至るまでの戦後復興や、当時の暮らしぶりを思い起こさせる装置であり、米軍ハウスはかつて基地の町だったことを伝える唯一の建造物である。

戦争と基地の記憶と記録 これまで戦時中や板付基地に関わる証言を広く市民の方々から収集する目的もあり、大野城心のふるさと館で継続して戦争や板付基地に関する展示や冊子の刊行を行った。太平洋戦争終結から77年、板付基地春日原住宅地区撤収から50年の節目も重なり、結果5年間で60名を超える市内外（海外含む）の方々からの証言を得ることができた。しかし太平洋戦争時や、太平洋戦争終結直後から朝鮮戦争頃の板付基地に関する証言は対象年齢が80～100歳を超えており、コロナ禍も重なり対象者に会うことも叶わず十分な調査を行えなかった。戦時中の証言調査は時の経過と共に大変厳しい状況になっているが、本書でも掲載している『ビルマ戦争の手記』や『山上高太郎日記』のように戦争中に記した個人の記録が今後更に重要になっていくと考えられる。また太平洋戦争終結直後の大野村に進駐軍が板付基地春日原住宅地区を設置し、国外で勃発した朝鮮戦争やベトナム戦争は基地の町・大野町の経済や暮らしに良くも悪くも多大な影響を与えていた。本書に掲載した証言はほんの一部に過ぎない。証言者の年齢や性別、職業、居住地域により内容は千差万別であるが、基地があった頃の大野町の実情を伝えるためには今後も証言をより多く収集・公開することが必要である。本書の刊行や展示での情報公開により個人の記憶が次世代に語り継がれ、戦争や地域の戦後復興、そして平和について考慮する一助になると考えている。

今後の戦争遺産の保護 今回、戦争遺産報告書をまとめたところ、大野城市内には、意外に多くの戦争遺産があることが分かってきた。大野城市の戦争遺産は、本土決戦の最前線となり、戦後は米軍が駐留したことにより、当時のまちの景観を変えていったことによるものである。米軍が去り、戦後80年近くが経ち、新しい街の形に移り変わっていく中で、戦争遺産は次第にその数を減らしているが、その全貌を明らかにするにはいたっていない。今後、戦争遺産の継続した調査とともに、保護の仕組みを整えていくことが必要となる。今後の課題としたい。

第4表 参考文献一覧表

番号	書名
1	財団法人九州経済調査協会 1961 『板付基地の経済』研究報告N o. 90
2	大野町 1961 『国鉄白木原駅開業記念』
3	株式会社善隣出版社 1962 『観光と産業 西日本住宅詳細図 筑紫郡』
4	ちいさこべ幼稚園 1964 『こころのふるさと』（昭和38年度在園記念ちいさこべ幼稚園）
5	板付・雁ノ巣基地移転促進協議会 1971 『板付・雁ノ巣基地の概要』
6	株式会社ゼンリン 1972 『ゼンリンの住宅地図 大野城市 春日市 那珂川』
7	遠藤樹之助・加藤直勝編 1979 『写真集郷土部隊の戦歴』（秋田県の戦友Ⅱ） ツバサ広業株式会社
8	大野城市教育委員会 1989 『大野城市の文化財第21集<大野城市の絵馬>』
9	大野城市史編纂委員会編 1990 『大野城市史』（民俗編）
10	春日市史編纂委員会編 1994 『春日市史中巻』（近代・現代・農業水利）
11	大野城市 1995 『終戦50周年記念 戦争体験記（世界の恒久平和を祈念して）』
12	粕屋町教育委員会 1997 『平成9年募集－戦争体験記－』
13	石野田豊 1997 『基地物語』
14	大野城市立大野中学校選択社会科 1999 『アメリカ軍がこの町にいた頃』
15	大野城市史編さん委員会編 2004 『大野城市史下巻』（近代・現代編）
16	大野城市 2004 『大野城市のいしぶみ』
17	大野城市教育委員会 2006 『牛頸野添遺跡群Ⅲ～第6・8次調査～』大野城市文化財調査報告書第69集
18	大野城市教育委員会 2007 『大野城市の文化財第39集 大野城市の遺跡⑩南大和編』
19	大野城市教育委員会 2008 『牛頸本堂遺跡群Ⅶ～第7次調査～』
20	福岡県教育委員会 2009 『水城跡上巻』
21	福岡県教育委員会 2009 『水城跡下巻』
22	大野城市教育委員会 2013 『後原遺跡3－第22次調査－』大野城市文化財調査報告書第109集
23	大野城市教育委員会 2013 『乙金地区遺跡群7～原口遺跡第1～4次調査～』大野城市文化財調査報告書第110集
24	大野城市教育委員会 2015 『乙金地区遺跡群12～古野遺跡第2・3・5次調査～』大野城市文化財調査報告書第123集
25	大野城市教育委員会 2016 『乙金地区遺跡群15～王城山遺跡第1・2次調査～』大野城市文化財調査報告書第139集
26	大野城市教育委員会 2017 『乙金地区遺跡群21～古野遺跡第4次調査～』大野城市文化財調査報告書第157集
27	大野城市教育委員会 2018 『大野城市の文化財第48集 大野城市の遺跡⑫乙金地区遺跡群総集編』
28	春日ベース・ハウスの会 2019 『福岡県春日市内の米軍ハウス調査記録 米軍ハウスの世界～あのころ、春日のまちにアメリカがあった～』
29	福岡県教育委員会 2020 『福岡県の戦争遺跡』福岡県文化財調査報告書第574集
30	大野城市教育委員会 2020 『大野城市の文化財第50集 まぼろしの思水園』
31	大野城市教育委員会 2021 『大野城市の文化財第51集 大野城市の戦争とくらし』
32	大野城市教育委員会 2021 『御供田遺跡5～第3・4・5次調査～』大野城市文化財調査報告書第190集
33	松野尾仁美、中野秀孝、山村智子 2021 「春日ベース・ハウスの会を中心とした板付基地周辺の米軍ハウスに関する保存調査活動及び地域貢献活動」『第16回住宅系研究報告会（2021）』 日本建築学会建築書店
34	大野城市 2022 『大野城市の文化財第52集 かつて、大野の町にアメリカがあった。』
35	山村智子 2023 「大野城市近現代史1 板付基地春日原住宅地区と米軍ハウス」『西日本文化』（No507）
36	大野城市 2023 『御供田遺跡6－第8次調査－』大野城市文化財調査報告書第203集
37	山村智子 2024 「大野城市近現代史2 白木原ベース通りの記憶」『西日本文化』（No508）
38	熊本市田原坂西南戦争資料館 ミニ展示配布資料 『二枚の絵馬 描かれた西南戦争－絵馬にみる戦争体験と祈り－』
39	山上高昭所蔵 『山上高太郎日記』
40	井手勲所蔵 『戦時物語』

※番号は第1表 大野城市の戦争遺跡一覧表の文献の番号に対応している。

第5表 大野城市収蔵資料一覧表

番号	名称	種別	使用場所	内容・由来	使用年代	寸法(cm) ①高さ②幅③厚さ④直径
1	陸軍航空服	軍事関係	不明	航空機に搭乗する際に防寒目的で着用するもので、内側には毛皮が使用されている。「昭和19年広島陸軍被服支廠製」と印字されたタグが縫い付けられている。広島陸軍被服支廠では陸軍兵士の軍服や靴を製造・保管していた。	昭和19(1944)年製造～終戦	①146 胴囲110 股上76
2	軍服(ロングコート)	軍事関係	大野城市下大和	陸軍一等兵が軍服の上に着用するコートで、緑色の生地に金のボタンが付いている。	明治37(1904)年頃～明治40(1907)年頃	①102 胴囲100
3	軍帽	軍事関係	宮崎県	陸軍将校が着用していた略帽。戦闘や訓練の際に用いた。	太平洋戦争中	④23
4	軍帽	軍事関係	大野城市下大和	陸軍一等兵が着用していたもので、内側に「クルメ ソントク帽子店」と印字されたタグが縫い付けられている。正面には金属製の星章がついている。	明治37(1904)年頃～明治40(1907)年頃	④23
5	詰襟軍服(上着)	軍事関係	大野城市下大和	陸軍一等兵が着用していたもので、緑色の生地に金のボタンが付いている。	明治37(1904)年頃～明治40(1907)年頃	①64 胴囲84
6	軍服(上着)	軍事関係	大野城市下大和	陸軍一等兵が着用していたもので、緑色の生地にプラスチック製の茶色のボタンが付いている。	明治37(1904)年頃～明治40(1907)年頃	①64 胴囲84
7	バッジ(防空)	軍事関係	不明	「防空」の文字と青く塗られた航空機の絵が刻まれている。	不明	②2
8	階級章(襟章)	軍事関係	不明	陸軍一等兵が使用していた階級章で、襟につけて階級を示す。	太平洋戦争中～終戦	①1.8 ②4
9	階級章(肩章・襟章)	軍事関係	大野城市下大和	陸軍曹長の肩章が8点、陸軍軍曹の肩章が2点、陸軍准士官の肩章が2点、陸軍准尉の襟章が2点。肩や襟につけて階級を示す。	明治37(1904)年頃～明治40(1907)年頃	肩章 ①2.7 ②9 ③0.5 襟章 ①2 ②4 ③0.5
10	木銃	軍事関係	大野城市乙金	国民学校で剣術等の訓練、その他銃の扱い方、行進等の訓練の際に使用した。大野小学校でも訓練が行われていた。	昭和16(1941)年頃～昭和20(1945)年頃	長さ152
11	薙刀	軍事関係	不明	国民学校で軍事教育として行われた武道で使用した。「八幡■学校」と焼印が入っている。	昭和16(1941)年頃～昭和20(1945)年頃	長さ165
12	写真機	軍事関係	福岡県	軍事視察用の航空機より撮影する写真機で、ケースの中にはカメラ、フィルム枠2点、遮光器3点が入っている。「昭和17年1月製 六櫻社」と文字が刻まれている。	昭和17(1942)年1月～終戦	ケース ①24 ②23.7 ③18.5 カメラ ①12 ②14 ③12
13	鞍	軍事関係	大野城市下大和	小倉憲兵隊の将校が使用していた軍馬用の鞍。将校には隊用馬が与えられ、馬に乗ることができた。	太平洋戦争中～終戦	①31 ②横52 ③51
14	軍隊手帳(抄入)	軍事関係	大野城市下大和	補充兵として久留米師団の西部第54部隊に所属し、輻重兵として中国に渡り参戦後疾病の為帰国したこと等、退官するまでの経歴が書かれている。	昭和12(1937)年～昭和15(1940)年	①25 ②18
15	軍隊手帳	軍事関係	大野城市下大和	歩兵第24連隊へ入隊し、明治37(1904)年3月20日に門司港を出発し大連へ出兵した経歴等が書かれている。勅諭、勅語、心得が記載されている。	明治37(1904)年～明治40(1907)年頃	①12.2 ②8.5 ③8.5
16	軍隊手帳	軍事関係	福岡県嘉麻市	西部第66部隊に入隊し、昭和15(1940)年12月1日より27日まで支那事変に従事した後、小倉陸軍病院に転属した経歴が書かれている。勅諭、勅諭、心得が記載されている。	昭和15(1940)年～終戦	①12.6 ②8.6 ③0.9
17	補充兵手帳	軍事関係	福岡県嘉麻市	福岡連隊に所属し、第二種輻重兵特務兵の第一補充兵役に編入したことが書かれている。勅諭、勅語、詔書・誓詞・心得・軍歌等が記載されている。	昭和8(1933)年～終戦	①12.1 ②9 ③0.4
18	輻重兵操典	軍事関係	大野城市下大和	食糧・被服・武器・弾薬などを輸送・補充する部隊の兵士が使用した教本で、乗馬訓練・自動車の訓練について記載されている。	昭和13(1938)年3月10日発行	①10.6 ②7.5 ③1
19	梱包積載教範	軍事関係	大野城市下大和	食糧・被服・武器・弾薬などを輸送・補充する部隊の兵士が使用した教本で、梱包・駄載・車載等について記載されている。	昭和10(1935)年9月20日発行	①11 ②7.5 ③0.6
20	『軍隊実用習字帖』	軍事関係	大野城市下大和	勅諭等軍隊の兵士が使う用語の習字帖。三輪杉根著 岡本偉業館・富田文陽堂発行	大正6(1917)年12月5日発行	①18.7 ②12.9 ③0.8
21	『満州事変勃発満四年 日満関係の再認識に就いて』	軍事関係	大野城市下大和	日満関係について記載されている小冊子。陸軍省発行	昭和10(1935)年9月発行	①18.7 ②12.7 ③0.1
22	講話資料	軍事関係	大野城市下大和	陸軍記念日などの講話資料として将校の作業を収録した冊子。陸軍省発行	昭和6(1931)年2月発行	①18.7 ②12.8 ③0.9
23	『頭書軍人一般心得 陸海軍人往復用文』	軍事関係	大野城市下大和	軍人の諸願届の文例や手紙の文例が記載されている。野澤潤著 岡本偉業館発行	明治38(1905)年4月12日発行	①12.7 ②9.2 ③1.6
24	『訓練教程』	軍事関係	大野城市下大和	勅諭や訓練等について記載されている。成武堂発行	大正15(1926)年2月20日発行	①12.9 ②7.4 ③3
25	『担架教程』	軍事関係	福岡県久留米市	補助担架卒が使用した教材で、担架術や手当ての方法等が記載されている。兵用円書株式会社発行	大正8(1919)年12月25日発行	①9.3 ②12.9
26	『新曲ペーパー軍歌』	軍事関係	大野城市下大和	手のひらに収まる大きさの軍歌集。兵書刊行会発行	昭和7(1932)年4月3日発行	①6 ②7.5 ③1.7
27	『輝く陸軍写真帖』	軍事関係	大野城市下大和	陸軍の訓練や部隊についての内容が写真とともに記載されている。国防習識普及会編集 文社社発行	昭和8(1933)年2月5日発行	①19 ②25.8
28	『駐満記念写真帖/野砲兵第24連隊』	軍事関係	大野城市下大和	満州派遣を記念して作られたアルバム。集合写真等18枚の写真が貼られている。	昭和11(1936)年頃発行	①13.5 ②32.7 ③2.4
29	『支那事変戦跡の栞』上巻(河北・蒙境地区・山東・山西の部)	軍事関係	大野城市下大和	支那事変勃発1周年に刊行され、将兵の慰問品として分配された。支那事変の戦闘記録や作戦経過、河北省・蒙境地区・山東省・山西省の沿革、人口、名勝等が白黒写真とともに記載されている。陸軍恤兵部発行	昭和13(1938)年発行	①10 ②13.3 ③1.5
30	『支那事変戦跡の栞』中巻(江蘇・浙江・河南・安徽の部)	軍事関係	大野城市下大和	支那事変勃発1周年に刊行され、将兵の慰問品として分配された。支那事変の戦闘記録や作戦経過、江蘇省・浙江省・河南省・安徽省の沿革、人口、名勝等が白黒写真とともに記載されている。陸軍恤兵部発行	昭和13(1938)年発行	①10 ②13.3 ③1.5
31	『支那事変戦跡の栞』下巻(江西・湖北・湖南・広東・福建・広西・四川・雲南・貴州・陝西の部)	軍事関係	大野城市下大和	支那事変勃発1周年に刊行され、将兵の慰問品として分配された。支那事変の戦闘記録や作戦経過、江西省・湖北省・湖南省・広東省・福建省・広西省・四川省・雲南省・貴州省・陝西省の沿革、人口、名勝等が白黒写真とともに記載されている。陸軍恤兵部発行	昭和13(1938)年発行	①10 ②13.3 ③1.5
32	『聖戦記念 第1集 牛島部隊』	軍事関係	大野城市下大和	支那事変出征を記念して発行された写真集。鹿児島島の第6師団歩兵第36旅団の写真が文章とともに記載されている。三益社発行	昭和12(1937)年発行	①20 ②26.5 ③2.8
33	『聖戦記念 第3集 久留米部隊』	軍事関係	大野城市下大和	支那事変出征を記念して発行された写真集。久留米の第18師団の写真が文章とともに記載されている。大亜公司発行	昭和12(1937)年発行	①20 ②26.5 ③2.8
34	『皇威輝く中支之展望 上海・南京・無湖・蘇州・杭州』	軍事関係	大野城市下大和	上海、蘇州、杭州等の風景写真と日中戦争の写真が文章とともに記載されている。三益社編集・発行	昭和13(1938)年8月25日発行	①20 ②27.5 ③1.8
35	賞与(支那事変 行賞一時賜金)	軍事関係	大野城市下大和	支那事変で功績のあった兵士などに贈られる国債。「支那事変行賞一時賜金」と書かれた封筒に「支那事変ニ於ケル功ニ依リ勲七等瑞宝章及金参百円ヲ授ケ賜フ」と書かれた賞状と「支那事変行賞賜金国庫債券受領前ノ注意」と書かれた紙、「勲章佩用心得」が同封されている。	昭和15(1940)年4月29日発行	封筒 ①22.5 ②35.5 賞状 ①22.5 ②31 支那事変行賞賜金国庫債券受領前ノ注意 ①25.5 ②35.5 勲章佩用心得 ①20.4 ②14.8
36	支那事変従軍記章	軍事関係	大野城市下大和	支那事変に従軍した兵士などに授与された勲章。	昭和14(1939)年頃以降	記章 ④3 略章 ①1 ②7.4
37	支那事変従軍記章	軍事関係	大野城市下大和	久留米師団の西部第54部隊に所属の陸軍輻重兵一等兵が支那事変に従軍した際に授与されたもの。略章が付いている。	昭和15(1940)年以降	記章 ④3 略章 ①1 ②7.4
38	支那事変従軍記章之証	軍事関係	大野城市下大和	久留米師団の西部第54部隊に所属の陸軍輻重兵一等兵に支那事変従軍記章とともに授与されたもの。	昭和15(1940)年4月29日発行	①29.8 ②42
39	軍人傷痕記章	軍事関係	大野城市下大和	負傷したり病気にかかった兵士などに授与された記章。久留米師団の西部第54部隊に所属の陸軍輻重兵一等兵に授与されたもの。	昭和17(1942)年以降	①29.5 ②41.8
40	軍人傷病記章授与証書(筒入り)	軍事関係	大野城市下大和	軍人傷病記章とともに授与された。久留米師団の西部第54部隊に所属の陸軍輻重兵一等兵のもので、筒は郵便小包として使用された。	昭和17(1942)年5月25日発行	①29.8 ②42
41	勲八等白色桐葉章	軍事関係	大野城市下大和	軍人に対して広く授与された勲章。	昭和15(1940)年以降	勲章 ①2.7 ②3 略章 ④1
42	勲八等白色桐葉章	軍事関係	福岡県	軍人に対して広く授与された勲章で、戦時中ビルマで戦死した際に授与されたもの。	昭和19(1944)年頃以降	勲章 ①7.5 ②4 略章 ④1.5

番号	名称	種別	使用場所	内容・由来	使用年代	寸法(cm) ①高さ②幅③厚さ④直径
43	勲八等白色桐葉章	軍事関係	不明	軍人に対して広く授与された勲章。	明治8(1875)年頃以降	勲章 ①7.5 ②4 略章 ④1.5
44	勲八等瑞宝章	軍事関係	大野城市下大和	国家または公共に対し長年にわたり従事し功績をあげた人に授与された勲章。 陸軍衛生准尉のもの。	昭和15(1940)年以降	記章 ①4 ②4 略章 ①1.5 ②2.4
45	功七級金鶏勲章	軍事関係	大野城市下大和	功績のあった軍人および軍属に与えられた勲章。	明治23(1890)年頃以降	勲章 ①5 ②4.2 略章 ④1
46	奉公袋	軍事関係	大野城市下大和	出征兵士が戦地に赴くときに軍隊手帳等の必需品や千人針、寄せ書き入りの日章旗を入れていった袋。裏面に「収容品 一、軍隊手帳、勲章、記章 二、適任證書、軍隊ニ於ケル特業教育ニ関スル證書 三、召集及點呼令状 四、其ノ他貯金通帳等應召準備及應召ノ為必要ト認ムルモノ 軍人会館製」と印字されている。	昭和17(1942)年頃～終戦	①22.4 ②33
47	奉公袋	軍事関係	福岡県嘉麻市	出征兵士が戦地に赴くときに軍隊手帳等の必需品や千人針、寄せ書き入りの日章旗を入れていった袋。裏面に「収容品 一、軍隊手帳、勲章、記章 二、適任證書、軍隊ニ於ケル特業教育ニ関スル證書 三、召集及點呼令状 四、其ノ他貯金通帳等應召準備及應召ノ為必要ト認ムルモノ 軍人会館製」と印字されている。	昭和15(1940)年頃～終戦	①22.4 ②33
48	愛国婦人会特別会員章	軍事関係	不明	国防、戦死者の遺族、傷病兵の支援のために設立された組織の会員章で、裏に「特別愛国婦人会会員」と刻まれている。	明治34(1901)年頃～終戦	①3.5 ②2.5
49	愛国婦人会特別会員章	軍事関係	不明	国防、戦死者の遺族、傷病兵の支援のために設立された組織の会員章で、裏に「特別愛国婦人会会員」と刻まれている。	明治34(1901)年頃～終戦	①3.5 ②2.5
50	在郷軍人会会員徽章	軍事関係	不明	主に退役軍人が入隊した組織の会員章で、予備役の軍人の精神上や傷痍軍人、遺族の救済を目的に発足した。	明治43(1910)年～昭和20(1945)年	①2.5 ②1.8
51	靴	衣食住	旅順	戦時中に使用していた靴。旅順の監獄(刑務所)で作られたと思われる。靴底がタイヤのゴムでできており、「GH SPEED」と文字が入っている。	戦時中	①26.5 ②10
52	国民婦人会服	衣食住	大野城市	第2次世界大戦中、国防婦人会の会に参加する時に着用した。袖口が広く、黒いため、着物の上からでも着用することができた。	昭和10(1935)年～昭和20(1945)年頃	①91 胴回り108
53	ハンカチ	衣食住	大野城市筒井	衣料の消費規制のために発行された衣料切符で購入した人絹のハンカチ。	昭和10(1935)年～昭和20(1945)年頃製作	①32 ②35
54	扇風機	衣食住	大野城市筒井	GHQから日本政府に進駐軍用に家具・什器等を生産するようこの指令を受けて日本で作られたもの。電動の扇風機で、当時としては珍しかった。寸法や性能は指定されていた。「12 Inch A.C.Electric Fan Shibaura Engineering Ltd. Tokyo Japan」と文字が刻まれている。	昭和21(1946)年頃～昭和48(1973)年頃	①40 ②33
55	卓袱台	衣食住	大野城市瓦田	満州に疎開する際に持って行った。その後引き揚げの際に持って帰ってきた。	～昭和20(1945)年頃	④47.4
56	盃	衣食住	大野城市下大和	福岡県小倉市で編成された歩兵第24連隊の盃が9点。兵士が凱旋時や兵役を終えた際に餞別や見送りの返礼とした記念品である。「明治廿八年戦役記念歩兵第廿四聯隊第七中隊」と文字が書かれた盃は日露戦争に従軍後、凱旋を記念して作られたものか。「西伯利亚凱旋記念 平城」と文字が書かれた盃はシベリア出兵に従軍後、凱旋を記念して作られたものか。「満州派遣記念 福歩二四 大和」は昭和7年以降、満州への出征を記念して作られたものか。「凱旋記念 福歩二四 浅川」「凱旋記念 福歩二四 井上」「福歩廿四 浅川」「北支派遣 凱旋 西村栄」「龍騎二十八 児島」「福歩廿四 浅川」と文字が書かれている。	明治38(1905)年頃以降	西伯利亚凱旋記念 平城 ④10.8 明治廿七八年戦役記念歩兵第廿四聯隊第七中隊 ④9 凱旋記念福歩二四 浅川 ④5.6 凱旋記念福歩二四 井上 ④6.2 福歩廿四 浅川 ④9.4 北支派遣凱旋 西村栄 ④6.1 満州派遣記念 福歩二四 大和 ④7 龍騎二十八 児島 ④7.4 福歩廿四 浅川 ④7.4
57	盃	衣食住	大野城市下大和	「福岡奉公婦人会 祝凱旋」と文字が書かれている。日露戦争後、福岡24連隊と関係軍人の凱旋を記念したものか。	明治38(1905)年頃以降	④10.8
58	井戸の手押しポンプ外枠	衣食住	不明	武器生産に必要な金属資源の不足を補うために金属回収令が発令され、官民所有の金属類が回収された。回収された井戸のポンプの代用として作られた陶器製のポンプ。茶色の釉薬がかかっている。	昭和18(1943)年以降	①43 ④19 吐出口直径7
59	ミシン	衣食住	大野城市錦町	所有者の嫁入り道具。太平洋戦争時に軍によって集められたが、戦後戻ってきた。	昭和初期～戦後	①36 ②19 ③47
60	大東亜戦争特別据置貯金証書	交易	福岡県田川郡 添田町	郵便貯金法に基づき発行された郵便貯金の証書。	昭和18(1943)年3月1日～昭和20(1945)年5月15日発行	①10.5 ②14.8
61	戦時貯蓄債権	交易	大野城市上大和	国債の消化資金を国民から集めるための少額債券で、臨時資金調整法に基づき発行された。6点。	昭和16(1941)年6月～昭和18(1943)年2月発行	①12.7 ②16.8
62	戦時貯蓄債券	交易	不明	国債の消化資金を国民から集めるための少額債券で、臨時資金調整法に基づき発行された。	昭和15(1940)年発行	①12.7 ②16.8
63	大日本帝国政府賜金国庫債券	交易	長崎県	支那事変に従軍した兵士に発行された債券。	昭和15(1940)年発行	①32.5 ②29
64	徴兵保険案内	交易	不明	加入すると徴兵時に保険金が支払われる保険の案内書。第一徴兵保険株式会社発行	昭和14(1939)年5月	①16.5 ②36
65	戦時貯蓄抽籤月通知	交易	福岡県田川郡 添田町	戦時貯蓄債券の償還時期を決める抽籤結果の通知。8点	昭和27(1952)年8月～昭和40(1965)年5月	①5.5 ②10.8
66	衣類切符	交易	福岡県田川郡 添田町	衣料の消費規制のために衣料切符制度に基づいて発行された。	昭和24(1949)年8月1日発行	①11.8 ②18
67	衣料切符	交易	福岡県糟屋郡	衣料の消費規制のために衣料切符制度に基づいて発行された。	昭和24(1949)年9月30日発行	①11.8 ②18
68	軍事郵便絵葉書	運輸・通信	大野城市下大和	戦地にいる軍人が日本へ、あるいは日本から戦地にいる軍人に向けて送るためのもの。手紙や葉書は、検閲を受ける必要があった。3点	明治27(1894)年～終戦	①8.9 ②56.3 ①9.2 ②15.5 ①8.8 ②13.8
69	恤兵絵葉書	運輸・通信	大野城市下大和	戦地で従軍する将兵に配布される無料の絵葉書。陸軍恤兵部発行 27点	昭和14(1939)年11月発行	①9 ②14
70	軍事郵便	運輸・通信	大野城市下大和	戦地にいる軍人が日本へ、あるいは日本から戦地にいる軍人に向けて送るためのもの。手紙や葉書は検閲を受ける必要があった。	明治27(1894)年以降	①9 ②14
71	軍事郵便綴り	運輸・通信	福岡県嘉麻市	小倉陸軍病院に宛てた手紙。戦地、支那からは検閲の関係で〇〇表記されたり、一部墨塗りされた箇所がある。綴り19セット	昭和14(1939)年以降	
72	軍事郵便綴り	運輸・通信	福岡県嘉麻市	支那事変に従事している軍人に宛てて、家族が知人が書いた手紙。綴り103セット	昭和12(1937)年～昭和14(1939)年	
73	慰問文	運輸・通信	大野城市瓦田	太平洋戦争中、内地から兵隊を激励するために送った手紙の宛名スクラップにしてまとめたもの。	太平洋戦争中	①23 ②15.5
74	防空ゲーム	娯楽	大野城市柴台	戦時中に子どもが遊んだ木でできた玩具。「敵機」「追撃機」「照明燈」「高射砲」「防衛司令部」「家庭防護団」と文字が書かれた駒1点ずつと「警防員」と書かれた駒が4点。	太平洋戦争中	①10.2 ②8 ③1.4
75	『祖国のために』	娯楽	不明	短編の軍事小説集。三省堂出版部編 三省堂発行	昭和16(1941)年11月5日発行	①8.4 ②12.1
76	『時局と貯蓄』	娯楽	不明	大政翼賛会が主催した時局講演会の要旨について記載されている。大政翼賛会宣伝部発行	昭和16(1941)年7月24日発行	①18.3 ②12.8
77	『翼賛壮年叢書 都市団活動の記録-金澤市団- 第21輯』	娯楽	不明	大日本翼賛壮年団石川県金沢市団の活動を記録したもの。大日本翼賛壮年団本部発行	昭和18(1943)年4月25日発行	①18 ②13
78	『翼賛壮年叢書 日本経済学の方角と国民運動 第27輯』	娯楽	不明	国民運動と経済学について記載されている。大日本翼賛壮年団本部発行	昭和18(1943)年7月25日発行	①18 ②13
79	千人針	社会生活	大野城市下大和	出兵時に無事に帰ってくるようにと願いを込めて贈られた。中央にお守りと銭貨のようなものが縫い込まれている。	昭和12(1937)年頃～昭和15(1940)年頃	①16 ②163

番号	名称	種別	使用場所	内容・由来	使用年代	寸法(cm) ①高さ②幅③厚さ④直径
80	内着	社会生活	大野城市下大利	出兵時に安全祈願を込めて近親者などから贈られた。前面に「大義伏敵」の文字と13人の名前が書かれており、背面には「折 武運長久」の文字と日の丸、16人の名前が書かれている。	昭和12(1937)年頃～昭和15(1940)年頃	②52 胴囲82
81	日の丸寄せ書き	社会生活	福岡県嘉麻市	使用者が特攻隊に志願した時に、家族・親戚・友人が日の丸の旗に書いてくれた。「憤激敢闘」の文字と48人の名前、寄せ書きが書かれている。	昭和19(1944)年～終戦	①80 ②115 ③2.5
82	日の丸寄せ書き	社会生活	福岡県嘉麻市	出征時に友人が書いてくれた寄せ書き入り。「忠勇」「健勝」「大業恢弘」「赤心」「祝 出征」「折 武運長久」と書かれている。	昭和15(1940)年12月～終戦	①65 ②78
83	日の丸寄せ書き	社会生活	大野城市下大利	「祈る」「必勝」「赤誠」「武運長久」の文字が書かれている。	昭和12(1937)年頃～昭和15(1940)年頃	①40 ②35
84	国旗(旭日旗)	社会生活	大野城市下大利	旗の片端上下に括り付けるための紐がついている。	昭和12(1937)年頃～昭和15(1940)年頃	①87 ②110
85	快復袋	社会生活	大野城市下大利	快気祝いに贈られたものか。「村童の歌 お米は豊作 ダイコハ豊年 防空 テッペキ ャツペコイク 八■叔父様 祝快復袋」と書かれている。	昭和12(1937)年頃～昭和15(1940)年頃	①20 ②20
86	お守り	社会生活	大野城市下大利	従軍時に携帯していた。木箱の中に布に入ったお守りと虚空蔵菩薩のストラップが入っている。	昭和12(1937)年頃～昭和15(1940)年頃	木箱 ①9 ②6.9 お守り ①5.8 ②7.5 虚空蔵 ①2.5 ②2
87	磁器	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で地下疎開工場があったと推測される防空壕より出土。灰色がかった白色の低圧ノップ碼子1点と防空壕A-1区より外面に「KORAN」とあり佐賀県有田の香蘭社製の内部に鉄棒が残った低圧ビン碼子1点、灰色がかった白色の低圧茶台碼子1点が出土した。いずれも陶器製の碼子である。	太平洋戦争中	低圧ノップ碼子 ①4.9 ④3.3 低圧ビン碼子 ①19.5 ②5.8 ③5.8 低圧茶台碼子 ①6.4 ④7.5
88	ガラス瓶	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕A-1区より、緑がかった透明色で肩部に「KB BREWERY CO LTD」底部に「△ 16」と文字が入っているキリンビール製の飲料用瓶が出土した。防空壕B-1より、淡い緑色で体部に「ヤクルト」と文字が入っている瓶1点、透明色のスクリュウ栓のインク瓶1点、ごく薄い緑色のスクリュウ栓のインク瓶1点が出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①24.2 ④6.2 ①8 ④2.8 ①6.8 ④5.2 ①5.6 ④3.8
89	鉄製品	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕より、黒褐色で周縁部が鋸歯状をしている旋盤のための工具と思われる鉄製品が3点出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①14.7 ②4.5 ③0.9 ①6.1 ②7.51 ③0.36 ①6.1 ②7.51 ③0.36
90	合板	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕より、黄褐色でL字型の内側が鋸歯状の工業機械と思われる合板が2点出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①146.2 ②68.3 ③3.4 ①75.4 ②67.55 ③3.25
91	鉄製品	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕A区より、褐色の工業機械と思われる鉄製品が2点出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①11 ②9 ③6 ①14 ②7 ③4
92	草履	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕B-1区より、黒褐色で木製の草履が2点出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①23 ②8 ③2 ①24 ②7.5 ③2
93	木槌	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕B-1区より、黒褐色の小槌が出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①10 ②7
94	木器	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕B-1区より、黒褐色の木器が2点出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①12 ②2 ①6 ②5 ③3
95	雷車	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕B-2区より、褐色の雷車が出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①14 ③3
96	合板	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕より、褐色の合板が3点出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①42 ②4 ③3 ①10 ②7 ③2 ①25 ②7 ③3
97	配線器具	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕より、白色の配線器具が出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①14 ②9 ③1.5
98	下駄	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕より、黒褐色の下駄が出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①23 ②12 ③3
99	鉄製品	その他	大野城市乙金	王城山遺跡第2次調査で防空壕より、褐色の工業機械と推測される鉄製品が9点出土した。地下疎開工場があったと推測される。	太平洋戦争中	①56 ②3 ③0.3 ①70 ②2 ①32 ②15 ①35 ②22 ①106 ②40 ③20 ①37 ②30 ①15 ②10 ③2 ①15 ②10 ③2 ①52 ②32 ③15
100	小皿	その他	大野城市乙金	古野遺跡第4次調査で2号防空壕より出土した。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使われた。内面に「敵國降伏」外面に「官幣大社宮崎宮」、「博口平口」と文字が彫られている。	太平洋戦争中	①1.75 ④8.1
101	盃	その他	大野城市乙金	古野遺跡第4次調査で2号防空壕より出土した。赤と金で絵付けが施され、「船越」「四歩」と文字が書かれている。	太平洋戦争中	①3.2 ④8
102	湯のみ	その他	大野城市乙金	古野遺跡第4次調査で2号防空壕より出土した。内面に雷文、外面に唐草文、底部外面に連弧文が描かれている。	太平洋戦争中	①4.95 ④7.15
103	線香立	その他	大野城市乙金	古野遺跡第4次調査で2号防空壕より出土した。統制陶器の線香立てで、体部に牡丹の花文と唐草文が描かれている。底部外面に「セ47」と統制番号が印字されている。	太平洋戦争中	①4.8 ④6.2
104	井戸の手押しポンプ外枠	その他	大野城市白木原	後原遺跡第22次調査でSK09の防空壕より出土した。武器生産に必要な金属資源の不足を補うために金属回収令が発令され、官民所有の金属類が回収された。回収された井戸のポンプの代用として作られた陶器製のポンプ。水口下には横書き2段で「新衆特許」「花岡式」の文字が書かれている。	太平洋戦争中	①43.5 上口径18.9 下口径18.3 出水口径7.1
105	椀	その他	大野城市白木原	後原遺跡第22次調査でSK14の防空壕より出土した。底器面に統制番号が「岐1088」と刻印され、焼成後に「許」「27250」と赤印字された統制陶器。	太平洋戦争中	①1.65 ④5.4(復元)
106	絵付け椀	その他	大野城市白木原	後原遺跡第22次調査でSX23 1区より出土した。外面に青色の横線が描かれ、底部には「南45」と刻印されている統制陶器と推測される。	太平洋戦争中	①5.9 ④6.2
107	湯のみ	その他	大野城市上大利	牛頭本堂12次調査で2区攪乱3より出土した白磁の湯のみ。側面に星型のスタンプが入っており、旧陸軍が使用した軍用食器と推測される。	太平洋戦争中	①6.5 ④7.4
108	IABナンバー(844)	衣食住	大野城市瓦田	大野城市内の通称ソテツハウスと呼ばれる米軍ハウスの外壁に書かれていた。「IAB844」と書かれている。IABはItazuke Air Baseの略。	昭和30年代頃建築～令和2(2020)年2月取り壊し	
109	コンセント	衣食住	大野城市瓦田	ソテツハウスで使用されていたコンセント。コンセント穴が2つとコンセントカバーのセット。左のコンセントは縦長の穴の下に横長の穴がついており、「FUTABA」と文字が入っている。右のコンセントは日本の家電に対応しており、「10A250V」と文字が入っている。	昭和30年代頃建築～令和2(2020)年2月取り壊し	①11.3 ②11.3 ③2.8
110	ブレーカー	衣食住	大野城市瓦田	瓦田の米軍ハウスで使用されていたもの。「株式会社関西西二井製作所」と印字されている。	昭和30年代頃建築～令和2(2020)年2月取り壊し	①18.6 ②11.3 ③6
111	アメリカ地図教材	社会生活	大野城市春日原	板付基地春日原住宅地区内の学校で使用されていた吊り下げロール式の教材。「Edited by CHARLES C. COLBY Ph.D. UNIVERSITY OF CHICAGO」「COPYRIGHT DENOYER-GEPPERT CO. CHICAGO」と印字されている。縮尺は1/3,000,000	昭和21(1946)年～昭和47(1972)年	①230 ②160
112	大野町中央公民館定礎碑	社会生活	大野城市曙町	町制20周年記念事業で建てられた大野町中央公民館の定礎碑。板付基地の航空機の騒音を防止するため防衛施設庁より補助金の交付を受けて建てられた旨が刻まれている。中央公民館が解体された際に取り外され、現在は跡地にまどかびあが建っている。	昭和46(1971)年5月14日～平成6(1994)年3月	①42 ②59.5 ③3.3

图版 1



1



2



4. 5



10.11



12



16.17.18.19



35



46



51



52



54

收藏資料(1)¹



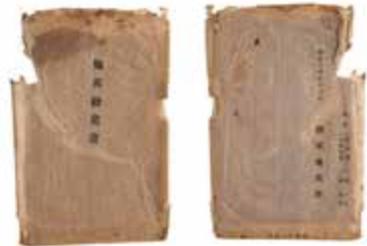
55



56



61



74



79



69



80



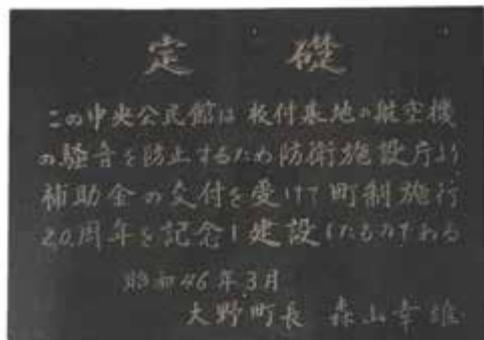
81



109



110



112

報告書抄録

ふりがな	おおのじょうしのせんそういさん							
書名	大野城市の戦争遺産 1							
巻次	1							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第219集							
編著者名	山村智子 (編集)、深町美佳、尾川絢香、石木秀啓、池田拓 (宗像市教育委員会)、松野尾仁美 (九州産業大学建築都市工学部 住居・インテリア学科)							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話092(501)2211							
発行年月日	2024年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		緯° /	経° /	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
大野城市内に所在する近現代の戦争遺産 (石碑等81件等)	おおのじょうし 大野城市内					2019.4.1 ～ 2024.3.31		地域の文化財調査 (戦争遺産)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡等	主な遺物	特記事項			
大野城市内に所在する近現代の戦争遺産 (石碑等81件等)	戦争遺産	近現代	戦争や板付基地春日原住宅地区に関わる遺跡や建造物、石碑、証言等		西南戦争から板付基地春日原住宅地区返還までが対象である。			
要約	大野城市に所在する軍事・防衛、生産、居住、埋葬、交通・インフラ、記念・慰霊、その他 (ダンスホール跡、米軍機の墜落・不時着地点) の西南戦争 (明治10 (1877) 年) から板付基地春日原住宅地区返還 (昭和47 (1972) 年) までの遺跡81件の悉皆調査及び資料調査、証言記録を行った成果を報告した。							

大野城市文化財調査報告書 第219集

大野城市の戦争遺産 1

令和6年3月31日

発行 大野城市

〒816-8510 福岡県大野城市曙町 2-2-1

印刷 株式会社 コーユービジネス

〒812-0111 福岡市博多区博多駅前 3-13-1